七人の追跡者

深川辰巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
七人の追跡者

【Ｎコード】
Ｎ７５６７Ｈ

【作者名】
深川辰巳

【あらすじ】
戦争中のクレイス王国とウィード王国。一進一退の攻防を繰り返し、長期化すると思われたが、クレイスの国宝・印璽が何者かによって盗まれる。この印璽はクレイス王が王たる証であり、かつクレイスを支配する力を持っていた。ウィード王国の手によるものだと判断し、クレイスの王子アレックスを筆頭に７人の追跡隊が編成される。果たして、彼等は印璽を取り戻せるのか……

序章（前書き）

短編を一本しか書いておりませんが、連載に挑戦です

どうぞこれから宜しくお願いいたします

序章

「来よる、来よるわ。ウィード軍め……ざっと見て一万くらいか。儂を打ち破りたければ、この二十倍は持ってきてもらわんとのう」
クレイス王国の将軍メルムークは双眼鏡で彼我の陣形を見比べると、満足そうに笑みを浮かべた。
「ほれ、お主も己の目で確認せよ」
隣に侍っていた男は将軍から双眼鏡を受け取って覗き込むが首をかしげる。
「将軍、我々の戦力は五千……私には一万でさえも、そうやって余裕でいらっしゃるのが不思議なくらいなのですが……
陣形を見られて我が軍が有利だと判断されたのでしょうか？」
「がはは！　参謀デュルクよ！　戦は兵の数では決まるものではないぞ！　考えてもみたまえ。この平原は我が軍の演習場ぞ。いわば我らの庭よ。自分の庭で負けるものか」
将軍は体格と同様、大声が良く響き渡る。この笑い声は司令所から自軍全体に伝わっていた。
「そろそろ開戦じゃな……各隊に伝えよ。銅鑼の号令で手はず通り進げ「将軍！」何事じゃ！　儂の指示を遮るだけの事なのだろうな！」
司令所の傍にそびえ立つ見張り台から、兵士の声が降り注いだ。
「例の……あの男が……！」
「なにぃ！　またあいつか！」
デュルクから双眼鏡をひったくって心当たりを探る。
確かに居た。
号令を待たずに飛び出していった一兵卒が。
「あ、の、お、と、こは！　いつもいつもいつも儂の言うことを聞かずに！」
双眼鏡のレンズにひびが入ってもおかしくないほどに握りしめる

手が震えていた。
「しょ、将軍……」
デュルクは落ち着かせようと近づくが、メルムークが手で制した。
双眼鏡に映る敵軍に一筋の道ができていることを見逃さない。
「分かっておる！　伝令！」
「はい！」
「第三部隊に伝えよ！　奴が切り開き混乱している敵右翼に進撃せよ！」
「はい！」
「第二部隊はその場で待機！　敵左翼の進撃に対し、防衛に徹せよ！」
「はい！」
「しょ、将軍！」
「今度は何事じゃ！」
「奴が、敵右翼から中央へと！」
「何だと！　全く！　儂の作戦変更が追いつかぬではないか！」
がばっと立ち上がって、兜をかぶり始めた。
「将軍、どちらへ？」
「何をぐずぐずしておるか！　奴が中央へ切り進んでいるのは好機ぞ！　我々本隊が一気呵成に攻め込むのじゃ！　遅れるものは置いてくぞ！　馬を持てい！」
「将軍、お待ちください！　おい、何をしている、わ、我々の分の馬も持たぬか！」
次から次へと馬が司令所へと連れてこられてくるが、その合間を縫うように将軍は早々と騎乗して司令所を抜け出す。
「遅い遅い遅い！　戦況は刻一刻と変化するぞ！　早く動いたものが勝つのじゃ！　覚えておけい！　本隊進撃開始じゃ！」
「ああ、お待ちを！」
参謀達がもたついている間にも、メルムークを先頭にした本隊騎馬軍団が敵軍中央へと突撃していった。

序章（後書き）

いかがでしたか？

序章であり、短いですが感想ございましたら宜しくお願いいたします。

第一話　戦況（前書き）

序章に続いて本文の始まりです

クレイスとウィードの戦いはどうなっていくのか……お楽しみください

第一話　戦況

「陛下、現在の戦況について内務大臣ルカスがご報告申し上げます」
クレイス城の大広間では王を前にして、多数の大臣や諸将が集まっていた。
中央には大きな地図が敷かれ、その上に立つ男が自軍と敵軍に色分けした駒を置いていく。
「まず、ウィード軍主力部隊一万がクレイス街道を通ってバラポラス平原に進撃して参りましたが、メルムーク将軍の見事な活躍によりこれを打ち破っております」
ルカスは地図上に置いた駒を動かしながら説明し、最後にウィード軍の駒を足で蹴り飛ばすと広間が歓声に包まれた。
「ふむ、メルムーク将軍には褒美を取らさねばならぬな。将軍にまずは大儀であったと伝えよ」
「陛下のお言葉、将軍が聞けばいっそう陛下のために働かれることでしょう」
恭しく頭を下げるルカスを見て、王は満悦の笑みを浮かべた。
「敵軍の主力部隊を打ち破ったと言うことは、我が軍が勝ったと言うことでよいのかな」
ルカスは一瞬沈黙するが、頭を上げることなく口を開いた。
「陛下、申し上げにくいことですが、勝利を得ているのはメルムーク将軍のみでして、その他の地では敗戦が相次いでおります」
王は眉をひそめてルカスを見下ろす。
「なんと……。具体的に申せ」
「北街道では敵軍二千により、大鷹砦が陥落……。南街道においても敵軍三千により、角突砦が陥落……。また、国境近い村々も占領され、その数はすでに八村」
ルカスが自軍の駒を次々と拾い上げていくたびに、広場内にざわめきが広がっていった。

「ただ辺境の地ではございますが勝利を収めている地がございます」
「それはどこだ」
「我が国北西に位置するホーン渓谷でございます」
ルカスが一歩一歩大股歩きで地図上のホーン渓谷に移動するのを見て、王は苦笑を浮かべた。
「本当に辺境だな……」
ルカスは歩みを止めると、すっと王を見上げる。
「されどこの地、戦略上非常に重要でございまして……」
「どういうことだ？　申してみよ」
「さらに北西に延びるホーン岬の東西は両国の軍港となっており、開戦当初から双方の海軍によるにらみ合いが続いております」
「ふむ」
「敵の狙いはホーン渓谷を越え地上から我が軍を砲撃することにございます。もしも我らの海軍が壊滅すれば、敵は一気にこのクレイス城に攻めてくるところでした。彼らはそれを防いだのです」
国王のみならず、その場に居合わせた者全員が身震いし、そして一様に安堵のため息をついた。
「そのようなことになれば一大事ではないか！　辺境の地といえど守り通した者達を褒め称えねばならぬな。いったいどのような者達なのだ？」
「それが……。百の敵軍を退けたのは……」
ルカスは王をまっすぐに見据えた。
「偵察でホーン渓谷に向かっていた三名でございます」

第一話　戦況（後書き）

百の敵を退けた三名とは……

次回をお楽しみください

第二話　決戦前（前書き）

ホーン渓谷で敵を退けた三名の兵士に、新たな敵が迫ってくる。
前回の二倍の敵に三名は……。

第二話　決戦前

ホーン渓谷。
クレイスとウィードの国境を作るバックボーン山脈北西の終点。
この渓谷を渡す鉄製の大橋はかつて両国の出資による友好の証であった。
しかし、それが今や戦略上重要な拠点と化していた。
大橋の西詰め、即ちクレイス側に長身の男が一人。
渓谷の下から吹き上げる風に深緑色の軍服が揺れるがいっこうに気にする様子はない。
それどころかオオカミのような鋭い眼光で東側を見つめ、今にも腰に差したサーベルを抜き放とうとしていた。
「先の戦いから三日……第二波が来るのがそろそろだとあの男は予想していたな」
大橋の上で横一列に置かれた三つの馬防柵に目をやった。
「丸太の先を削ってX字に組んだだけの即席だが、敵騎兵隊の突撃を防ぐには十分役立ってくれるだろう」
目の前にある柵をつかんで揺らし、しっかりとした作りであることを確認すると満足げに笑みを浮かべた。
「ヘルマン。残念な知らせがある。聞きたいか？　聞きたいだろう。いや、聞け」
突然背後から聞こえてきた声に笑みは消え去り、再びオオカミのような表情に戻っていた。
「このような状況だ。悪い知らせでも情報を一つでも仕入れなければ打開策は生まれない。聞かせてもらおうか、スネイプ」
振り返った先、ヘルマンと変わらぬ長身の男が肩からライフル銃をつり下げて立っていた。
つば広の黒い帽子とサングラス、そして無精ひげで男の表情は読み取れない。

だが、ヘルマンは『スネイプは笑っている』と直感した。
「良い心がけだ。その心がけが戦場で生き残る秘訣だ」
「講釈はいいから早く聞かせてもらおうか。まぁ内容はだいたい想像がついているのだが」
スネイプは肩を少し動かしてほう、と呟いて見せた。
「では答え合わせといこうか」
「援軍はない。そんなところだろう？」
スネイプは両手にはめた黒い皮手袋を叩いて、乾いた音を立てた。
「ご名答だ。褒美はこの拍手くらいしかないが、良いか？」
「ああ、あんたにそれ以上を求めるとしっぺ返しがありそうだからな。
しかし、本隊はここの重要性を理解しているのか？」
今度は大きく肩をすくめて見せた。
「理解しているさ。理解した上で援軍がないとなると、向こうはもっと切羽詰まっているって事だ」
ヘルマンは眉をひそめて呟いた。
「本当に理解しているのか？　怪しいものだ」
「しているさ。俺たちをここに残したのが何よりの証拠さ」
スネイプの口の端が少しつり上がったことをヘルマンは見逃さなかった。
「なるほど。理解していなければ呼び戻す、か。
ときに、援軍要請に行ったクルラは？」
クルラの姿を求めて、前後左右上下見回すが見あたらない。
「あいつか？　あいつならとっくに獅子身中の虫になってもらった」
スネイプは東詰の向こうの森をあごで指し示した。
それにつられてヘルマンも視線を移す。
「そうか。それにしてもスネイプ、敵の次の襲撃は今日だと予想したな」
「ああ、ご名答だろ？」
森の中からわき上がる土煙を二人同時に認めた。

「その数二百だと予想したな」
「ああ、土煙も三日前の二倍ほどだからな。これもご名答だろ？」
「恐ろしい男だ。敵に回したくないものだ」
「味方で良かっただろ？　まぁ、俺的にはお前の方が敵に回したくないがな。
じゃぁ、ここは頼んだぜ。ヘルマン」
「ああ、任せておけ」
ライフル銃の金属音を一つ鳴らして、過ぎ去っていくスネイプの背中にもう一度声をかけた。
「スネイプ、一つだけ聞きたいのだが」
「ん？」
立ち止まることなくヘルマンの次の言葉を促した。
「貴様この状況を楽しんでいるだろう？」
「あんたと一緒さ」
振り返ることなく答えるとそのまま西側の森の中へと消えていった。

第二話　決戦前（後書き）

次回、いよいよ決戦です。
果たして彼等の運命は……。

第三話　決戦開始（前書き）

いよいよ敵軍がホーン渓谷に迫る。

果たして、クレイス軍三名の運命は……

第三話　決戦開始

「ケッペン大尉！　橋の上に馬防柵があります！」
「分かっておる！　小癪な真似をしよるわい！
歩兵隊前へ！　馬防柵を乗り越え、その向こうにいる虫けらを切り刻め！」
　ケッペン大尉の野太い声が渓谷にこだまする、ウィード軍の歩兵隊が一斉に靴の音を踏みならして橋に進入してきた。

「歩兵隊五十人、騎兵隊二十騎、大砲が三十ほど、か……」
　西側の森の中、一本の木の枝に腰掛けたスネイプが双眼鏡片手に状況把握と分析に努めていた。
「五十の歩兵も、あの狭い橋の上では二列縦隊にならざるを得ない。こちらの思惑通りだな」

　鉄製の橋に軍靴の音が鳴り響く。総勢五十の歩兵の進軍は橋をかすかに揺らす。
　兵の足並みも、天を突かんとする槍も二列に並び、少しの乱れがない。
　馬防柵を挟んで対峙するのはヘルマンただ一人。サーベルを横に構えて、ウィード軍を待ち受けていた。
「良いか、敵は一人だ。馬防柵など乗り越えて蹴散らしてしまえ！」
「おう！」
　進軍を止めることなく、歩兵隊長の号令の下、先頭の二人が早速馬防柵を駆け上がる。
「まずは……二人……」
　駆け上がった二人は足から降りることなく、どさっと大きな音を立てて体を地面に横たわらせた。
　ヘルマンのサーベルから赤い血が滴り落ち、地面にできた赤い

海に合流する。
「な……いったい何が？」
「鎧の隙間からのどを突いていた。しかも二人連続で……。奴は……強い！」
「つ、次かかれ！」
「おう！」
またも二人同時にかかるが、柵を乗り越える時を狙われ、ヘルマンの刃に切り捨てられた。
「柵を越える時はどうしても隙が出来る。そこを突かれては……」
「一人がかかっている間、もう一人が槍で奴を牽制しろ！」
「おう！」
ヘルマンが近づかないように一人が柵越しに槍を突き出す。
「無駄だ！」
一閃で槍の穂先を切り落とすと、返す刀で柵を乗り越える兵士を切り捨てる。
「たった一人相手に……まるで難攻不落の城を相手にしているようだ！」
「どうすれば良いんだ？」
「つ、次だ！　次かかれ！」
「お、おい、お前行けよ」
「お前に手柄譲ってやるから先に行けよ」
「何をしている！　早く行かぬか！」
隊長の号令もむなしく、柵の向こうにいるオオカミのように睨み付けてくるたった一人の男の前に進もうとする者は居なかった。
「勝てると思い込んでいる戦で死にたくないって心理は進軍を鈍らせるねぇ。
さて、俺もそろそろ動くか」
森の中で息を潜めていたスネイプは双眼鏡をおろし、ライフル銃に持ち替える。

背中を木の幹に預け、両肘を両膝で支える。「我が身は銃と連結……」
銃身を見つめる。振動はない。
「我が心は空に消失……」
目標を見つめる。障害はない。
「我が指は死の鉄槌……」
引金に指をかける。躊躇はない。
「汝が魂は神へ献上……」
渓谷に銃声が響き渡り、鳥達が一斉に逃げ出した。

「早くせぬか！　奴に回復する隙を与えず次々とかか……ぐわ！」
歩兵隊長の眉間に風穴が空き、その場に倒れ込んだ。
「た、隊長！」
「今のは銃声？　隊長がやられた」
「ど、どうする？」
「どうするも何も、進んでも留まっても、やられる！」
「に、逃げろー！」
背を見せて駆け出す歩兵隊を見ながらも、ヘルマンは構えを解くことは無かった。
「たわいもない。この程度で恐れをなすとは……」

「ええい！　たった一人を相手に逃げ出すとはなんと言うことだ！　うぬぬぅ！　騎兵隊！」
ケッペン大尉の怒鳴り声を聞き、隣に控えていた騎兵隊長が前に出た。
「は、ここに！」
「馬防柵を跳び越えてあの者を踏みつぶして参れ！」
「は！」
騎兵隊長は表情を曇らせながらも命令に従い、隊員と向き合う。
「あの馬防柵を跳び越える自信のあるものはおらぬか！」

「おい、どう思う？」
「馬は柵を恐れる……。正直無理だろう」
がやがやと騒ぐだけで名乗りが出ない事に騎兵隊長の声が荒ぐ。
「どうした！　我らがウィード王国の誇り高き騎兵隊はその程度か？　クレイスどもに笑われるぞ！」
一番後ろから隊列を押し分けるようにして一騎前に出てきた。
「僭越ながら私が先陣を切って皆の手本となりましょう」
「ほう、貴様新人だったな。自信があるというのか？」
「私ごときが行かずとも先輩諸氏が名乗りを上げられると思い控えておりましたが……あの程度の柵、何の問題がありましょう」
「頼もしいではないか、よし、行け！　皆は続け！」
「はぁ！」
「し、新人のくせに生意気な」
「奴に手柄を奪われてなるものか！」
先ほどの歩兵隊とは比べものにならない轟音が鉄橋に響き渡り、大津波のごとくヘルマンへと差し迫っていった。

第三話　決戦開始（後書き）

歩兵部隊を撃退したが、まだ危難は去らない

次回をお楽しみに

第四話　決戦終結（前書き）

歩兵隊を撃退したヘルマンとスネイプ。

次に騎兵隊が襲いかかる。

９／１８　本文修正しました。

第四話　決戦終結

蹄の音と共に鉄橋に振動が走る。普通の大地と異なり、踏ん張ることに支障を来しかねない状況で、ヘルマンはまっすぐに騎兵隊を見据えた。

「騎兵隊……。普通ならば恐れるところだが……」

ヘルマンは先ほど切り捨てた歩兵が持っていた槍を拾い、振り上げた。

「覚悟せよ」

「小癪な。槍の投擲で私を攻撃するつもりであろうが、速度を緩めることなく回避した上で突撃してくれるわ！」

先頭の騎兵は呟くとヘルマンの持つ槍の動きに注目し、手綱を引き締めた。

「槍は穂先で攻撃するもの……その思い込みが敗因と知れ！」

槍を真っ直ぐに投げるのではなく、水平に回転させながら騎兵に投げつけた。槍は橋の幅よりも長い。

「な！　横に逃げ場がない！　だが！」

新人でありながら冷静な騎兵は手綱を引き上げると、馬ごと大きく跳躍した。

回転する槍は馬の下をくぐり抜け地面を転がっていく。

だが、騎兵の着地点には馬防柵の削られた丸太の尖端が待ち受けていた。

「まさか！　ここまで計算に……？」

馬は悲鳴に似たいななきを残して串刺しになり、騎兵は柵の向こう側、ヘルマンの傍に鎧の金属音とともに転がってきた。

「柵越え、おめでとう」

「褒美は……あるのか？」

ヘルマンは初めて表情を崩した上で、サーベルを振り上げた。刀身に反射する太陽光が騎兵の目に入る。

「褒美を存分に堪能すると良い」
ヘルマンの手が振り下ろされ、鈍い音と悲鳴が響いた。
すぐさま、他の騎兵隊の様子を確認する。
「投擲した槍で、二番手が転倒したか……ウィード騎兵の程度が知れるな」
ヘルマンの背後から銃声が響くと、騎兵隊長が落馬する姿を認めた。

「騎兵の本分は突撃力……この位置から再度突撃しても柵は越えられず、銃弾の前に身をさらすことになる……撤退だ！」
隊長の戦死に伴い、隊員は冷静に判断するが、歩兵に続いて騎兵の撤退にケッペン大尉の顔は真っ赤になっていた。
「なぜだ！　なぜたった一人に勝てぬ！　砲兵、奴を吹き飛ばしてしまえ！」
「大尉、お待ちください！　奴に砲撃を加えては鉄橋も無事では済みません。そうなれば、ここへ進撃したことに意味がございません」
傍に控えていた副官が慌てて進言する。
「どうすればいいと言うのだ！」
「こういう時のためにあの男を雇ったのではありませんか」
「そうか、あの男がおったか！　奴は何をしているのだ？　そこの！　確認して参れ！」
「は！」
伝令役として傍にいた兵士がすぐさま飛び出していった。

「あのクレイス兵の剣の腕前は確かにすごいが、馬防柵を準備するなどの戦い方……おそらくは奴のものではない。この戦い方……覚えがあるぞ……」
ウィード陣営背後の森には一人の男が木の枝に腰掛けて、今までの戦いを観察していた。

「『勝利の死神』の二つ名の傭兵……スネイプ＝シュースター。なんてこった。あいつが相手かよ……。
最初に出会ったのはいつだったか……俺が旧ウィードに、奴が革命軍に雇われたときだ……あいつは少数の軍団を率いて、革命を成功させやがった。
次は革命後の新ウィード軍……。このときは味方同士だった……。奴の指揮で次々と周辺の部族を制圧していった。あのときほど敵に回したくないと思ったことはない。
にも関わらず、今また再び敵としてまみえるとは……」
口元を手で押さえて呼吸を整える。
「落ち着け……。俺はスネイプが居ることに気づいた。奴はまだ俺の存在に気づいていない。さらに奴は二発撃っていて、おおよその居場所をさらした。これはかなり有利だ。この状況なら俺にも勝てる」
スネイプが潜んでいると思われる森の中を双眼鏡で探す。
「どこだ？　どこに潜んでいる？　奴のことだ。そうそう簡単に見つからない場所だろうが、逆にそんな場所は限られてくる。あたりをつけることが出来るはずだ」
先ほどの二発の射撃を思い出す。歩兵隊長も騎兵隊長も右後方に向かって倒れた。即ち橋より左側から射撃をしたと言うこと。もう少ししっかり見ていれば良かったと悔やむが遅い。
「これが俺とスネイプの差か。だがまだ埋めることは出来る」
新緑の森にかすかに暗くなっているところを見つける。常人なら影だと思うところを、彼は半ば確信でスネイプだと判断した。
「居た！　見つけたぞ」
「へぇ、誰を？」
「決まっているだろ？　スネイプだ。俺の勝ちだ」
「私も見つけたのよ」
「ん？」
ふと背後から聞こえてくる声は何だろうかと思った。最初はウィ

ード兵が声をかけてきたのかと思っていたが、これは女の声だ。
瞬間、背後から伸びてきた手によって口元を押さえられる。
（思い出した！　『勝利の死神』の傍には常に『勝利の天使』がいたということを！）
喉元に冷たい金属が触れる。
「あなたというネズミを、ね。それじゃぁ、さよなら」
己の頸動脈から噴き出る血を見ながら、意識が薄れていく。
（ああ、やはりスネイプには勝てねえのか……）

ケッペン大尉に命令されて様子を見に来た歩兵が見たのは既に木の幹に背もたれた姿で事切れていた狙撃手の姿だった。

「退いていく。先の戦いは砲兵中心だったから何とかなったと思っていたが、歩兵と騎兵を伴う軍隊を打ち破るとは……」
サーベルに付着した血糊を拭き取りながらヘルマンは呟いた。
「な、勝てるだろう？」
振り返れば、そこには勝利をもたらした黒ずくめ、まさに死神の笑みを浮かべた男が立っていた。
「貴様いったい何者なのだ？　指示に従っただけでこの有様だ。正直、馬防柵の案を聞かなければ、敵中に切り込んでいって暴れ死ぬ覚悟だった」
「しがない傭兵さ。あんたの上司に雇われただけのな」
肩をすくめるスネイプを見て、ヘルマンは逆に肩を落として力を抜いた。
「また来るだろうか？」
「来るな。次は本当に数で押してくるだろう……それも砲兵は置いてきて、な。今回は勝ち戦と思わせて死の恐怖を与えることで撤退させることができたが、次回は死も恐れぬ軍団が相手だ。やれるか？」
「当然だ」

迷いのない真っ直ぐの瞳で渓谷の対岸を見据えた。
「ヘルマン。あんたも楽しそうだな？」
「貴様と居るからな」
口の端を緩めて、横目でスネイプを見る。
「「ふ……ふははは！」」
二人同時の笑い。
それは渓谷にいつまでもこだましていた。

第四話　決戦終結（後書き）

三度ウィード軍は来るのか？
次は撃退できるのか？
次回をお楽しみに！

ちなみにまだまだ七人全員が登場するのは先になりそうです。

第五話　伝承（前書き）

ようやくこの世界の歴史的背景についてなどが明らかになっていきます

第五話　伝承

クレイス王国王子アレックスは城の宝物庫にいた。
数多くの宝石や武具が納められている中で、一番厳重に祀られている印璽を眺め続けている。
純金で作られ、獅子の意匠が施されているだけの印璽。
「ウィード軍がどれほど強くても、この印璽がある限りこのクレイスは負けない」
王子は後ろに振り返り、控えていたルカスを見た。
「ルカス。この印璽にまつわる伝承を教えてくれないか」
「お戯れを……。殿下の方がお詳しいかと」
「改めて確認したいんだ。この国の危機を乗り越える力を沸き出すために」
ルカスは頭を垂れたまま口を開いた。
「ブライタン島に英雄あり。名はレオンハルト＝クレイス。別たれた四つの民の一つ、草の民なり。
草の民、争い絶えず。
彼、これを憂慮す。なす術もなし」
様々な人から聞いてきた物語。
今も目を閉じてルカスの口から出てくる言葉を一つ一つ噛みしめる。
「紀元前5年。彼、狩りに出る。
バラポラス平原に於いて、一頭の獅子と出逢う。
彼、これを仕留めんとす。獅子立ち塞がる。それ堂々たり。獅子曰く。
『哀れなるかな、草の民。争いで同胞を傷つけ合うや、草の民。慰みに獅子を狩らんとするか、草の民』
彼驚き、臣下の礼を取りて曰く。
『草原の王よ。草の民の争い、治める術はなきや。知恵を借りん』

『容易なり。汝、覇者となるべし』
『我覇者の器にあらず。ただ争い激化するのみ』
『器を望むか、草の民。望まば与えん』
『我望むなり！』
獅子笑いて曰く。
『我、汝にこれを与えん』
彼、印璽を受取る。獅子曰く。
『書に命じて印を打つ。即ち民これに従う』
『我誓う。これを用いて覇者とならん』」
ルカスはゆっくりと物語の最後まで紡いだ。
「この印璽には人々を従わせる力がある。始祖レオンハルト殿もこの印璽のおかげでクレイス王国を築き上げた。まさしく誓いの通り覇者となったのだ」
王子は目を開き、再び印璽に視線を向ける。
「だから、クレイスはウィードのような革命で成り上がったような軍事政府に負けはしない」
ルカスは何も答えず、じっと王子の言葉に耳を傾けていた。
「僕も今年で十六だ。レオンハルト殿のように戦場を駆け巡りたい。いや、それを民は望んでいる。父王のように将軍達に任せては居られない」
「王子、恐れながら……そのような事を口にしては、王も将軍達も快く思いませぬぞ」
「構わぬ。王家たるもの陣頭で指揮を執るべきだ。父王が出陣されぬなら……僕が出るまでだ。
今戦況は膠着している。メルムーク将軍も大鷹砦、角突砦を加えた三方向からの包囲には防戦することで手一杯。両砦を奪還することは困難に違いない。
だからこそ、僕はこの印璽を以て出撃する！　これは次期王としての務めだ」
「……」

ルカスは何も答えずじっと頭を垂らしたままだった。
一時の静寂……しかし、それはすぐに打ち破られた。
「曲者だ！」
「宝物庫に向かっているぞ！」
部屋の外から聞こえる怒号に、すぐさまルカスは王子をかばうように傍に向かった。
「ルカス、不要だ。自分のことは自分で守る。それよりも曲者の目的は……何だと思う？」
「二つ考えられます。一つは王子ご自身のお命。もう一つは……」
ルカスは宝物庫の奥を一瞥した。
「やはり、印璽か」
アレックスはすぐさま、印璽と同じように祀られている槍を手に取った。
「王子、それは……」
ルカスのたしなめる物言いも意に介せず、槍を構えた。
「これが始祖レオンハルト殿が用いた槍……古くとも穂先は軽く、錆付いていない。柄も丈夫だ。その力……お借りします」
「曲者め！　ここは通さ、ぐわ！」
「王子、どうやら宝物庫の警備兵も討たれた様子……お逃げくださいませ！」
ルカスも腰の剣を抜いて構えを取る。
「出口は一つしかない。そこの警備兵がやられたのだ。どこへ逃げよと？　逃げずに曲者を討つ！」
「おやおや、威勢の良い坊やだね？」
宝物庫の扉がゆっくりと開かれる。
「女？」
「王子、女といえど油断無きよう。この宝物庫を警備していたのは屈強の第四親衛隊。それをものともしていないのです」
「これで、屈強なのかい？　クレイスの程度が知れているねぇ？」
開かれた扉から赤い覆面と装束で目以外を覆い尽くした姿が現れ

た。

第五話　伝承（後書き）

如何でしたか？
次回をお楽しみに願います

第六話　侵入者

「殿下、奴はウィードの忍び……。気をつけなさいませ」
「気をつける？　なぜ？　賊は倒すまでだ」
アレックスは槍を構えたまま、女へと間合いを近づける。
「殿下、なりません。私が食い止めている間にお逃げください」
「おやおや、良い従者を持ったものだね。にもかかわらず主が従者の言うことに耳を傾けないのはいただけないね」
忍びは右手に持っていた湾刀シャムシールを構える。
「槍の方が間合いは長い。僕の方が有利だ」
じわりと間合いが詰まる。
だが、未だお互いの間合いの外。
睨み付けてくるアレックスに対して、忍びは涼やかな瞳で受け流す。
「殿下！　お下がりください！」
「従者はああ言っているがどうするんだい？」
「決まっているだろ？　貴様を倒す！」
言葉と同時、忍びの胸元めがけて突きを繰り出す。
二つの風切り音。
すぐさま高い金属音。
直後に鈍い音。
最後に大きな音。
「殿下！」
「な、何が起きたのだ？」
アレックスは起き上がりながら駆け寄って来たルカスに尋ねる。
「殿下は賊に槍を防がれ、腹部に蹴りを入れられたのでございます」
「み、見えなかった……ゴホ！」
「こんな蹴りで、咳き込むようじゃだめだね。
先ほどの第四親衛隊、とやらの方が強かったよ。あはは！」

音もなく、一歩近づく。
「く、この程度で勝ったと思うな」
「殿下、おやめくだされ」
さらに一歩。
シャムシールの刀身が宝物庫を照らすランプの炎に揺らぐ。
「ウィードの忍びよ、目的は印璽なのであろう？」
ルカスはアレックスと忍びの間に立つ。
「ルカス、何を言い出すのだ」
「話してなかったかい。その通りだよ。できれば無駄な殺生はしたくないんだよ。疲れるからね」
また一歩。槍なら届く距離。
「その言葉。嘘はないか。なれば印璽を渡そう。殿下の命を奪わぬのであれば」
「ルカス！　くそ、何をする」
前に出ようとするアレックスの腕を絡めて押さえつける。
「へぇ、なかなか冷静な判断が出来るんだね。
そうね。王子の暗殺は命令されていないからね。印璽さえ手に入ればすぐに帰るよ」
「やめろ！　印璽は渡さない！」
「王子は叫んでいるけどどうするんだい？」
「持って行け。印璽はあそこで祀られている」
「ルカス！」
「話が早くて助かるね。私が印璽を頂戴する間その野獣は押さえていてくれるんだろうね」
ルカスは沈黙する。だがそれは肯定を意味すると解釈して、忍びは奥へと歩を進める。
「ルカス！　離せ！　あの印璽は命に代えても渡すわけにはいかない！」
「あはは！　これは頂いていくよ！」
「くそ！　止めろ！　離せ！」

忍びは手にした印璽をアレックスの前で揺らしながら悠々と宝物庫の外へ出て行く。
「ルカス！　何故だ！　何故渡した！」
アレックスは解放されてすぐさまルカスに槍の穂先を向ける。
「殿下の命あっての物種でございます。印璽は取り戻すことは出来ますが、殿下の命は取り戻せませぬ」
「ならば早く取り戻せ！　いや……僕が取り戻す！」
「殿下、どこへ行かれるのですか？」
忍びに続いて、アレックスもまた宝物庫から飛び出していった。

「これは何事じゃ！」
城門の付近で起きている騒ぎを聞きつけて、王自らが足を運んだ。
「へ、陛下……殿下が……」
ルカスが説明しようとするのをアレックスは割って入った。
「父上！　僕に行かせてください！　この者達が邪魔するのです！」
城門の警備兵は両脇から槍を交差して、アレックスの行く手を防いでいる。周囲に集まってきた親衛隊も思いは同じであった。
「いったい何があったのだ。順を追って説明せぬか」
「父上はご存じないのですか？　印璽が賊に盗まれたのです！　これは由々しき事態！　僕が自ら賊を追います！」
「なんと、印璽が？　しかし、アレックスよ……お主にそのような事はさせられぬ、ぞ……追っ手はすぐに手配しよう……お主は部屋に戻るのだ……」
王は両手でアレックスの顔を抱きかかえるようにして話しかける。
しかし、アレックスは真っ直ぐに王を見つめる。
「なりません！　印璽はこの国の宝。王族自ら取り戻すべきであり、他人に委ねるなど出来ません！」
「王よ、先ほどからこの調子でございまして……」
ルカスがそっと耳打ちすると、王は納得いったように軽く頷いた。
「アレックスよ。意気込みは分かるが賊を追うとなると辛く険しい

旅になるぞ」
「心配には及びません。この身は幾たびも獣狩りに山野を駆け巡った身体。多少のことではへこたれません」
「むむ……。頑固なところは誰に似たのやら……。仕方あるまい」
「王よ！」
周囲に動揺が広がる。
「では！」
「焦るな、アレックス。せめて護衛をつけて行くのだ。人選は任す」
「護衛ですか……それでしたら、一人連れて行きたい者がいます」
「ふむ……。その者とは？」
「彼はメルムーク将軍の下で戦功を上げていると聞きます。
その名を『かぎ爪のスィン』」

第七話　兵士の食事

「なりません！　殿下！」
両手で机を叩き、巨体が突然起き上がる。
彼の声は陣中に響き渡り、一部の兵士は出撃の号令かと勘違いするほどだった。
「声がでかいぞ、メルムーク将軍。僕は目の前にいるのだから、そんな大声を出さなくても聞こえている」
手で制すアレックスに押し返されるように、メルムークは再び椅子に座って深呼吸した。
「し、失礼しました。しかし、殿下。あの男を護衛にするなど……お止めくだされ。あやつは上司の命令にも従わぬ不遜な男。殿下に失礼があってはなりません。事情はお聞きしております。護衛が必要とのこと。あの男には勤まりません。もっとふさわしい者がおります。その者を護衛になさいませ」
まくし立てるように、一気に話す将軍と対照的に、小柄ながらアレックスはむしろ前に身を乗り出した。
「ほう、上司の命令に従っていないのか？　軍規を乱しているな。即刻今の配置を免職せよ」
将軍は目を開き、両手を所在なさげに机の縁をつかむしかなかった。
「で、殿下……そ、それは……しかし、あやつはそれなりに武功を上げておりまして、その……」
将軍のそんな姿を楽しむように、笑みを浮かべたままアレックスは言葉を続けたが、すぐさまメルムークの叫び声にかき消された。
「殿下！　それはお止めくだされ！」
陣中の兵士達が出撃と勘違いしたのは本日二度目だった。
「クマオヤジが吠えているな。食事中くらい静かにしろってもんだ」

手のひら程の大きさの乾パンを金槌で砕こうとして失敗する兵士達の中に一人呟く者がいた。
「全くですよね、スィン伍長。クマオヤジが吠える度に武器を手に取ってたんじゃ、落ち着いて食べられないですよ」
「まぁいざとなったら、この乾パンをぶつければ充分武器になるさ」
スィンの言葉に辺りの兵士に笑いが広がる。
「違いない！　この乾パンときたらアルスター地方の煉瓦並の堅さだからな！」
「馬鹿言うな、アルスターの煉瓦は投げてぶつければ煉瓦の方が割れる。この乾パンはぶつけられたウィード兵の頭が割れるんだ！」
「ちげえねえ！」
「いやいや、スィン伍長。こちらの干し肉だって充分武器になりますよ。この臭さときたらもう！　ウィード兵の鼻を曲げること間違いなしだ！」
一人の兵士が、干し肉をぶらぶらさせて、鼻をつまんでしかめっ面をした。
「クマオヤジは吠える前に、俺たちのメシを旨いものに変えろー！」
「そうだそうだ！」
威勢の良い掛け声に皆が同調して右手を突き上げる。
「まぁ、落ち着けよ。そんなお前らに良いモン分けてやるよ」
まるで子供がいたずらに成功したときに大人に見せるような笑顔でスィンは周りの兵士達に集まるよう手招きする。
「なんすか？」
「まぁ、静かにしろよ」
左手の人差し指で唇を押さえ、右手は軍服の懐に手を突っ込む。
兵士達は頭を寄せ合い目を輝かせて、ガキ大将がどんないたずらを成功させたのか話を聞きたがっている取り巻きと化す。
スィンはそんな兵士達の様子に満足したように笑みを浮かべた。
じらしながら取り出したのは一つの小瓶。
その中にはたくさんの黒い粒。

「コショウじゃないですか！　これ！」
「馬鹿、声がでけえよ！」
スィンが叫んだ兵士を小突いて、周りは笑い出す。
「ど、どうしたんですか？　これ」
「決まっているだろ。愛しいお前らのために、飲まず食わずで給料を貯めて買ったんだよ」
兵士達を包み込むように両手を広げる。
「伍長！　俺たちのために！」
一人の兵士がその腕に飛び込もうとしているのを隣の兵士が肩を掴んで止めた。
「いやいや、いくら何でも、伍長の給料でコショウが買えるわけ無いでしょ。本当はどこから盗んできたんですか？」
一瞬だけスィンは眉をぴくりとさせてから、飄々と視線をそらして答えた。
「ん？　クマオヤジから」
「やっぱり！」
「さすがスィン伍長！　やることが違う！」
「俺、伍長の突撃命令に何度命の危険にさらされたか分からないですけど、それでも伍長の下で良かった！」
「余計なこと言うなよ。ほれ、お前ら干し肉出せよ」
小瓶を開けて、一人一人が差し出す干し肉にコショウを振りかけていく。
「どんなに肉が臭くても、コショウさえかければ、食えるモンになるってのが不思議だ！」
「うめえ、肉ってこんなに旨かったんだ」
「辛い！　でも旨い！」
皆が飛び跳ねながら干し肉を食べているところに近づいてくる影が二つあった。

第八話　誘い

「楽しい食事中、失礼するよ」
「クマオヤジ、だけじゃないな。誰だ？」
スィンがメルムークと、声をかけてきた男を交互に見る。
若い。銀色に輝く鎧を纏い、真紅のマントをたなびかせる姿は戦場の泥と埃を浴びていない。
「どこぞの貴族のお坊ちゃんが、視察と称して物見遊山に来たか」
口元を手で押さえて呟いたが、メルムークの耳にはしっかりと入っていた。
「こら！　失礼だぞ！　スィン伍長！」
「相変わらず、声がでかいな、クマオヤジ。また俺たちに出撃と勘違いさせる気か？」
「伍長。マントの留め具を見てください。あの紋章」
「獅子に交差した二本の槍、ただのクレイスの紋章じゃ……ねえな。獅子の頭上に王冠。
そして何よりも金製……。王族のみがつけることが許される紋章。
そして何よりこの若さ……」
「ということは伍長。この人は……」
「そうだ、このお方は、クレイス王国第一王子アレックス殿下であられるぞ！」
メルムーク将軍が一喝すると、慌ててスィン以外の兵士達が、居住まいを正す。
しかしスィンは気にすることもなく、食事を再開し始めた。
「こら、スィン！　食事をやめんか！」
「何故だ？　今は食事の時間だろ？　ウィードが攻めてきたときにお腹をすかせたままでいろというのか？　食うときにしっかり食う。それは兵士の義務だろ」
「それとこれとは話が別だ！」

「良い、将軍。別に食事をしながらでも良いではないか。他の者も続けてくれ。僕はスィン伍長に用がある」
　王子にそう言われても、はいそうですかと食事を続ける者はいない中、スィンはコショウを振りかけたばかりの干し肉を口にほおばっている。
「スィン伍長。ただいまを以て、第百二十八歩兵小隊伍長の任を解く」
「な、何だって？」
「お、おい、伍長が何やったっていうんだ？」
「いや、色々やっているだろ？」
「そうだけどよ」
　王子の言葉に、スィン本人よりも周りの兵士に動揺が広がる。
「へぇ、俺をクビにするって言うのかい？　クマオヤジはそれでいいのかい？」
『いいわけないだろ』
　メルムークは声に出さず口の動きだけでスィンに伝える。
「将軍とではなく、僕と話してもらいたい」
「へぇへぇ。で、俺をどうするんで？」
　今度は乾パンの方に手を伸ばし、金槌で叩き始める。
「第二親衛隊特別臨時隊員を命じる。階級は少尉だ」
「し、親衛隊だって？」
「それも王子を護衛する第二親衛隊だって？　出世が約束されたようなものだ」
「伍長から少尉に昇格なんてあり得ない」
「さすが俺たちのスィン伍長だ。いつかはやってくれると思っていた」
　金槌で叩くこと三回。ようやく乾パンが砕けて、口に含むことの出来る大きさにまでなった。
「断る」
　周りの騒ぎをよそに、スィンは一蹴してから乾パンを口に放り投

げた。
「ほう、普通ならそこの兵士達のように出世だと喜ぶところだ。何故断るのかだけでも聞かせてくれないか？」
「親衛隊だろ。城に籠もってがたがた震えている王侯貴族の連中を守るだけのために缶詰にさせられるなんてもっぱらごめんだ。
俺は伍長のままで良い。こいつらと共に最前線で敵陣に切り込み、大いに暴れ回る方が性に合ってる。
第一、親衛隊が戦う事態になるってのは負け戦だ。戦は勝ってなんぼだろ。俺たちはそのためにある。負け戦を戦うための階級なんざいらねえ」
「ふむ、君が思ったとおりの男で嬉しい限りだよ」
「何だって？」
意外な言葉に、次の乾パンを口に運ぶのを忘れて王子の方を振り向く。
「ようやく僕を見てくれたね」
「む」
鼻をフンと鳴らして再び乾パンと向き合う。
「第二親衛隊は、知っての通り王子、つまり僕を護衛する。護衛すると言うことはそばにいるということだ。それは分かるね」
沈黙。それは肯定を意味していた。
「僕が最前線に行けばどうなる？　護衛も最前線だ」
「はっはっはっ！　王子が最前線に立つ？　最前線の意味を知っているのか？　そんなところに王子を行かせるなんてクマオヤジが許さないだろ？」
再びメルムークの方を見てみると、彼は半ばあきらめ顔で、肩の力を落として見せた。
「おいおい、本気で最前線に行く気かよ？」
「この場で事情は言えないが……僕がこれから行く場所は間違いなく最前線だ。
一緒に行こう。僕が使命を果たし、生きて帰れば、君は英雄だ」

第九話　出立

「英雄か。悪くない」
アレックスの前に立ち塞がる身長百八十の長身。成長途中で百六十に過ぎないアレックスとはまさしく大人と子供。
「だが、その手柄を王子一人のものにされては面白くない」
スィンは眉をひそめる。
「約束しよう。僕が凱旋する暁には、君の名も共々に国民に広く周知しよう。君が活躍すればね」
スィンはフンと鼻を鳴らして、手に持っていた干し肉を差し出す。
「食えよ」
「な、失礼だぞ！　スィン！」
「王子に食わせたら失礼なものを俺たち兵士には食わせているのか？　クマオヤジ」
「い、いや、そう言う問題では……無かろう」
「構うな、将軍……。これは？」
「俺たち兵士の食事だ。俺は孤児院の生まれでね。何でも分け合って食べてきた。俺が分け与えるものを食う奴じゃなきゃ命は預けられない」
「そうか、では頂こう……む……ほう、コショウがしっかり効いているじゃないか」
「あ、やべ……」
「スィン伍長？　コショウをおいそれと買えるほどの給料を伍長には与えてはいないはずだが？」
ポキポキと指を鳴らしてメルムーク将軍はスィンに近づく。
「落ちていたのを拾ったんだよ」
「どこに落ちていたのか、詳しく聞かせてもらいたいものだな」
「ああ、将軍。スィンはもう伍長ではなく少尉であり、第二親衛隊の隊員だ。君は彼を指揮する立場にはない」

「うぐ！」
「ふぅ、助かったぜ」
肩を落とす将軍と、胸をなで下ろす伍長ならぬ少尉。
「それから、軍の食事状況を改善するように。金槌でも割れない乾パンと、コショウがなければ臭くて食えないような肉では士気に関わる」
「お、王子、そうはおっしゃいましてもこのような長期戦ですと軍費は……」
「言い訳は不要だ。軍費が足りぬなら、軍費があるうちに決着をつけよ。いいな」
「は、はぁ」
肩の力を落としっぱなしの将軍とは別に、兵士達は色めき立っていた。
「それではスィン少尉。僕たちは急がなければいけない。目的は行きながら話そう」
「それじゃぁ、お前ら、行ってくるぜ」
大騒ぎの兵士達と意気消沈の将軍を尻目に二人は早速、陣を抜け出そうとする。
「スィン伍ちょ……じゃなかった、少尉、お達者で！」
「帰ってくるのを待ってますよ！」
「ええい、二度と帰ってくるなと言ってやりたいが、そうなると殿下の身が……」
「クマオヤジ！　俺が帰ってくるまでに負けるんじゃねえぞ！」
去り際、振り向いてスィンは大声で叫んだ。
「貴様がおらんでも負けはせんわい！」
握り拳を作って答えるその姿は少し力なかった。

太陽の光が麦に覆われたバラポラス平原を黄金色に輝かせる。
その穂波を縫うように伸びる道を二人は歩いていた。

アレックスは白馬に乗っているが、スィンの歩みに速度を合わせているため進みは遅い。
「本来ならば、飛ばしてでも追いかけたいところだ。忍びの足を考えると、領内で追いつくのは困難か。本格的にウィード領に侵入することを検討しなければならないな」
馬上で呟き、クレイスとウィードをつなぐ道を頭に浮かべていた。
賊がどの道を通ったのか、自分たちがどの道で追跡することが最良かを巡らせる。
「なぁなぁ。護衛は俺一人なのか？」
「そうだ。不満か？」
「ああ、不満だね」
「意外だな。戦力が足りない、というのか？」
「ただ、戦うって言うだけなら、俺一人で十分だが、こんな面白そうな話、独り占めするのはもったいなくてね」
「面白いとは何だ！　クレイス王国の危機だぞ！」
「危機だろうが何だろうが、結果、印璽を取り戻せば良いんだろ？　結果が同じなら、途中は面白い方が良い」
「そ、そうだな……結果が同じなら、君の意見を聞いても良い。護衛を増やしたいというのか？」
アレックスは馬上で眉をひくつかせながら尋ねるが、スィンはそれに気付くことなくただ馬の傍で前を見て歩みを進めていた。
「増やす、そうだな、結局は増やすことになるが、この追跡行に加わらせたい奴がいる」
「ほう、その名は？」
「ヘルマン＝シュタイナー。聞いてないか？　ホーン渓谷での活躍を」
「たった三人で敵の小隊を撃退したとか……。なるほど、それほどの実力者ならば、僕の護衛にもふさわしい。しかしホーン渓谷に向かうとなると少し遠回りか」
あごに手を当てて、少し考え込もうとするが、スィンからすぐさ

ま言葉が飛んできた。
「遠回りに見えることも、案外近道かも知れないぜ」
「どういう意味だ」
「ホーン渓谷を越えればすぐにウィード領だって事さ」

第十話　峠越え

「賊がホーン渓谷からウィード領に入ったという証拠はないのに……なぜ、僕はその言葉に乗ってしまったのだろう？」
王子を乗せた白馬は通る道の険しさに、表情をゆがめ、口は開きっぱなしとなっていた。
「おいおい、ここはバックボーン山脈の端っこだぜ？　いつかはこれ以上険しいところを通るかも知れないってのに、この程度でばてるのか？」
一方のスィンは涼しい顔をしたまま、王子の前を歩んでいた。その差が開こうとさえしている。
「ま、待ってくれ……セイムダルを休めてやりたい」
「何だよ。そのセイムダルとか言う馬と一緒に山野を駆け巡ったって言っていたのに、もう休みたいのか？」
「こ、こんな険しいところで狩りをしたことはないんだ」
スィンは肩をすくめた。
「やれやれ。分かったよ。十分だけな」
「助かる」
どっと倒れ込むようにして、馬から下りるアレックスをよそにスィンは辺りを見回した。
道の右手はブライタン島の中央を横切るバックボーン山脈。
山頂は雪が残りその高さを誇示する。もっとも暑い季節は過ぎ去ったばかりなので、あの雪は溶けることなく次の冬に降る雪と一体となる。
左手に視線を移すと、谷間に一筋の渓流。
そのせせらぎの音は、一服の涼を二人に与えていた。
いや、涼だけではない。アレックスは馬と共に川縁へと向かい、口をしめらすことに余念がなかった。
ここから先、バックボーン山脈を右手に見たまま脇を北西に向か

っていくが、山脈から枝葉のように分かれた山々をいくつも越えることになる。
「今からこの調子か……俺一人で行ったら賊に追いつくんじゃねえのか？」
程なくして、アレックス達が川縁から街道に戻ってきた。
「すまない、待たせたな」
「もう良いのか？　さっさと行くぜ。賊は待ってくれないんだからよ」
「ああ、大丈夫だ。しかし、君は元気だな」
「俺は歩兵だぜ。それもクレイス王立兵学校歩兵科大五十七期首席卒だ。これくらいの行軍はなんともねえよ」
「ああ、知っている。君の活躍は多く耳に入っている」
「そいつは光栄だな。王子の耳を汚すことが出来るなんてな」
「汚すなんてとんでもない。バラポラス平原での活躍を聞いたときは胸がスカッとしたよ。よくぞ、あのウィードを痛めつけてくれた、とね……ん？　あれは頂上か？」
ふと先を見上げると道がない。それは即ち、あの向こうは下り坂であると言うことを意味していた。
「そうだな。一つ目の峠、の頂上な」
「な！　こんな峠がいくつもあるのか？」
「ホーン渓谷までは、あと四つだ」
「何だって！　ウィードは遠いな」
「引き返すのか？　止めはしないぜ。俺一人でも賊は追えるしな」
「とんでもない。この程度で音を上げて、国民を率いることが出来るものか」
最後の力を振り絞るように歯を食いしばって頂上まで駆け上っていく。
「よし、頂上だ！　おう。絶景じゃないか。山野で狩りしていても見たことがない景色だ」
右の山脈は相変わらず変わらないが、目の前は起伏に富んで様々

な光景を生み出し、あちらこちらに一軒家が見えた。
「こんなところにも人は住んでいるのか」
歩みを進めつつも周りを見回し初めての光景を目に焼き付けている。
「俺たちは草の民、なんて呼ばれているが、実際は草原に街を作っても、その街に水や木などの資源を供給するため、こんな山奥に住んでいる連中もいるってこったな」
「知らなかった……草の民は皆、町か村に住んでいるのかと……あそこに比較的大きな集落があるね。あそこまで行けば一休憩しても良いんじゃないか」
「……」
沈黙。これは否定の意味。
「何だ？　さっき小休止したから、ダメだというのか？」
「残念だったな。あのブリスト村は今やウィード領だ」
「何だって？　ここはクレイス領だろ？」
「街道沿いだけでなく、一部の村々も切り取られるようにあちこち占領されている。聞いているんだろ？」
「それは……確かに聞いていたが……。のんきなことを言っている場合じゃない！　すぐに取り戻そうじゃないか！」
アレックスは手綱を引き、今にも駆け出しそうにする。
「分かってねぇな……。落ち着けよ。王子サマ。俺たち二人でどうするんだよ」
「二人だろうと、君がいれば村を占領している兵士を打ち破ることくらい出来るだろ」
「ああ、出来るね。出来るが全滅はさせられない。逃げた兵士が援軍を連れてくるのを止めることも出来ない。援軍が来るまで村を守ってやることも出来ない」
「な！」
アレックスはスィンの背中を見つめるが、振り向いてくれない。スィンは前を見たまま言葉を続ける。

「村で戦をやれば、村人にも被害が出る。俺たちがけしかけることは却って村人を苦しめるのさ」
「く！　じゃあ僕たちに出来ることは……」
アレックスはうつむき、手綱が震える。
「無い。印璽の追跡を諦めてあの村を守り続けることを選ぶなら別だがね」
「君は……冷たいのだな」
「どちらが、クレイスにとって良いか、だ。一を救うために十を犠牲にするのか。十を救うために一を犠牲にするのか……。印璽を追うこととブリスト村をウィードから開放すること。どちらが一でどちらが十か、王子サマなら分かるだろ？」
答えはない。
アレックスはただ、うつむいてわき出る感情を抑えるしかなかった。
「見えてきたぜ。ほら、ウィード国旗を掲げられてらぁ」
「盾に五本の剣でWの文字……革命で成り上がった軍事政府を象徴する下品な紋章だ」
村にいるだろうウィード兵に見つからないように街道をそれて歩を進めながら、様子を眺めていた。
「は！」
「どうした？」
「あれは……少女？」
「戦だ。非戦闘民だろうが巻き込まれる……親が殺されたのだろう」
墓石の代わりなのか人の頭ほどの石を二つ並べて、その前で泣き崩れる少女の姿が、いつまでもアレックスの脳裏に残った。
「この峠が五つ目だったな。これを越えたら、ホーン渓谷で間違いないんだな」
「ああ、頂上が見えてきたぜ。あそこまで行けば、眼下にホーン渓谷が広がっている。戦の前は観光地でもあった場所だ。なかなかの

絶景だぜ」
「それは是非見ておかないとな」
「悪いがお先」
速度を速めて、いち早くスィンが頂上にたどり着く。
「あ、待ってくれよ！」
「うぉー、これは予想以上の絶景だな！」
「何だ？　そんなにすごいのか？　僕にも見せてく……なんだこれは！」
ホーン橋の向こう岸には三百は下らないウィード兵が立ち並んでいた。

第十一話　三戦

ホーン橋における前回の戦いから約一週間。ウィード側は歩兵三百という陣容をそろえてきた。
橋の上のヘルマンはその様子を見て、スネイプの言葉を思い出していた。
「本当に砲兵の姿が見あたらない。まずはこの橋を確保してから連れて来ればいい、と言うことか」
三百の歩兵がこの橋に押し寄せてくる姿が脳裏に浮かぶ。
前回大いに役に立った馬防柵はこの大波を受け返すだけの力はあるか、不安がよぎる。
「ままよ。スネイプが後ろにいないことが気がかりではあるが」

「ふ、ふはは！　一週間の間に、援軍が来ているかと思ったが、双眼鏡をのぞき込むまでもなく、前と変わらぬことが丸わかりではないか！　さすがに今回は勝ったわ！」
「勝つのは貴様ではない。この私の第二十一歩兵大隊が勝利するのだ」
「は、す、すみません。ホーク少佐……」
右にいる大柄な男、歩兵を率いてきた
「少数を相手に二度の敗北。そしてこの私を出張らせるという失態。出世の道は途絶えたな。
まぁ良い。貴様のおかげで逆に奴らクレイス兵の株の方があがっている。あの橋の上の兵士を討ち取った者には栄誉が与えられるだろう」
「……」
ケッペンは先ほどの昂揚も消沈して、うつむいたままとなってしまった。
「ホーク大隊長、出撃準備整いました」

伝令の兵士が駆け寄って来て伝えると、さっと右手を挙げた。
「第二十一歩兵大隊！」
声と同時に点に向かって伸びていた槍が一斉に斜めに向けられる。
「突撃！」
沸き上がる喊声。前回とは違う声量に普通の者ならこの時点で臆して逃げ出す程。
「来たか」
押し寄せる歩兵の波に、ヘルマンは逃げ出すどころか、サーベルを抜き放ち、身構える。その視線は真っ直ぐウィード兵の先頭に向けられていた。
「良いか、まずは馬防柵を破壊する！　手はず通りこなせ！」
「「おう！」」
「かかれ！」
先頭の部隊が槍を捨て、短剣を抜いて駆け出してくる。
「狙いは馬防柵を組んでいる縄か！」
ウィード側のもくろみを察知し、近づいてくる兵を柵の隙間からサーベルで突き刺していく。
だが、右の兵を倒せば左の兵が短剣を縄に突き立てる。左の兵を倒せば右の兵がかかる。
次々と押し寄せる兵の波に、とうとう馬防柵の縄が切れ、音を立ててバラバラになってしまった。
素早く、ヘルマンは後ろに下がり間を置く。
「はっはっはっ！　馬防柵が無くなれば、残るは一兵卒のみよ！
さぁ、一気にとどめだ！　かかれ！」
槍を捨てた兵はそのまま短剣を、残る兵は槍を構えてヘルマンへ一歩一歩近づいてくる。
「ヘルマン！　肩を借りるぜ！」
あと二歩近づけば交戦開始という距離でヘルマンの背後から声が聞こえてくる。
「この声は……承知！」

ウィード軍が一歩前進。槍なら届こうかという距離。
「……三！　……二！　……一！」
背後の声が数字を数える。
ウィード軍も前進。
先頭の兵士が短剣を振り上げる。
突然、ヘルマンがうずくまる。
その背後から突然クレイス兵が現れる。
兵はうずくまったヘルマンの肩に足をかける。
「うぉおおお！」
ヘルマンは雄叫びと共に立ち上がる。それは即ち背後の兵士を空へと押し上げること。
その力を利用し大きく跳躍して、ウィード軍の敵陣まっただ中に降り立つ。
「一つ！　二つ！」
いや、ただ降り立っただけではない。その拍子に片手で一人ずつ、計二人の兵士を切り捨てていていた。
「ヘルマン！　楽しそうなことやっているじゃねえか。俺も混ぜろよ！」
「もう既に混ざっておいて何を言うか……スィン」
あっけにとられているウィード軍の隙を突くようにヘルマンは敵陣に飛び込み、左右にサーベルを振って兵士を切り捨てながら、スィンの傍へ駆け寄る。
「お前も来たか！」
お互いに背中合わせの格好。
「ひゃっほう！　お前と背中合わせで戦えるなんて夢にも思わなかったぜ！　これは楽しくなるねぇ！」
「ふん、これほど頼りになる背中が来るとは正直思わなかった。
ウィード兵よ、覚悟せよ。汝らが相手するはクレイス王立兵学校歩兵科第五十七期首席卒と……」
「次席卒！　ああ、ちなみに、俺が首席ね」

「剣術の成績は某が上だ」
「成績はな！」
「ふん、ならば実戦でどちらが多く倒せるか……」
「勝負だ！」
二人同時に、囲んでいるウィード兵に斬りかかっていった。

「う、嘘だろ？　スィンはこんな中、何も恐れずにかかっていったのか？」
アレックスは橋よりも離れたところで馬上から戦場を見つめていた。
「震えているのか、僕は……。初めての戦場で……」
手綱を握っている手をじっと見るが、すぐさまクビを大きく横に振る。
「しっかりしろ！　僕は王子だぞ。震えていて国民を導けるものか！　行こう！　セイムダル！」
手綱を振るうと、一陣の白馬がホーン橋に向かって駆け出した。

第十二話　暴風

一つの金属音が高く奏でられる。
　スィンが両手にはめた手甲を打ち合った。この手甲の先には約八十センチに渡る刃がある。パタと呼ばれる武器だが、刃先を曲げてかぎ爪状にしたものを左手に装着している。
「さぁて、踊ろうか！」
　ゆっくりと両腕を、鷹が舞いあがるときの翼のように広げて一歩前に出る。
「あ、あいつは……バラポラス平原で大暴れしていた……『かぎ爪のスィン』」
「ほう、知っている奴がいるとは嬉しいねぇ。褒美にお前から殺してやるよ！」
　風切り音の後に人が倒れこむ音。
「三つ！」
「む？　さっきの二人を数えているのか？」
　ヘルマンは振り向くことなく、スィンへと尋ねる。
「別に良いだろ？」
「貴殿が来る前に、某は十一人だが良いか？　これで、十三だ」
　スィンと話をしながらも、足下にはウィード兵の死体が新しく二つ追加されていた。
「良いぜ。それくらいの差はすぐに追いつくぜ！　四つ、五つ、六つ！」
　左手のかぎ爪で敵の身体を引っ張り、右手の刃で貫く。
　両手の刃を同時に横薙ぎで切り捨てる。
　スィンの得意とする二つの戦い方。これを織り交ぜられてはウィード兵も先が読めず、いたずらに兵を失っていく。
　奇抜な戦い方のスィンに対してヘルマンは剣術の見本のような動き。それは長年の研究で一番優れているとされた型通りのもの。

先は読みやすくても、全く乱れない動きに隙はなく、こちらでもいたずらに兵が失われていく。
「二十七！」
「はっはー！　ほとんど追いついたぜ！　二十五！」
ウィード兵の波の中心で渦巻く暴風。肉が切り裂かれる音と悲鳴が奏でる狂想曲。

「やつらは疲れというものを知らぬのか！」
双眼鏡でのぞき込み打ち震えるケッペンに対し、ホークは淡々と前進の号令を出し続けていた。
「たかが二人。いずれは果てる。行け！」
ケッペンは眉一つ動かさないホークにも恐れを抱くが、もう一つ気がかりな点があった。
「あの狙撃手がまだ動いていない。馬防柵が壊れても何もしなかった。今もだ」
双眼鏡であちこち見回すが、狙撃手というものの戦い方を知らないケッペンに見つける術はなかった。
だが、違うものを発見した。
「ホーク少佐。騎兵が一騎近づいて参ります！」
「一騎？　大勢に影響はない」
「は、はぁ……」

「うわああ！」
喊声とはとても言えない、悲鳴に似た声でアレックスは戦場であるホーン橋に現れた。
奇襲ともいうべき突撃により馬体で三人の兵士をはね飛ばしたが、振り回す槍はお粗末で兵士には届かない。
「ち、王子め。大人しくしてろって言っておいたのに……てめえが来ると、護衛しなきゃいけねえじゃねえか」
スィンはアレックスの姿を認めると、素早くそちらに移動する。

「ヘルマン、ここは任せたぜ！　悪いが敵の進軍を食い止めてくれ！　五十五！」
「五十二……抜かれていたか……。任されよう」
橋の東から押し寄せてくるウィード兵の進行を妨げるようにヘルマンは仁王立ち。
「さてウィード兵よ、二人が一人になったからと安心しないことだな」

「ス、スィン！　来てくれたのか！」
馬上のアレックスに笑みが浮かぶ。
「馬鹿野郎！　大人しくしてろと言っただろ！」
アレックスの傍にいる兵士をなぎ倒しながら、スィンは叫ぶ。
「僕は王子だ。戦場を臣下に任せて指をくわえていられるような真似は出来ない」
眉をつり上げて反論するが、スィンに聞く耳はない。
「自分の実力を弁えずに無茶すんじゃねえ。俺が苦労するだろうが！　ああ！　馬が邪魔だ！」
突きと薙ぎ、繰り出される攻撃は先ほどヘルマンと一緒の時と異なり、アレックス達を傷つけないように制限されたものになる。
「せっかく逆転したって言うのに、また追い抜かれるじゃねえか……六十三！」
「何の話だ？」
「王子サマには関係ねえよ」

突然、ホーン渓谷に銃声が響き渡った。
「銃声？　狙撃手がいるのか？」
スィンは素早く辺りを見渡すが、王子を含め銃撃を受けた者は見受けられなかった。
「外したのか……。だが……」
ウィード兵もスィンと同じ動きをしたことでこの銃撃はウィード

側からのものではないことを悟った。
「味方？　だとしたら、この銃撃は……」
「スィン！　今すぐ、この橋から退け！」
ヘルマンがウィード兵と戦いながら叫ぶ。
「はぁ？　こんな楽しい戦場から、何故逃げなければ行けないんだよ！」
「良いから退け！　そこの騎兵を連れて退け！　早くしろ！」
「お前はどうするんだよ！」
「気にかける必要はない。行け！」
「分かった。ほら、王子サマ。下がれよ」
「臣下に任せて、僕が逃げるわけには……」
「うるさい！　俺だって残りてえんだよ！　ほれ、行け！」
馬体を叩いて西岸に誘導して、自分は下がりつつウィード兵を切り倒していった。

第十三話　空の民

ホーン橋から少し渓谷を降りた岩場に黒い影が動いていた。
「合図の銃声から百数えた後……この仕掛けを発動させる……手はず通りだ」
頭の中で、流れを再確認する。
「ウィードが来る前に完成させたかったが、意外と早かった。だが、どうやら間に合ったようだな。橋の上の戦況がどうなっているか分からないが、ヘルマンを信じるしかないだろう」
スネイプの両手には二本の銅線が握られていた。
「九十八、九十九、百！」
言い終えると同時、銅線を重ね合わせる。

刹那、渓谷に轟音が響き渡る。ウィードの進軍よりも、ヘルマンとスィンの二人が生み出した暴風よりも、大きなそれは、橋の中央に火と煙を生み出していた。
「何だ！　今の爆発は！」
ケッペンは双眼鏡で確認するまでもない現象に驚き慌てふためいた。
「ホーク少佐！　引き上げさせませぬと、兵達が……」
すぐさまホークの顔を伺うと、彼は眉を吊り上げ、目を見開いて落ち行く橋を眺めていた。
「分かっておる！　全軍退却！」

「へ、ヘルマン！　橋が、橋が落ちる！」
橋の爆発はちょうど、スィンとアレックスが西岸にたどり着いたときだった。
「待て！　どこに行くんだ！」

「決まっているだろ！　ヘルマンを助けに行く！」
「ダメだ！　君まで落ちる！」
「今なら、まだ、間に合う！」
アレックスは手綱を振るうと、馬で橋の入り口を塞ぐ。スィンの行く手を遮るように。「何するんだよ！　どけ！」
「諦めるんだ！　君まで落ちる！　そんなこと！　黙ってみていられない！」
「ヘルマンが落ちるのは黙ってみているのかよ！」
「君が言ったはずだ。一を犠牲にして十を救うか、十を犠牲にして一を犠牲にするか、と。
僕にとって……君が十だ！」
「く！　小生意気な……良いからどけよ！」

橋の上では、大混乱が起きていた。爆発によって中央が音を立ててひびが入り。そこから少しずつ沈んでいる。
その結果はどうなるか、そこにいる者全員の脳裏に浮かぶ。
もはや、ヘルマンに構う者はいない。
「某達の勝ちだ」　余裕の笑みを浮かべて、サーベルを鞘に納めるが、その身体は橋と共に少しずつ下がっていた。
立つことが困難なほど橋が傾いてくると、ウィード兵がポロポロと渓谷へと落下する。
「そろそろか？」
橋の欄干に手をつかんでいたヘルマンが辺りを見渡すが爆発による煙は今だに晴れず視界を遮っていた。

「これはいったい何の悪夢だ！」
ホークが頭を抱えて悲壮な叫びを上げる。
「しかし、さすがにあのクレイス兵も、これでは……」
ケッペンの呟きがホークの耳に入る。
「たった一兵卒を倒すために、どれほどの犠牲があったと思う！

死んでなければ困る！」
「な、何故だ！」
ケッペンは双眼鏡をのぞいて見える世界が信じられかった。

谷底から吹き上がる風に乗ってゆっくりと舞い上がる真紅と深緑の影。

風が煙を散らして少しずつ浮かび上がる二つの姿。

軍服姿のヘルマンを吊り下げた小柄な身体と細い腕。

まだ幼さが残っているが大人へと脱皮しようとする少女の容貌。

そして何より夕陽を浴びて光に濡れる紅い翼。

「な…何故だ！　何故別たれた四つの民の一つ！　空の民がクレイスに味方する？」
ケッペンの驚きを風が少女の元へ届ける。
空の民……伝承において人間と住む世界を分けた一族。彼らはその名の通り背中の翼で大空を舞う。
その一人がまさに今目の前で宙に浮かんでいた。その姿は天使かあるいは悪魔か。
「え？　何故ですって？　何故かと問われれば答えは一つ……愛、かしら？」
ケッペンの疑問に少女は戦場に似つかわしくない満面の笑みで答えた。

第十四話　勝利

「赤い翼を持つ女……ウィード革命を成功に導いた『勝利の死神と天使』……傭兵だったな。あの時は一緒の軍にいたというのに……金次第で敵味方を変える輩か」

ケッペンが歯がみをしている横では、相変わらずホークが頭を抱えていた。

「わ、私の第二十一歩兵大隊が……」

「ホーク少佐、嘆いても仕方ありません。橋が落ちた以上、ここを攻略することは無価値です」

「わ、私の……」

「これは……かなり混乱しておられる。副隊長！」

「は！　ここに」

「混乱しておられる大隊長に代わりあなたが指揮を執られるべきだ」

「は！　第二十一歩兵大隊、退却だ！」

ほとんどの兵士が谷底に落下して残ったわずかな兵が、さざ波のように姿を消していった。

「ウィード軍が退いていく……スネイプの策には驚かされるばかりだ」

「あったり前よ！　スネイプがいればどれだけ不利でも負けないんだから！　それよりも私はこの策を聞いてすんなり受け入れるあなたに驚きよ」

クルラは胸をはりヘルマンの腕を掴んだまま西岸の方へと向かう。

「スネイプが勝てると言った。貴女が私を助けると誓った。ならば全ては信じるだけだ」

「金次第で動く傭兵を信じるの？」

「無論。それで敗北するなら、それで戦死するなら、それは己の未熟さによるもの。悔いはない」

「変わっているわね」
小刻みに震える肩からヘルマンに振動が伝わる。
「貴女方ほどではない。金次第で命をかけているのだから」
「金で命をかけているのはスネイプよ。私は、愛」
人差し指を横に振ってヘルマンに否定の意を示した。

「ヘルマン！　心配したぜ！　勝負を勝ち逃げする気かと……」
西岸ではスィンとアレックスが出迎えていた。
「気にかける必要はないと言ったはずだ」
「んなこと言ったってよう……ったく。クルラがいるならいると言ってくれよ。久しぶりだな！」
「なんであんたがここにいるのよ？」
クルラはヘルマンを地面に下ろすと、顔をしかめてスィンを見た。
「まぁ、詳しくは後でな。それよりお前がいるということはスネイプもいるのだろ？」
「まぁね。これから拾いに行くのよ。あんたも一緒に来る？　ついでに置いてきてあげるわ」
「つれねえなぁ……さっさと行ってこいよ！」
「言われなくても行くわよ」
スィンに舌を出して飛び立っていく。
「今のが空の民……初めて見たよ。旧知の仲なのか？　スィン」
「ああ、孤児院で同じ釜の飯を食った仲さ。そしてこいつがヘルマン。兵学校の同期だ」
「ヘルマン＝シュタイナー曹長です。まさかこのようなところで殿下に拝謁できるとは夢のようです」
ヘルマンの敬礼、そしてアレックスの返礼……軍特有の儀式が取り交わされる。
「君の活躍は聞いている。よくぞホーン橋を死守してくれた。この橋を砲兵部隊が突破したらウェスト・ホーンの港は火の海になっていた。そうなればイースト・ホーンに終結したウィード海軍によっ

てクレイス城は廃墟と化していただろう」
「ありがたきお言葉」
「スィン少尉からも色々と聞いている。君にはもう少し活躍して貰いたい」
「スィン……少尉？」
ヘルマンは眉をぴくりと動かすが首は微動だにしない。そんな様子をスィンはニヤニヤしながら眺めていた。
「まぁまぁ、王子サマ……その話はスネイプ達が戻ってきてからにしようぜ。あいつらも連れて行くとより面白い」
今度はアレックスが眉をひそめる番になった。
「面白いとは……何だ。君は僕の使命を何だと思っているんだ？」
スィンはにやつく顔を止める気配はない。
「決まっているだろ？　俺様が大活躍する英雄譚さ」
アレックスは肩を落としてため息をついた。
「君には認識を改めて貰う必要がありそうだな」
「お、そうこう言っているうちにスネイプ達が戻ってきたぜ」
先ほど夕陽に照らされていた空の民も今は闇に包まれて三人の元に降り立った。
、秋の涼しい夜風が戦場の熱気を払い、王子は言葉を紡ぎ始めた。

第十五話　口止め

「王子の命令とあらば拒否する道理はありませぬが、筋だけは通していただきたい」
「筋……とは？」
「王子サマよ。俺達軍人は指揮官の命令で動いている。それは覆せないって事さ」
「スィン。君は随分と指揮官の命令を無視していたようだが」
「話をそらすんじゃない」
　二人のやりとりにヘルマンが割り込んでくる。
「アレックス王子。某は第十五歩兵中隊所属で中隊長よりこの橋の守備を命じられております。
　この任を解いて新たに王子に随行する命令を頂かないことには従えません」
「ヘルマンは堅いねぇ」
　アレックスはヘルマンの言葉に一度頷くが、すぐあごに手を当てて考え込んだ。
「君の指揮官がどこにいるかは分からないがここから離れているのだろう？　そこに行くことになるとさらに遠回りに……」
「書簡でやりとりすれば良いだろ」
　スィンの提案にアレックスは顔を上げる。
「なるほど書簡か……だが誰かに行ってもらわないと」
「クルラならひとっ飛びだぜ」
「なんであんたに指図受けなきゃ行けないのよ」
　クルラが眉をひそめながらスィンを睨み付ける。
「俺達も傭兵とはいえ、ヘルマンと同じく第十五歩兵中隊長の指揮下で動いている。王子に随行するなら追加料金を頂かないとな」
　スィンとヘルマンの表情が一気に曇るが、アレックスはなるほどと頷きながら口を開いた。

「なるほど。さすがは金で動くという傭兵。幾ら必要なのだ？」
「俺とクルラ、二人で百万グラハムだ」
曇った表情をしていた二人の目が大きく開く一方でアレックスは全く気にしないように首を縦に振った。
「良いだろう。だが手持ちがあるわけではない。支払は任務を完了して城に戻った時で良いか？」
「ああ、良いぜ。それじゃぁ、クルラ。最初の仕事だ。ミラー中隊長の所に王子の書簡を届けてくれ」
「はーい」
「スネイプの指図だったら聞くのかよ」
「当たり前じゃない」

すぐさまアレックスがしたためた書簡を持ってクルラが飛び去ると、暗闇の中男四人歩き始めた。印璽を盗んだ賊はすでにかなりの距離を進んでいると思われるためだ。
アレックスを戦闘にヘルマンが続く。後ろでスィンがスネイプの肩を組んで小声で話しかけた。
「相手が王子だからってそこまでやるかね？　相場の三倍……いや、五倍はふっかけているだろ？」
スネイプは表情を一切変えずに指を四本立てて一言だけ告げた。
「これでどうだ？」
「お、話が早いねぇ」
「百万の中に既に含まれている」
「もう少し勉強しろよ」
スィンは折り曲げたままのスネイプの親指を無理矢理開こうとするが、頑な抵抗にあって中々叶わない。
「これで満足しておけ」
「いやだね。親指を立てないなら。王子にばらすぜ？」
「分かったよ。これで良いんだな？」
「最初からその気なんだろ？　無駄な交渉をさせるなよ。へへ、五

万グラハムなんて夢のようだぜ」
「その代わり、王子には何も言うなよ？」
「分かっているって。お前とは大事な幼なじみだからな」
ニヤニヤしながらスィンはスネイプから離れてヘルマンの方へと駆け寄った。
「大事な幼なじみ相手に口止め料の請求かよ」
やれやれと呆れながら肩をすくめるころには最初の峠にさしかかっていた。

幕間

街から離れた山間部の冬は雪が降り積もり、夜になると寒さが一層厳しい。
暖炉で薪のはぜる音が冷たい空気を切り裂く。
「おい、スネイプ知っているか？　昔よっつのたみってのに分かれたんだってよ」
子供達は昼間元気に走り回っていたはずなのに、夜は夜でおしゃべりに余念がない。
「もちろんだ。この前シスターメリーから習っただろ」
「え……？　そうだったっけ……」
「シスターの話を聞いていないのか？　昔人々は争いが絶えなかった。そこで神様が怒ってすみかを四つに分けた。即ち、俺達人間である草の民、ドワーフと呼ばれる土の民、エルフと呼ばれる森の民……そしてクルラのような空の民だ」
「な、なんだよ。それくらい俺にだって言えるよ！　自分ばっかり何でも知っているみたいな顔するなよ！」
「へぇ。それじゃぁ。さらに二つの民が現れたのは知っているか？」
「なんだって？　え、ええと……」
「ちょっと、スィン！　あなたまたクルラをいじめたのね？」
薪が暖炉の中でがたんと言う音を立てて崩れる。
「シ、シスターメリー……」
スィンが振り返るとそこには仁王立ちする法衣をまとった女性の姿とその背後でしがみつく小さなクルラの姿があった。
「い、いじめじゃないですよ。シスター」
「スィンがまたぶった」
「クルラちゃんはこう言っているけど？」
「ぶってなんかいないですよ！　ちょっと当たっただけですよ」
「痛かったもん！　スィンはぶった！」

「ぶってないよ！」
「う～。ぶってないって言い張るのね……それじゃぁさっきスネイプが言ってたことを答えられたら許して上げる！」
クルラが笑みを浮かべる一方、スィンは汗が止まらない。
「スネイプが言っていたこと……」
「二つの民の話だな」
「あらスィン君。この前授業で教えたはずだけど覚えていないのかしら？」
「シ、シスターまで……ちょっと待ってよ……」
スィンは腕組みして頭をかしげるが、ふったところで答えは出てこない。
「答えられなかったら、ぶったことを認めてちゃんと謝ってよ」
「だから待てって言っているだろ！　今思い出しているんだから」
「幾ら考えたって授業を聞いてないんだから思い出せるわけ無いじゃない！」
「バカにするなよ……ええと確かだな。そう、森の民だ」
スィンの言葉に他の三人が息を呑む。
「森の民は純粋だから光に触れていれば光に染まるが、闇に触れて闇に染まった者達が現れた。そう、即ち闇の民・ダークエルフと呼ばれる者達だ」
「へ、へぇ、凄いじゃない……だけどもう一つは分からないでしょ？」
「だからバカにするなって……草の民は忠実な下僕が欲しくなった。今までは犬を飼っていたが、より働くように手を加えた、即ちだな……」
今度はスィンが笑みを浮かべる番。対照的にクルラは目を丸くして息を呑んだ。

第十六話　影

バスポラス平原の北部に位置するヒュージ山はクレイス領内随一の高さを誇る独立峰である。
”八”の字状の末広がりの形状は多くの人々を魅了してきたが、クレイス国民に敬愛されているのは見た目が良いからだけではない。
ヒュージ山を水源として八方に流れる幾筋もの川は平原を形成し、水資源として農耕にも人々の生活にも欠かせないものである。
また、その高さから北より襲い来る冬の風を遮るため、南部は雪の被害が最小限で済んでいる。
なにより、初代クレイス王がヒュージ山を霊峰と称え、頂上から見える範囲をクレイス領と定めたことにから、代々の王の手で一年に一度祭祀を執り行う。
このためヒュージ山は幾つもの道が整備されており観光の名所として冬を除き登山客が後を絶たない。

形状・水資源・気象・歴史・観光……あらゆる面に於いてヒュージ山は名実ともにクレイス一の山であった。

しかしウィードとの開戦以来国民は観光どころではなくなり、人影は全くと言って良いほど無くなった。
頂上付近にある見張り台では二人の兵士が寒さに打ち震えていた。
「バスポラス平原ではにらみ合いが続いているな」
南の麓に視線を落とすと広がる平原に二つの塊が見える。
「お互いに決め手がないんだろ」
東の塊がウィード軍で、西の塊がクレイス軍だ。
「前から思っていたんだが、何故ウィード軍は背水の陣を引いているんだ？」
ウィード軍の東側にはヒュージ山を源流とした川が流れていた。

「それが我らがメムルーク将軍の作戦だよ」
「ん？　どういうことだ？」
「渡河する際に攻めることは有利だ。だが、メムルーク将軍はあえて川を渡らせて総力戦に挑んだ。相手に背水の陣を引かせることで殲滅する気なのさ」
「それじゃぁ、さっさと殲滅すればいいじゃないか」
「敵もそれを分かっていて、防御に徹した陣形を引いている。おそらくバスポラス平原は囮で、他の街道を少しずつ攻略する作戦じゃないかと」
「それは大変だ！」
「メムルーク将軍もそれは分かっているから、他の街道を牽制する戦いをしている」
「それで長期化して、『お互いに決め手がない』ことになるのか」
「おい、あれ見ろよ」
一人の兵士が指さすところには、つづら折りに上がっていく登山道を無視して、木から木へと飛び移り頂上まで一直線で突き進む濃紺色の影があった。

一般人なら高山病を予防するために一泊二日で登るところをあっという間に頂上までたどり着く。見張り台の横に来た影は息一つ乱れる様子はない

「何者だ！」
兵士の一人が槍を影に向けて突き出す。だが、影は気にすることもなく目をつむり耳に手を当てて鼻をひくつかせ、何かを探すようにぐるりと周りを見回した。
「無視をする気か！」
「待て！　この方は……」
もう一人の兵士が手で制す。
「クレイスの忍び……味方だ」

「何ですって！　そうとは知らず無礼を……」
兵士達のやりとりも耳に入っていないのか、突然ぴたりと止まり目を開く。
「キタ……ほーんケイコク……ノホウカ……」
「え？　何が……」
忍びは口笛を吹くと空から一つの影が舞い降りて腕に捕まらせた。
「これは、クレイスオオタカ……」
兵士達の疑問の声を尻目に、忍びは淡々と手紙を鷹の足に括り付ける。
「イケ」
言葉と同時に鷹は舞い上がって一直線に南西の方角へ去っていった。
「あっちはクレイス城の方角……あ？」
兵士達が鷹に気を取られている間に、忍びはは登ってきたとき以上の早さで駆け下りていった。

「な、何だったんだ？」
「報告は……」
「必要なのか？」
見張りの兵士はお互いに顔を見合わせるだけだった。

第十七話　王将軍

ウィード王将軍アウグスティーン・ケリカー……前の王ベルンハルト七世の代に将軍として仕えておきながら、革命により王に成り上がった男である。
王位と将軍の二つを兼ねていることから王将軍と名乗っている。

「ホーク少佐とケッペン大尉よ。申し開きがあるなら聞いておこうではないか」
ガーゼルの城、謁見の間で玉座に座るアウグスティーン王の前で二人は跪いて打ち震えていた。
謁見の間には大臣のような文官が一人もいない。二人を取り囲んでいるのは歴戦の将校ばかりである。
「王よ！　言い訳はありません！　ですが、奴らを討ち取る機会をもう一度このホークに与えください！」
意を決したようにホークが口を開く。アウグスティーン王は表情一つ変えずにケッペンの方を向く。
「ケッペンよ。お前は？」
「ホーク少佐に同じく、私めにも機会をお与えくだされば必ずや奴らを討ち取ってみせます」
「そうか……」
長い沈黙。謁見の間は空気が凍り付いてしまった。
「処分を言い渡す」
跪く二人の肩がぴくりと動く。
「銃殺刑だ。すぐさま執行せよ」
「王将軍よ！　お慈悲を！」
二人ともすぐさま顔を上げるが、両脇から衛兵に槍を突き出されて動きを抑えられる。
「ならぬ。たかが数名の兵を討ち取ることができぬ無能の士官を許

せぬ。貴様らは……」
親指を立てて自分の額に当てた。
「王将軍よ～。お慈悲を！」
二人の悲鳴にも似た金切り声が謁見の間から遠ざかっていった。
「諸将も油断するようなことがあれば、彼等と同じ目に会うことをお忘れ無きよう」
「「は！」」
将軍達は解散してそれぞれの持ち場へと去っていく。一人残されたアウグスティーン王は天井を仰ぎ見るようにして過去を思い出していた。
「勝利の死に神スネイプか……奴を懐刀として革命を起こし、いかなる不利な状況も奴の策によって勝利を収めていった。奴が相手であればホークやケッペンに相手させるのは酷な話か……だが、それで許せば奴には負けても許される、などという風潮ができあがる。それは避けねばな」
目をゆっくりと開き再び床を見下ろす。
「なんとしてでも奴をこちらに引き込みたいものよ。そうすればクレイスとの戦い、否、ブライタン島全土を統一も夢ではない」
「さすれば、王将軍」
謁見の間に朗々と女性の声が響き渡る。凛と張り詰めた声は聞いたものの心を引き締める力を持つ。
「誰だ？」
「リラ・ビセートにございます。私と勝利の死に神スネイプは同じ傭兵団『蛇の牙』に所属しております」
謁見の間に表れ、玉座の前でさっと跪くのは真紅の鎧を身にまとった女騎士。
「おお、そうだったのか……」
「私の方から彼に接触し説得に当たりましょう。何、所詮は金で動く傭兵。あっさりとこちらに参りましょう」
「なるほど、うむ。それではスネイプの件はそなたに任せた。よろ

しく頼むぞ」
「は」
謁見の間から城の出口へ続く暗い廊下を歩きながらリラは呟く。
「何が勝利の死に神だ。今まで奴とはともに戦ってきた。つまり私も常に勝った側にいたのだ。ならば私も勝利の女神の二つ名を欲しいままにしても良いではないか。
今回が初めて、敵味方に分かれたのだ。奴をこちらに引き込むだと？　冗談じゃない！　どちらが勝利に貢献してきたのか……傭兵団の連中、いや！　ブライタン島全土に思い知らせてやる！」

第十八話　遭遇

「スィンの口車に乗って随分と遠回りとなってしまった。同じ道を戻るなんて不毛だ」
「へへ、まぁそう言うなって。おかげで五万……いや、強力な味方と一緒になれたんだからよ」
スィンはなれなれしくアレックスの肩を抱き寄せてにやにやと答える。
が、アレックスは顔をしかめてスィンの手を払った。
「スネイプの案に従って、直接ウィードの首都ガーゼルに向かうため、可能な限りクレイス領内を進むことにするんだったらバスポラス平原から向かった方が近かったではないか」
「だが、そうすることに決めたのはスネイプが居たからだろ？」
「うむ。さすが傭兵。僕が気付かなかったことを次々に決めてくれた。進路だけじゃなく、食事当番をクルラにやって貰うこと、僕達の身分を隠すために近くの街で服を着替えること。スネイプが居なければ何も知らないまま突き進むところだった」
スネイプは褒められても表情一つ変えないまま、峠を歩み続ける。目的地はこの峠を越えた先にあるベーラングの街。
「ベーラングはバックボーン山脈の麓にあり北西と南東の都市部を結ぶ交通の要衝。大概のものは揃えられるから、我々の目的を果たすことができる」
というスネイプの言葉に従ってのことである。

枯葉が降り積もった道を踏みしめながら登っていくと次第に辺りは明るくなってきた。
「もう間もなく夜明けか……ベーラングに着いたら少しは休みたいものだな」
アレックスが呟くと登り行く峠の向こうから朝日が明るく一行を

照らし始めた。
「スネイプ！」
朝日と同時クルラが上空より舞い降りてきて、スネイプの身体を抱きかかえた。
「間に合ったか……」
そのまま、上昇し紅葉した木々の間に飲み込まれるように消えていった。
「何があったんだ？」
アレックスの疑問にスネイプもクルラも答えない。いや、その場に居もしなかった
代わりに答えるものはただ一人。かぎ爪の付いた手甲をはめ始めたスィンだった。
「逆光でよく見えないが……その真紅の鎧……リラか？」
「あら、『かぎ爪のスィン』に覚えていただいているなんて光栄ね」
朝日を背に浴びて一行を見下ろすように立ちはだかる女が一人いた。
「俺もあんたに覚えてもらえているなんて光栄だな」
両手の得物を胸の前で交差させてリラの前に立ちはだかる。ヘルマンもまたサーベルの柄に手を添えてスィンの横に並ぶ。後ろではアレックスが状況も飲み込めずにスィンに尋ねた。
「スィン、知っているのか？」
「名前だけはな。あいつの名はリラ・ビセート。スネイプ達と同じ傭兵団『蛇の牙』に所属。その真紅の鎧を纏い戦場を駆け巡ることから付いた二つ名は……『戦場の赤いバラ』」
「その名前は好きではないのよ。私の姿だけを表していて、私の武功を表しては居ないから。本来ならば私が戦場を駆け巡ったことはすべて所属する軍を勝利に導くため。勝ち取った武勲は数知れず。にもかかわらずバラに例えられるのは心外なのよ」
「へぇ、そうかい……それでどうするんだ？　ここで王子サマを討ち取って手柄とする気かい？」

「は！　そんな坊やを討ち取って何の自慢になるんだい？　かぎ爪のスィンを討ち取ったというならいざ知らずね」
「ご指名は俺か……悪いなヘルマン。先に行かせて貰うぜ」
一歩前へ出る。未だお互いに間合いの外。
「悪いけど、今回はあなたでもないの。目的を果たした後でゆっくりとお相手したいものね」
「俺じゃない。王子サマでもないってことは……」
「そう、今もこの森の中で息を潜めて私のここに狙いを定めている誰かさんよ」
親指を自分の胸に当てて笑みを浮かべた。

第十九話　戦友

一陣の風が吹き抜ける。木々の枯葉がカサカサと乾いた音を立てて去っていく。
黒と赤がその音の中に飲み込まれる。
スネイプは既に弾を装填しリラの胸に狙いを定める。後は指に少し力を入れるだけでおしまい。
なのに……リラと共に戦場を駆け巡ったことを思い出す。

狙撃手に感傷は不要。例え今まで味方であったとしても今は敵。撃つことにためらいがあればそれは失敗に繋がる。一旦目をつむり頭に浮かんだことを打ち消そうとするがいつまでも去っていかない。

「あの男のクセは分かっているよ。いつ、どこから撃つのか。弾道さえ予測可能だ。分かってさえしまえばよけるのは簡単な話だ」
リラはあごをツイと上げて見下すようにしてスィンに語りかける。
「ほう……そんなにあいつのことが分かっているのか？」
「分かっているさ。同じ部隊で戦場を駆け巡ったからね。いつもいつもいつも！　辺境討伐作戦の時もペティリシア内乱の時もウィード革命の時も……同じ勢力についただけじゃない。いつも一緒に歩き、飯を食らい、眠りについたんだ。そう……身体を重ねるときもあったね」
スィンが目を丸くしてリラを見た。
「へぇ、クルラ一筋かと思っていたがそういうこともあるなんてな……。まぁなんだ。幼なじみとして思うのは、何か寝取られた気分なのがむしゃくしゃするぜ。悪いがこの八つ当たりはあんたに向けさせてもらう……ぜ！」
言い終えると同時にリラに向かって駈けだした。

（なるほど……。さっきから頭の中に浮かんでいることは、奴に狙撃が通用しないという警告だったのか）
スネイプが隣を見ると表情が凍り付いたクルラの姿があった。
（やれやれ……戦場に感情を持ち込むなとあれほど言っているのだがな）
クルラを肘でつつき、手振りで羽ばたきをするように伝えると、凍り付いていた表情が驚きへと変わった。
その顔は『本当に良いのか？』と尋ねている。
（やれ）
クルラの迷いを断ち切るように指を突き出した。

森の中に剣戟の高い音が数回鳴り渡る。
「言わなかったか？　今日の相手はあんたじゃないって」
スィンの両手から繰り出されるかぎ爪をあるいはレイピアで捌き、あるいは身をよじって躱す。
「最近耳が遠くてね。良く聞こえなかったのさ」
レイピアに捌かれるなら、そのレイピアごと叩き斬るより強い一撃を。
身をよじって躱されるなら、よじられる前に貫くより早い一閃を。
一合、また一合交える度により強く、より早く。
「ひゃっはー！　今日の俺は最高潮だ！　悪いね……とっとと死ねや！」
先ほどより強い一撃が繰り出されるなら、レイピアの角度をより深くして捌く。
先ほどより早い一閃が繰り出されるなら、より先の未来を予測して躱す。
一合、また一合交える度により深く、より先を。
「悪いが死ぬ気は無い。さらに君の狙いも分かっている」

「何？」
ぴたりとスィンの動きが止まる。
「私の注意を君に向け続ければどうなるか……。それが分からないバカだとでも？」
「俺が相手している間にスネイプが撃つってか？　そんなこと狙ってねえよ。俺は俺自身の力だけでてめえを倒す！」
その時、一本の木の上から鳥が羽ばたく音が聞こえてきた。

第二十話　策略

「今の羽音はクルラのもの……だね。狙撃手が自ら自分の位置を知らせるようなヘマはしない。となると、今の羽音とは別の場所にスネイプは居るってことね」
「へぇ、そんなことまで分かるってか」
「あなたには分からないの？　スネイプの幼なじみだという割には彼のことを何も知らないのね」
「は！　そんなもの知ってどうするんだよ。分かるのはこの場所で俺がテメエを倒すってことだけだ！」
剣戟が再開される。より激しくなっていくスィンによる剣の舞。
その激しさが増せば増すほど、より冷たくなっていくリラによる剣の舞。
「おいおい！　熱い戦いをしようっていうのに、なんでそんな冷めた表情をしてんだ？　もっと盛り上がろうぜ！」
「君には分からないのだろうね。今のクルラの羽音で逆にスネイプの位置が想像できた。あとは彼と私の間に君が居るように戦えば良いだけだ」
「あーん？　それってつまるところ……」
スィンの動きが止まり、その眉がつり上がっていく。
「そう、スネイプは君が邪魔で狙撃できない……というわけだ。君の動きが大振りなのでより助かる」
「は！　それは意味がない話だな。あの男は邪魔だと思ったらためらいはねえよ。俺を撃ってなおテメエを撃つ。そういう男だ」
右のかぎ爪で自分の肩を叩く。
「それが事実なら、既に君はこの世にいない。そうなっていないのには訳がある。君が撃たれている間に私は逃げおおせるからだ」
「なるほど、それじゃあ尚更俺がテメエを倒さなきゃいけねえな」
三度目、斬りかかろうとした瞬間に銃声が森に響き渡る。

「く！　何故だ？　奴が撃つ瞬間は分かっていたはずなのに……！」
銃声が響く前にリラは動き始めていた。撃つ瞬間、撃つ場所がリラの頭の中にあるものと同じならば完全に躱せていた。
だが、現実のリラは脇腹からわずかに血を流していた。
「急所は……躱せたが……分が悪い……」
素早く脇の茂みに入り込み身を隠すリラ。
「スネイプ！　テンメェー！　俺が倒すと言ったのに手を出しやがったな！」
「スィン！　スネイプに怒りを向けている場合じゃない！　奴を追うんだ」
「うるせぇな。王子サマは引っ込んでろよ！　獲物を横取りされた悔しさが分からない奴はな！」
スィンの剣幕に横から口を出したアレックスは身をたじろいだ。そんなアレックスの肩に手を置いてヘルマンは首を横に振った。
「おい！　スネイプ！　そこにいるのは分かっているんだぞ！　降りてこい！」
スィンはかぎ爪をブンブンと振り回しながら一本の木を見上げて叫んだ。
「あれはさっきクルラの羽音がした木じゃないか。狙撃手は自分から位置を知らせるようなヘマはしないんだろう？　あの木にいるわけないじゃないか」
アレックスがそう呟くと、果たしてその木から黒い影が舞い降りてきた。
「チッ……。裏をかいたっていうのに逃げられたか。何で追わないんだ。せっかく見せ場を与えたというものを」
「手負いを追ったって面白くねえよ。俺は『真紅のバラ』と一騎打ちで討ち取った、という名誉が欲しいんだよ。良いか、奴のキズが治って再び目の前に現れたときには俺一人でやるからな」
スィンはかぎ爪をぐいっと押しつけて警告するが、スネイプはひょいっと躱す。

「騒がせたな。さぁ、ベーラングの町へ急ごうぜ」
スネイプはアレックスとヘルマンに声を掛けて歩み始めた。
「おーい、無視すんじゃねえよ！」
「スネイプとリラが身体を……」
今度はクルラが降りてきてスィンの横を通り過ぎていった。
「って、まだそこにこだわっている奴が居たよ」
スィンは肩をすくめて、先を急ぐ四人の後を追った。

第二十一話　ベーラング

交易都市ベーラング。
煉瓦造りの城壁に囲まれたこの町は北西と南東の都市を結ぶクレイス街道の中心に位置し、物流の拠点となっている。
戦時下の今でも活気は絶えない。と言っても、動いている物は、質の悪い物や武器ばかりであるが。

「返り血まみれのこの服をさっさと着替えようぜ。全く入り口で脱走兵に間違えられるなんて災難だぜ」
服屋の前で物色しながらスィンは呟いた。
「その君達の無実を僕が証明して上げたんだ。感謝するんだぞ」
「へぇへぇ。そもそも親衛隊に命じておきながら歩兵の格好をさせたままの王子サマには感謝の念が尽きませんよ。自腹を切って着替えの用意することには決して恨んでおりはしませんよ」
「む、それは本当に感謝しているのか？」
「あ、お姉さんこれとこれを試着したいんだけど」
スィンは深緑色の上下を手にとって、店員に声をかける。
「それは今着ているクレイスの軍服とあまり変わらないのではないか？」
スィンは指を左右に動かした。
「ちっちっちっ。この色は森や草原では身を隠すのに適しているんだよ」
「これから向かうのは荒野だけどな」
ヘルマンの呟きはスィンの耳には届かず奥の試着室に消えていった。
「しかし、着替えることになるとはな……」
アレックスは愛おしそうに鎧を、特に左肩についた王家の紋章を撫でた。

「納得して頂いたものと思っておりましたが……」
「納得はしているさ。この鎧を纏ったままウィード領内に侵入すればたちまち狙われる。それに気付いていなかった僕が浅はかだっただけだ。しかし……」
多数の服が並ぶ店内をぐるりと見回す。
「僕にふさわしい服がないじゃないか。見てみなよ。この生地。がさがさしている」
「殿下が今までお召しになられていた物は絹です。絹は上流階級の者しか着ておりませんので、そのようなものを着ていれば、身分を隠す目的が果たせません」
「そうなのか？　だが、このようながさがさした生地があろうとは」
「今は我慢の時でございます。辛抱なさってください」
「ヘルマンがそういうなら。我慢しよう。これを試着たいのだが」
アレックスは白を基調とし青の線で装飾された服を手にとって奥の試着室に消えていった。

「着替えは終わったのか？」
集合予定の噴水広場でスネイプはスィンに語りかけた。
「ああ、食料調達部隊の首尾はどうだ？」
「見ての通り、クルラが大量に仕入れた」
スネイプは親指で後ろにいるクルラを指さした。
「あれ？　ヘルマンってばずいぶん暗い赤の服にしたのね。私の真似？」
「返り血を浴びても目立たないからだ……」
クルラの質問にヘルマンは小声で答えた。
「先生！　何か怖い事言っている人がいます」
スィンが手を挙げて叫ぶ。
「誰が先生だ、誰が」
「スネイプだよ」
「アレックス。譲ってあげよう」

「遠慮しておくよ。そんなことよりお腹がすいた。早く食べようじゃないか」

第二十二話　晩餐

日が落ちる頃、五人は木造の料亭へと足を運んだ。
「ひゃっほー、久々にまっとうな食事だぜ。チーダー。チーダー食べるよな。みんなでチーダー食べようぜ」
足取り軽くスィンは店内へと入っていった。
四人が扉をくぐるとすでに店内は夕食と酒を求めている人々でごった返しになっていた。そんな中でもスィンが一角を占有して
「チーダー五人前！　肉肉野菜の比率で！」
等と若い女性の給仕係に注文完了していた。
「チーダーってそもそも何なのだ？」
「何だよ。アレックスは知らないのか？　まぁ料理が来たら分かるよ」
「はい、お待たせしました。チーダーです」
注文を受けた給仕が五人の前に、円形の生地が山盛りに置いていく。
「え、これだけ？」
「ここからが本番だぜ」
続いて置かれるのは、ジュウジュウと焼けて湯気と共に匂いを辺りに広げる大量の腸詰め肉が盛られた皿、大量のレタスの上に、ゆで卵を刻んだもの、茹でたジャガイモをすりつぶしたもの、コーンにトマト、煮豆が載せられた皿が次々に並べられた。
「これは美味しそうだな！」
目を輝かせながらアレックスは鼻をひくつかせた。
「おっと、そのまま食べたらダメだぜ、アレックス。こうするんだ」
円形の生地を四つに折ってできた扇形を真ん中から開いて円錐状の筒を作り上げた。
「この、バスポラス麦をひいて粉にした物を水で練って焼いた生地の中に自分の食べたいものを入れて頬張るんだ」

ひょいひょいと、腸詰め肉を多めに入れて、アレックスに差し出した。
「お前が一番に食べな」
「良いのか？」
アレックスは辺りを見回すと、他の三人も未だ手を付けていなかった。
「身分を隠しているとはいえ、立場はわきまえているさ」
スネイプがアレックスの耳元でささやいた。
「そうか、遠慮無く頂こう」
腸詰め肉の乾いた避ける音が耳をくすぐる。口の中に広がる肉汁が舌を刺激していく、その香ばしい匂いは口の中からはなへと逆流していく。
「どうだ？」
「はふはふ、はらい……ごくん。美味い！　ひーひー！　随分と胡椒がきいているな。辛いけど美味い！」
「だろ、よし、みんな食べようぜ」
スィンの言葉を合図に皆が一斉に生地を手に取る。
「僕も自分で作ってみよう。どうやるんだ？　教えてくれ」
「良いか、見てろよ」
スィンが生地を一枚手にとってアレックスに教示している横ではスネイプ達も手早く作っていた。
「はい、スネイプ。作って上げたよ」
「悪いな。クルラ、お前も俺が作った奴を食えよ」
「ちょっと、お前ら、俺がアレックスに教えている間にお互いに交換してんじゃねえよ。俺の分は？　そうか、ヘルマンが作ってくれているよな」
ふとヘルマンに視線を向けると、彼は自分で作った物を頬張っている最中だった。
「おいおい、みんな冷てえな。譲り合いの精神はどこに行ったよ。孤児院で培ったあの心は」

「だから私はスネイプに、スネイプは私に譲り合っているじゃない」
「某は孤児院出身ではない」
「スィン、これで良いのか？　少し形が変なようだが」
「ああ、それじゃ、中身がこぼれ……あーあ……」
「む、どこが悪かったんだ」
「ええい、手間のかかる。だから俺の分は？　作らなくても良いからとって置けよ？」
「次、魚介類を頼むか……」
「私、イカが食べたい」
「追加注文しているってことは残ってねえのかよ！　せめて肉頼めよ！」

第二十三話　道案内

「さて、これから向かう予定のゴレアスステップだが……」
「ふむ、この大豆はなかなかの物だな。宮廷でもこれほど美味いものは食べたことがない」
「だろ？
味付けに秘密があるんだぜ」
「交易路とはなっているが、実際は道無き道を行く荒野地帯だ。下手すりゃ砂漠みたいなところだから道案内が必要だ」
「スィン、僕の作った物を食べるといい」
「ほう、アレックスが作ったチーダーとはね。普通ならかなりの名誉なことなんだろうよ」
「今でも充分名誉だと思うが……」
「そこでだ。この町でゴレアスステップの向こうにあるビレーダーの町まで交易に向かう商隊と共に向かうのが賢明だ」
「もっとレタスの巻き方を工夫すると良い。他の具と別々になっているが、レタスでも具を巻くんだ。レタスは水分がたっぷり入っているから、濃い味付けの具材と一緒にするんだ」
「なるほど、分かった。次は意識して作ってみよう」
「いいから、聞けよ！　お前ら！」
　スネイプが台の上を思いっきり叩くといくつかの皿が浮き上がった。
「私は聞いているわよ」
「某も聞いているから心配は要らない」
「あんたらは元々これからの状況に対する認識があるから良いんだよ。問題はこの先何とかなるさのスィンと、世間知らずのお坊ちゃまだ。お前らのために言っているんだぞ」
「い、いや、スネイプ。僕はちゃんと聞いているぞ。ゴレアスステップだろ？　あ、姉さん。ビールもう一杯」

「俺の分ももう一杯。その件だがビレーダーの町に行く商隊は居ないぜ」
「ほう、スィンの口からその言葉が聞けるとは思っていなかった」
スネイプは腕組みをして椅子に背もたれた。
「ビレーダーは戦渦の中心だからな。昼のウチに情報収集しておいた」
タコの入ったチーダーを噛みちぎりながら、スィンが答える。
「そう、俺も不安になって方々当たったが無理だった。で、どうする？　アレックス」
「え、突然振るの？」
「アレックス。あんたが目的を持って始めた旅だ。俺達は随行はするし助言もするが、物事は決定しない。あんたが決めるんだ」
「選択肢としては何があるんだ」
「一つ目は案内なしでビレーダーに向かう。二つ目は行き先を変える。三つ目は金で案内してくれる奴を雇うってところか」
「げぇ、ゴレアスステップに案内なしは自殺だぜ。それは避けようぜ」
スィンが肩をすくめてあからさまに顔をしかめた。
「私が上空から先を見るっていう手もあるけど」
「あそこは荒野なだけあって、日中は凄く暑い。今の季節でもな。昼は休み夜に行動する方が賢明なんだ。幾らクルラでも夜暗くて、そんな先まで見通せないだろ」
「う……そだね」
「行き先を変えると言っても、これが一番良いと思って選んだ道だろ？　これを変えるとなると」
「遠回りになるか、今すぐにウィード領内に侵入するかだ」
「それは避けたい。僕達は既に遠回りしているんだ。今からは最短距離で向かわないと」
「なら案内役を雇うということで良いんだな」
「それしかないだろう。幾らになるんだ？」

「ただでさえ危険なゴレアスステップ。行き先が戦場のビレーダーともなると半端な額じゃない。これくらいはいるだろう」
スネイプは手のひらを広げてアレックスに突き出す。
「五万か、良いだろう」
スィンがニヤニヤしながらスネイプの近くに寄ってきて耳打ちする。
「今の、五千のつもりだったんだろ？」
「当然」
「それじゃぁ残りの四万五千は……」
「当然」
「くっくっくっおぬしも悪よのう」
「当然……お前もな」
スネイプは指二本をスィンに差し出す。スィンはそれを握った。
「交渉成立」
「笑いがとまらねえ」
「で、誰を雇うんだ？」
「まぁ、それはこれからなんだが……」
その時、ガラス瓶や陶器の皿などが割れたとおぼしき大きな音が店内に響き渡った。

第二十四話　七人目

「何だ？　今の音は」
「気にするなよ。こういう店では風物詩みたいな物だ」
慌てるアレックスをたしなめてスィンは食事を再開する。

「何だと！　もう一度言ってみろ！」
丸坊主の大男がビール瓶片手に怒声を上げる。
「何度でも言って上げるよ。このタマナシ！　ビレーダーの町に行けないだ？　戦争が怖くて商隊がよく務まるね。戦争だからこそ物資を届けるんだという気概はないのかい？　このタマナシのイタチ野郎！」
その目の前に堂々立って言い返すのは、大男の身長の半分ほどしかないのでは、と思うほどの小柄の女。フード付きのクロークに身を包み顔を隠しているが、褐色の顔からは笑みが浮かんでいるのがわずかに見える。
「タマナシだけじゃなくてイタチ野郎だと！　もう許さねえ！　おめえら、この女を取り囲め！」

「何やら、喧嘩みたいだな。ん？　あの男、この辺りでも有名な荒くれの商隊『荒野のサソリ団』の一員じゃないか。そんな男を相手するったぁ、やるね、あの女」
「スネイプ、何をのん気にしているんだ？　助けないのか？」
アレックスは諍いの現場とスネイプを交互に見て尋ねる。
「助ける？　何故だ？　あの女に正義があるなんて誰が決めた？」
「それは……」
助けを求めるように今度はスィンを見る。
「へへ、ちらっと見えたが良い形の唇していたぜ。むしゃぶりつきたくなるようなぷるぷるのな。褐色の肌もこの辺り特有の日焼けだ

が健康そうで眩しいくらいだぜ。綺麗は正義だぜ！　スネイプ」
「スィン……下品なところは死なないと治らないのかしら」
「死ななければ治らないものはもう一つ持ってそうだがな」
「某も同意」
「それには僕も同意しよう」
「へへ、綺麗は正義、正義は勝つ、勝たなければいけないんだ。と言うわけで俺はあの女に助勢するぜ！」
　スィンが起き上がって現場へ向かおうとした瞬間だった。
「な、消えた？」
「いや、正確には飛び上がった」
　スネイプが冷静に分析すると果たして、女の姿は男達の包囲をあっさりと飛び越えて、アレックス達の台の上に音もなく着地した。
「ゴメンあそばせ。殿方……少々諍いから逃げて参りましたの。そこの御仁は私に助勢してくれると聞こえたもので」
「へへ、良い女を助けるのは良い男の務めだと、かの賢人ローゥエルトも申しておりましてね」
「ローゥエルトは我らが王家より分家した一族の英雄。絶対にそんなことは言わない！」
「いや、似たようなことは言っているが……スィンが言うと違うように聞こえるのは何故だろう」
　スネイプがあごに手を当てて考え込んでいると、荒くれ者達の声が聞こえてきた。
「いたぞ、いつの間にあんな所まで逃げたんだ！」
「アレックス。ここで暴れるのはこれから先の旅のことを考えると得策じゃない。この場はスィンに押しつけ……いや、任せて逃げる方が良い」
「そうだな。お嬢さん、こちらへどうぞ」
　アレックスが女の手を取り、その場から離れるのを皮切りに、スネイプ、クルラ、そしてヘルマンもそれに続いた。
「お客さん！　お勘定！」

「その男が……払う」
ヘルマンが一度振り返り、スィンを指さして去っていった。
「ひゃっはー！　今朝は八つ当たりができないままだったから鬱憤がたまってたんだ！　あんたらには悪いが解消させて貰うぜ！」

第二十五話　契約

「宿を予約しているからそこへ逃げよう」
クルラを除く四人は表通りを避けて裏路地を駆け抜けていた。
「三人ほど追っかけてきているよ」
屋根の上に登ったクルラが辺りを見回して、下の四人に告げた。
「ち、言い出しっぺが全員面倒見ろよ」
「今頃のされているんじゃないか？　僕はそう思うな」
「性格はあんな風だが、実力はある。ああいう連中に後れを取る奴じゃないんだな……。残念だが。仕方がない。クルラ！　頼む」
「え～、何でスィンのケツ拭かなきゃいけないのよ……。ったく」
クルラは翼を広げると追っ手の三人の前に降り立った。
「おーにさん。お探しの物は何ですか？」
「おい、あれ……あの女を匿った連中の一人じゃないか？」
「間違いねえ。空の民なんざ、そうそういねえからな」
クルラは困った表情で頬を少し掻いた。
「まったく目立つことはするもんじゃないよね―。スィン。いつかシメる」
「さぁ、お嬢さん。覚悟してあの女をどこにやったのか白状して貰おうか」
三人の男がにじり寄ってくると同時、翼を広げる。
「待て逃げるんじゃねえ！」
三人が同時に飛びかかるが、三人とも空を掴んだ。月光を背に赤い翼が広がる。
「おーにさん、こちら♪　追っかけておいで」
クルラは宿とは反対方向に向かって飛び去っていった。

「二人とも心配する必要は無いさ。あいつらはああいうことに慣れ

ている」
　宿に到着すると、スネイプは酔いが回ってすっかり伸びているアレックスに水を差しだした。
「この坊やはともかく、二人とも平気そうね」
「狙撃手は酔ったら務まらないのさ」
「某は静かに飲むことを好む。ああいう場では飲まない」
「そう……。ひとまず礼を言うわね。あの連中ときたらビレーダーの町へ行かないなんて言い出すんですもの。つい口が後先考えずにね」
「へぇ、ビレーダーの町へ？　僕達と一緒だね」
　冷たい水を飲んで落ち着いたアレックスが身を起こして女に問いかける。
「まぁ、案内役が居ないからどうしたものかと途方に暮れているところだけどね」
「あら、それはちょうど良ろしいわね。私はゴレアスステップの事はよく知っているけど、護衛が居ないとね……。ほら女の一人旅は何かと物騒でしょ？」
「なるほど、君が案内してくれるのか？　代わりに僕達が君の護衛をすればいいと。良いんじゃないか？　スネイプ、どう思う？」
「チッ、二万五千が……。いや、問題ないだろう。本当に案内できるくらいに詳しいのならな」
「今何か言いかけなかったか？」
「気のせいさ」
「それは心配しなくても良ろしくてよ。物騒になる前は結構行き来していましたもの」
「それじゃぁ決まりだね。よろしく頼むよ……ええと」
「マーナーですわ。一つよろしくお願いいたしますわ」

第二十六話　ゴレアスステップ

季節は秋、山の上では紅葉も見受けられると言うにもかかわらず、夏に戻ったような直射日光は荒野を旅する者に容赦はしない。

まだら模様のようにわずかに生えた草と木々以外は砂と岩がむき出しの乾いた大地に吹き荒れる風は旅人の喉を焼き尽くそうとする。

「クレイス国内に、こんな土地があったなんて。スネイプがマントが必要だと言った訳が分かったよ」

アレックスは濃い青色の皮製マントに身を包み、直射日光と砂混じりの風から身を守る。

新たな協力者マーナーを迎えた一行はベーラングの町を出て程なくして見えてきたゴレアスステップの入り口とも言うべき集落で日が落ちるのを待っていた。

「最初、すぐに向かおう、と言い張っていたことは間違いだったよ」

旅人に休憩所として供される建物は土と藁でできており、中に入ると意外と涼しいがそれでも時折吹き込んでくる熱風がアレックス達の肌を苛む。

「まぁ、分かればいいってことよ。こんな暑い中歩くのは勘弁だぜ」

ベーラングの町で大立ち回りしたはずのスィンは、そんなことが無かったかのように無傷の笑顔を見せながら水牛の牛乳を飲んでいた。

「賊もこの道を通っていったんだろうか？」

アレックスは出入り口から見える黄土色の地平線を見つめながら呟く。

「それはないな」

縦屋の一番奥に陣取って背もたれているスネイプがすぐさま否定した。

「バスポラス平原は主戦場だからな。それを避けるようにクレイス城から北街道を通ってベーラングの町へ。そこからすぐさまバック

ボーン山脈を越えてウィード領内に入っただろう」
「それじゃぁ、この追跡は」
「後を追うんじゃなく、ウィードの首都ガーゼルで印璽を奪い返す旅さ。どんな行程を辿ろうと、最終的に印璽の行き着く場所は王将軍アウグスティーンの手に渡る」
「賊から奪い返すより難しいんじゃないのか？」
「賊を見つけ出すことが難しい。聞けばウィードの忍びだったのだろう？　だとすると姿形を変えながらガーゼルに向かっているはずだ。見つけ出せる自信があるのか？」
「確かに……覆面で顔を隠していたから姿を変えられたら分からない」
「そう、普通の旅人に紛れ込んでいるだろう。案外近くにいるかもしれないぜ」
　口の端をつり上げ笑みを浮かべてすぐさま肩をすくめた。
「太陽があの山の頂上にかかり始めたら出発しましょう」
　マーナーが二人の会話に割り込んできて、西の方にあるヒュージ山を指さした。
「そうだな、ヒュージ山まで落ちれば影になって少しは涼しいだろう。それまで後数時間か。夜の移動に供えて少し眠っておこう。アレックス。それで良いな？」
「うん。任せる。ゴレアスステップのことを知らない僕が口出せるような状況じゃない」
「ほう、随分と素直になったもんだな。この熱風はどうやらアレックスサマの意地を吹き飛ばしてくれたらしいな」
　スィンはニヤニヤしながら奥にある藁の敷かれた部屋へと消えていった。

第二十七話　寒中行軍

「寒い」
アレックスはただ一言、マントの下で震えながら呟いた。
「日中はあんなに暑かったのに……」
「それがこの荒野の気候さ。日中暑く夜寒い。寒いと言っても雪が降るわけでも無し、歩いていりゃすぐに暖まる」
歩き始めてすぐは西日が肌に突き刺すようだったが、日が落ちた瞬間に違う世界に紛れ込んだかのような錯覚を覚えるほどだった。
太陽に変わって夜空を支配する半月は決して旅人に暖を与えない。むしろ奪い取るかのようにさえざえと青白く輝いていた。
「先ずはあの巨岩が目印ですわ。夜明けまでにあそこへたどり着けば日中の暑さを避けられますわ」
「夜明けまでに、ってあの巨岩まで歩いて半日かかるのか？」
「そうですわ。アレックス様」
「俺は歩いて半日もかかることよりも、それだけ離れている岩が見えていることに驚きだな。どんだけ大きいんだよ」
スィンは頭を掻きながら顔をしかめた。
「あの岩は『ブライタン島のへそ』と呼ばれ、ゴレアスステップのちょうど中心に位置していますわ。登ってみるとなかなかの景観ですから観光にも良いのですけどね」
「さすがにそんな時間はない。下から見上げるだけで満足しよう」
「お急ぎになる気持ちは分かりますが、焦りは禁物ですわ。己の体力を知らねばここで命を落とすことになりますわ」
「命を……落とす」
「自然をなめてはいけないってことだな。人間なんてちっぽけなものだって教えだ」
息を呑んだアレックスの背中を叩いてスィンは豪快に笑った。
「そうそう、命を落とすと言えば、この辺りは皆様が知らないよう

な生き物がたくさんいて、その中には毒を持っているような危険なものもいますわ」
「え……？　でも夜だからみんな寝ているよな」
「この荒野で人間が暑さを避けて夜に動こうとしているのに他の生き物は昼に動いていると思い込むなんて傲慢だと思いませんこと？」
マーナーが言い終える頃、辺りにガサガサという音が聞こえてきた。
「い、今のは？」
「きっとゴレアスサソリですわ。巨大な牛でさえ五分で仕留める猛毒を持っているだけで可愛い物ですわ」
「それはきっと可愛くないと思うな、僕」
「基本的にこちらが攻撃しなければ、毒を差してくることはありませんわ。私達は彼等にとってエサになり得ませんから」
「じゃぁ、私達がエサにするのは」
上空をふわふわと浮いたまま、五人の後をついていたクルラが問いかけてくる。
「やめておいた方が良いですわ。美味しくありませんから」
「ちぇー。美味しいのは居ないの？　美味しいのは」
「そうですわね。ゴレアスサンドワームは焼くと予想外に食べられましたわ。また食べたい、と思うほどではありませんでしたがサソリよりは遙かにマシでしたわ」
「ゴレアスサンドワーム……」
クルラは何か思い立ったかのように何度も呟いた。

第二十八話　調達

「何とか夜が明けて暑くなる前にたどり着きましたわね」
一番の問題はアレックスの体力だった。何度も休憩を繰り返しながらの行程はかなりの時間を食ってしまったのだ。
「はぁはぁ、こんなに歩き通したのは初めてだよ」
「山野を狩りして回った自信ある体力はどこへ行ったんだ？」
「そんなものは何も役に立たないことが分かったよ。それにしてもスィン達は平気そうだな」
「歩兵をなめるな、この二倍の速度で行軍するぜ」
「信じられない体力だ……それより朝食にしようよ。お腹がペコペコだよ」
「今クルラが調達しに行っている。もう戻ってくるから我慢しな」
スネイプがたき火を起こしながら答えた。

時間は少し遡る。
「スネイプ、ちょっと先に行って荷物をあの岩場に置いてくる」
「どうした？」
「そのあと食材を調達するから、岩場についたら火をおこしていて」
「了解。気をつけろよ」
「平気」

クルラはこの時間を待っていた。生き物と達の活動が継続しているが、日の光りが辺りを照らし始める夜と朝の境目わずかな時間。急がなければ生き物達が眠りについてしまう。
「ゴレアスサンドワーム……いけない、よだれが。ベーラングの町で食料は確保しているけど、現地調達できるならそちらの方が良いものね。決してサンドワームが食べたい訳じゃないのよ、うん」
誰も聞いていない言い訳をしながら、上空を飛び回る。既に色々

な生き物が砂の下や岩陰に隠れていく姿が見えるが標的は見つからない。かすかに苛立ちが募る。
「この際、あのサソリでも良いんじゃないかしら……ん？」
諦めかけた頃、通り過ぎた後に何かが砂から飛び出したように見えた。
「……！」
すぐさま身を翻したが、飛び出した物が右足をかすめていった。
「熱っ！」
ジュウジュウと音を立てて靴に穴が空き皮膚がヒリヒリする。
「居たわね。ゴレアスサンドワーム！　覚悟しなさい！　私の朝食と消えなさい！」
飛び出した物、それはゴレアスサンドワームの吐き出した酸の塊。見下ろせば砂から姿を現し、尾部の孔から第二射を発射すべく黄色い液体を溜め込んでいるところだった。
「第二射を躱して一気に仕留める！」
腰に差した短剣を抜いて身構える。翼は左右どちらにでも躱せるようにゆっくりと羽ばたく。
「べ！」
鈍い音を立てて酸が吐き出される。
「来る瞬間が分かっていれば躱すのは訳ないのよ！」
酸の弾道を見定めてあっさりと躱して急降下、手にした短剣を突き出す。
「覚悟！」
短剣は深々とワームの身体の中心に突き刺さった。途端に吹き出す黄色い血飛沫に先ほどの焼き付く刺激を思い出してその場から離れた。
ワームは刺された痛みからその場をのたうち回り始めたがすぐに止み、クルラの方に顔を向けた。
「な、何よ、大人しく死になさい！」
たじろいで後ずさりした瞬間、ワームの尾部が横殴りするように

迫ってきた。
「しまった！」
ワームの身体がクルラの身体に巻き付き締め上げる。飛んで脱出しようにも翼ごと巻き付けられてままならない状態だった。

第二十九話　収獲

「遅いな……。どこまで行っているんだ？」
「なぁ、食事はまだか？」
「少し様子を見に行った方が良いんじゃないか？」
「行きたくてもどこに行ったかが分からない」

手負いでありながら、いや、手負いだからこそかワームの締め付けはかなり強力な物でクルラは少しも身動きをとることができなかった。
幸いにして首は絞められていないが、腕や胸の骨がぎしぎしと悲鳴を上げ始めている。
「こんの……朝食の……くせして……ぐぐぅ！」
右手に未だ持っている短剣をもう一度強く握りしめる。痛みに負けてこれを落とせば抵抗する術を失ってしまう。
「食べられる立場でありながら……私を食べよう何て……百年早いわよ！」
短剣をもう一度ワームの身体に突き立てた。吹き出す体液が身体に降りかかり、焼き付く刺激が皮膚だけでなく、目・口・鼻にも襲いかかるが、命には替えられない。
「あー！らー！」
突き立てた短剣を横に動かし、その身を切り裂いていく、締め付けと体液による刺激に耐えられなくなるか、ワームが絶命するか我慢比べのような争いだった。

「さすがに何かあったか」
スネイプの忍耐も限界に達しかけた瞬間だった。
「おい、何か赤い影が見えるぜ」
スィンの言葉を皮切りに皆が一斉に注目する。
「あら、ゴレアスサンドワームですわ」
ざわつきと共に皆が身構える。
「ワームが空を飛ぶ、何て知りませんでしたわ」
「みんな、お待たせー。朝食を持ってきたよー」
影が近づくとワームをぶら下げてクルラがふらふらと飛んでいる姿がはっきりと見えた。
「ふぅ、やれやれだな」

「スネイプ、マント貸してくれる？」
ワームを大地に放り投げるとすぐさま、所々服は焼けただれて肌が露出しているのを両手で覆い隠しながらクルラは上目遣いでお願いした。
「ほらよ。薬も塗っておけよ」
スネイプは無造作にマントを放り投げるとクルラは笑顔で受け取り身を包んだ。
「飯を食ったら、一度ベーラングに戻って服を調達してくるか？」
「そうするわ。いつまでもスネイプのマントを借りていられないから」
「早くご飯ー」
「おーい、このミミズ勝手に捌いて良いか？」
「子供達がうるさいからお母さんは料理にかかるわ」
笑顔で敬礼するとクルラはワームの所へと向かった。

第三十一話　食事

「うーん。何とも言えない微妙な匂いだな」
「食べたくなかったら無理しなくても良いのよ、スィン」
目の前には輪切りにされたミミズの肉がたき火の上でジュウジュウと焼かれていた。
「いや、食べるよ。戦場じゃぁ、これ以上のものを食べたこともあるもんだ」
「とにかくお腹がすいた。早く食べさせてくれよ」
「焼けているこれを食べて良いわよ」
「おー、ありがたい。頂きます！　うぐ！」
口に含んだ瞬間、じわりと微妙な苦みを伴った汁が広がってきた。
「なんだこれ！」
「まぁ、食えない味じゃないな。もう少しコショウが欲しいか。ヘルマンもコショウいるか？」
「えー？　次の町でも調達できるとは限らないのよ。もう少し大事に使ってよ」
「なぁ、ちょっと」
「どうせベーラングに一度戻るんだろ。その時に調達してくればいいじゃないか」
「まだあるから良いだろ、って考えを辞めて、って言っているのよ」
「おーい、君達はこれを最後まで食べるっていうのかい？」
「スネイプお前もコショウ居るだろ？」
「いや、俺はこれくらいで良い」
「某も充分だ」
「私もよろしいですわ」
「僕の話を聞いて欲しいな」
「うんうん、苦労して獲ってきただけあってなかなかの味だわ」
「空の民の味覚が僕らと違うのは分かったよ。だからさー」

「え、もう一切れ欲しいの？　良いわよ」
「違うよ！　逆だよ。こんなの食べられないよ！」
「さっきも言ったとおり、食べたくなかったら無理しなくても良いわよ」
「だったら、何か他の物はないのか？」
「ないわよ」
「そんなことはないだろ？　ベーラングで何か食材を買っていたじゃないか？」
「あれは調味料よ。食材は原則現地調達よ」
「君に食事係を任せたのは間違いだったよ。僕はお……むぐうむぐぅ！」
スィンが素早くアレックスの口を塞いだ。
「まぁまぁ、アレックス君。お腹がすいて気が立っているのは分かるが落ち着きたまえ。ここで叫んでは余計にお腹がすくだけだ。我慢してこれを食べるか、お腹がすいて次の食事を待つかのどちらかを選ぶと良いと思うよ」
「スィン……。口調が変わって気持ち悪いわよ」
「ふん！　こんなまずい飯を食べるくらいならお腹がすいたままの方がマシだ！　僕はもう寝るぞ！」
「そんなにまずいかなぁ……」
「まぁまぁ、彼の今までの人生で食べてきたものが俺達とは違うってことだ。気にするなよ」
「スィンに慰められると余計落ち込むわ」
そんなやりとりを巨岩の影で見つめるものが一つ。

第三十二話　捕食

乾燥した風が喉を焼き付かせる中、忍びは覆面を整えるように上げて岩場の頂上から周囲を見回した。
南の方角に舞い上がる砂埃を認めると、影を残すようにしてその姿を消した。
赤茶けた大地に濃紺色の影が一直線に尾を引いていく。

このゴレアスステップは乾燥した大地といえど、水が一滴も無いわけではない。地下よりこんこんと湧き出でる水がわずかではあってもオアシスを形成することもある。
オアシスは周囲を緑色に染め上げこの大地に住む生物たちの楽園を築き上げる。水を求める狩られるものを狩るもの。一定の距離が静寂を保つ。

そこに第三極が現れる。
身を低くする。
狙いは一頭の牛。
彼我の実力を天秤にかける。
想像する。己の速力、彼の速力。距離。
追いつかない。
一歩。草を踏みしめる。
想像する。
追いつかない。
一歩。
想像が目的を果たす。
腰を上げる。
右足に重心を移す。

濃紺の忍びが風を生み出す。と、同時。大地が震える。楽園は弱肉強食の戦場と化す。他の捕食者達も動き出す。遅れたものには死、あるいは飢えが降り注ぐ。
忍びは駈ける。腰の脇差しを抜き放つ。狙いは揺るがない。距離が縮む。あと三歩。二歩。一歩。
刃先が光を放つ。同時彼の最後の雄叫び、そして赤い花が咲き乱れ、大地がより大きな揺れを起こす。

喉を貫いた脇差しで倒れ込んだ牛の皮を切り裂くとピンク色にうごめく腸が顔を覗かせる。
忍びは覆面をずり下げて、耳元まで裂けた口を露わにする。全ての尖った牙をむき出しにしてまだ湯気の立ちこもる牛の腸に食らいついた。辺りに血とも体液ともつかぬものをまき散らしながら、ぐちゃぐちゃと咀嚼を繰り返す。
「ぐぉおおおおおおお！！」
忍びは上げる。勝者の雄叫びを。このオアシスの覇者は己であることを全てに知らしめるがごとく。

「なんだ。クルラ。ちゃんと別の肉を用意してくれたのか」
「何の話？　私はサンドワーム以外調達してないわよ」
アレックスは皮袋に包まれたものを右手で掲げた。
「じゃぁ、これは？　枕元に置いてあったんだが」
「他の誰かじゃないの？　私はアレックスにそこまでする義理はないわ」
「私に、そんな新鮮な肉を調達できるような真似はできませんわ」
「それじゃぁ、ヘルマンか？」
「おい、そこは真っ先に俺に聞くべき所だろ？」
両手を広げて力説するスィンを尻目にヘルマンは首を横に振る。
「スィンとは思えないんだけど……そうなのか？」
「まぁ、俺じゃないがな」

「聞いた僕がバカだったよ。あとはスネイプくらいしかいないけど」
「俺の弾は食料調達用じゃない。戦場用だ」
「そうか、一体誰か分からないけど、天からの贈り物だと思ってありがたく頂戴するか」
「それはいけない！　得体の知れない肉に毒が入っていたらどうするんだ！　ここは俺が毒味をしてだな……」
「あら～。スィンには私が愛情という名の毒をたっぷり込めたサンドワームの肉があるから充分でしょ？」
　クルラは恋人のようにスィンの肘を掴み腕組みをしてくる。
「そんな毒はいらねえよ。ああ！　一人で勝手に食べようとするんじゃない。　クルラ放せ！　俺にも一口！　畜生！　良い匂いがして来るじゃないか！」
「スィン、残念だったな。これは僕への贈り物だ」
　ニコニコと笑みを浮かべながら、汁がしたたり落ちる串刺しの肉を口に頬張った。

第三十三話　賭け

日は高く、西の空を赤く染めるにはまだ早かった。
岩陰に隠れ暑さをしのぎながら、ヘルマンとスィンは座って向かい合っていた。
スィンは両こぶしを握りしめて宙に浮かしている。
「なぁ、あの二人は何をやっているんだ？」
アレックスがスネイプに耳元でささやく。
「ナンゴだろ……。両手に隠した貨幣の数を当てる賭博さ」
「右、四枚」
ヘルマンが宣言すると、スィンはゆっくりと右手を開ける。
「ち、ヘルマンの奴。相変わらず読みが良いな」
スィンは悪態をつきながら手のひらの上にある四枚の金貨をヘルマンに差し出した。
「君が単純すぎるのだ」
四枚の金貨を受け取ると、今度はヘルマンが両こぶしを握りしめた。
「持ち金が九枚もあると当てにくいな。右五枚！」
傍から見ているアレックスが再びスネイプに尋ねる。
「どういう意味だ？」
「ナンゴはお互いに金貨五枚ずつ始める。取った取られたを繰り返して増減があるが、今ヘルマンは九枚、スィンは一枚だ。ヘルマンは九枚を右手と左手に何枚ずつ振り分けるか、九通りあるからスィンは当てるのが難しいのさ」
「残念だったな。スィン。右と左が逆だったら良かったのだが」
ヘルマンは両手を広げると、右手に四枚、左手に五枚隠していた。
「かー。やばいな。俺残り一枚なんだよな」
頭を抱えるスィンを見てクルラがひょっこり姿を現す。
「あら、スィンってば懐かしい遊びやっているじゃない。子どもの

頃は良くしたものだわ。小石を使ってだけどね。『窮地のスィン』の実力は落ちてないのかしら？」
「窮地のスィン？」
「そ、残り一枚になってからが強いのよね。不思議だわ」
「さぁ、ヘルマン！　右か左か当てて見せろ」
「さっき、スィンは九通りから選んだが、ヘルマンは二通りからでいいんだろ？　ヘルマンが有利なはずだが」
「左」
「残念。右だ」
スィンは右手を開いて中の金貨を見せた。
「む……」
「確かに一回しのいだが、このあと当ててヘルマンから金貨を取らないと……」
「左七枚！」
ヘルマンの眉が吊り上がる。果たしてヘルマンの左手には金貨が七枚入っていた。
「な！？　スィンが当てた」
このあと一気にたたみかけるようにスィンが百発百中かのように当て続けて、勝利を収めた。
「驚いた。何故残り一枚から逆転できるんだ？」
「まぁ、ここの実力って奴よ」
スィンは頭を指で叩いて見せた。
「そろそろお遊びは終わりかしら？　日も傾いてきましたから準備をしなければいけませんわ」
「もうそんな時間かよ。ヘルマン。続きは明日な」
「お断りしたいものだな。君のために給料を稼いでいるわけではないのだから」
「そうだな。クニのおっかさんもお腹が大きいからな」
「「「え？？？」」」

第三十三話　闇

手足が拘束されているわけじゃない。
意識はしっかりしているのに体が動かない。
知っている。疲れたときなどに……いや、そういう状態とも違う。
手足がまるで石か鉛にでもされたかのようにぴくりとも動かない。
ゆっくりと意識を指先に集中させる。
腕を動かすことが重くて無理なら、軽い指からだ。
だがその試みは徒労に終わる。　これは何か別の力が働いているとしか考えられない。その何かを確認するためにまぶたを開けようと試みる。
そのまぶたもまたニカワで接着したように動かすことが叶わなかった。
ふと身体に触れて来るものがある。
それはそよ風のように優しく撫でているのに、なかなか通りすぎてくれない。　動かない身体に何をされるのかわからない感触。恐れがあるはずなのに、触れる度にゾクゾクと震えが起きて更なる刺激を求めてしまう。　刺激が首筋に到達したとき、今まで押さえていたものが弾け飛んだ。　刺激が首筋に到達したとき、今まで押さえていたものが弾け飛んだ。　細いものが頬を微かに撫でる。
本能が知っていると告げてくる。これは牝の匂いだ。何も恐れる必要は無い。どうせ動けないなら身を委ねよ。害はない。むしろ理性が知らない世界への扉を開くものだと。
ああ、そうか。知らない世界への扉なら開いてみよう、そう覚悟を決めた瞬間唇が濡れはじめた。
息苦しさと柔らかい感触。苦痛と快楽の間に悶えていると再び本

能が告げる。緊張する必要は無い。身構えるから口で息をしようとしてしまうのだ。
ああ、そうか。息は鼻でするものだ。苦痛が徐々に和らいでくるとそのまま口のなかに何かが侵入してきた。
何かは独立した生き物のように口の中をはいずりまわり、うごめき、絡み付いてきた。　身動きできないまま誰かに弄ばれる屈辱は、今まで自分の思い通りに生きてきた王子という殻を粉々に砕き、一人の男、否、一匹の牡にまでおとしめた。
そのことを自覚し、哀しみがあふれているというのに、何故――？
足りない、この程度では足りないからもっと僕を弄んでほしいと乞い願っているのか？

本能はあくまで優しく語りかける。それが本当の自分だからと。何も哀しむ必要は無い。ここでは王子も平民も無い。ただ牡と牝の営みがあるだけだと。
さぁ更なる快楽が待っている。　言葉が終えると同時、意識と全身の力が下半身の一部に集中しはじめた。
急な膨張に自分の身体がこれほど変化したことに驚きを隠せずにいると、それは暖かく濡れたものに包み込まれていく。
瞬間、背筋が痺れ、腰のあたりが自分から離れ、独立しようと反乱を始めた。　自分のものであって自分のものじゃなくなっていくような感覚。
自分の知らない器官が動きを活発化させる。
その動きを抑止できる術を持たない、知らない。
ただその動きのままに身を委ね、寄り道することなく頂点へ真っすぐ登りつめていく。

その頂点の先に何があるのか。見たいような見てはいけない禁断の領域のような好奇心と不安に苛まされながらも歩みは止まらない。
もう目の前に見えはじめたソレはとても甘い言葉を囁きながら手招きする。

その手を握りしめるように身体が前のめりになる、と同時多くの体力と精力が前進から流れ出るように奪われていった。

胸が、肩が大きく上下する。もう何も考えられない、見えない、聞こえない。
闇へと堕ちていく中微かに脳に響いた。

「これであなたは……。」

第三十四話　出口

「ゴレアスステップの出口ビレーダーの町か……随分と寂しいところだな」
　物々しい警備兵が行き交う城壁の中に入ると、目抜き通りには砂埃が舞うだけで歩く人々もおらず、また建ち並ぶ店で扉を開けているところは一つもない。
「戦争が始まる前は活気がありましたわ。それこそ毎日がお祭りかのように人々で溢れ、良い商品を誰かに先を越されてしまうかといけないから早く手に入れなければと熱気に満ち、あちらこちらで競りのかけ声が飛び交っていたものですわ。こうなってしまったのは戦争で物流が途絶えたから……」
　一匹の野良犬が尻尾を振りながら一行に駆け寄ってきた。砂にまみれ、あばらが浮き出た痩せ犬は野生の闘争本能を失い、ただ強き者に媚び従う者の姿だった。
「お腹がすいているんだな。ほれ、食えよ」
　スィンが一片の肉片を差し出すと野良犬は目に光りを宿しそれに食らいついた。
「今、こっそりとサンドワームの肉を処分したでしょ」
「ボクハ　ヤセタアワレナイヌヲ　ミスゴスコトガ　デキナカッタ　ドウブツアイゴシャ　デスヨ」
「じゃぁ、スィンの食事は全てあの犬にあげることにするわ」
「ごめんなさい。僕の分もください」
「ベーラングの街と違って、手に入るものはなさそうだ。休息を取ったらすぐさま出発だな。マーナーとはここでお別れか」
　スネイプの言葉に皆がマーナーに注目する。
「あら、つれないこと。ここまで共に歩んできたというのに用が済んだらサヨナラですか？」
「そうだ。これから先、無関係なものを巻き込むわけにはいかない。

あんただって、この街に用があったのだろ？」
「この街に用があったのではなく、ゴレアスステップを越えたかっただけですわ。ここから先は、そうですわね……。気ままな旅を続けるのも良いですけどあなた方についていくのも楽しそうですわね」
「楽しいとかで済まされる問題じゃな……」
「良いじゃないか。スネイプ。ここから先の地理にも詳しそうだから道案内を続けて貰ったら」
「アレックス。そんなことで良いのか？　一般人を巻き込むなど」
「良い。僕が決めたことだ。それとも僕の言うことが聞けないのか？」
今までアレックスが見せたことのない気迫にスネイプだけでなく他の者達も気圧されて何も言えなくなった。
「分かった。アレックスがそういうならそれに従おう。だが、何かあっても自己責任だ？　良いな？」
「ええ、かまいませんわ。元々気ままな一人旅、途中で何があっても覚悟の上で続けていたものですわ」
「それじゃぁ、この辺りに詳しいという君に聞こう。どういう道筋でいったらいいか」
「あら、目的地も教えてもらえずには決められませんわ」
辺りの空気が凍り付く。スィンもヘルマンも動きはしないがいつでも動ける体勢を取る。
「それは……」
スネイプが言いよどんでいると、アレックスが口を挟んだ。
「ウィードの首都ガーゼルだ」
「アレックス！」
「良い。仲間と決めたなら隠し事は無しだ」
「あらあら、戦争相手国の本拠地にたった数名で挑むなんて……これは同行を願ったのは失敗だったかしら」
「そうだと思うぜ……。だがここで降りるというなら、向かう先は他でもない……」

スネイプが銃口を向ける。ヘルマンもスィンもクルラも得物を抜き放つ。
「あらあら、怖いこと……。心配しなくても、これくらいで怖じ気づくことはありませんわ。おそらく国のために危険を冒して旅をされているのでしょう？　それくらい察しがついていましたわ。それならば私にも国のためにできることをする。それだけですわ」
「ほう、立派な心がけだ。それで俺の質問には？」
「これから先はウィードとクレイスの小競り合いが続いているところが多いですわ。それを避けるには……先ずシュバインバルト、そしてグラーリー峡谷でバックボーン山脈を越えてウィード領内へ。あとは首都ガーゼルへは一本道ですわ」
「くっくっくっ。面白いねぇ。森の民、土の民の縄張りを通っていくとは」
「そうでしょう？　とてもステキな旅になると思いますわ」

第三十四話　出口（後書き）

来週は5分大祭で練習作品を投稿するためお休みいたします

幕間

「草の民は忠実な下僕が欲しくなった。今までは犬を飼っていたが、より働くように手を加えた、即ちだな……。獣の民と呼ばれる連中だ」

スネイプの質問に答えることができたスィンは得意げに腕組みをする。対照的にクルラは歯がみしながらスィンを睨み付けた。

「う～。スィンは絶対に分からないと思ったのに～！」

「へへん。聞いてないようでもきちんと聞いているのさ。残念だったな。クルラ」

スィンとクルラのやりとりを横目にスネイプはシスターメリーに問いかける。

「闇の民について歴史の授業では習いましたが、社会の授業では全く登場せず、俺達の生活に関わっているようには思えません。どういうことなのですか？　実在するのでしょうか？」

「中々鋭いわね。では、復習から。草の民と土の民の関わり合いはなんだったかしら？」

スィンが目の色を変えて2人の間に割ってはいる。

「はいはい！　俺知ってる知ってる！　交易をやっているんだろ？　土の民は手先が器用だから武器や道具、宝石にいたるまで作っている。草の民はそれらを農作物等と交換しているんだ」

「今日のスィンはどうしたことか冴えているわね。きっと雪が降るわ」

「シスター。雪ならもう降っている」

クルラが窓の外を眺めながら呟いた。

「道理で冷えこむと思ったわ」

シスターは暖炉に追加の薪をくべながら、次の問を投げかける。

「それでは草の民と森の民の関わり合いは？」

「あれ？　なんだったっけな？」

今度はスィンも頭を抱え込んだ。クルラもお手上げとばかりに窓の外をジッと眺めている。
「原則無い。森の民はシュバインバルトの奥深くに籠もって出てこないから我々との関わりは無い。たまに気まぐれな者が人里にやってきて町に居着いたりするらしいが……」
「あ～。シーラ兄さんみたいな奴か。月に一度の買い出しでバルサザルの町に出た時に見かけるよな」
「そうね。彼はあの町で教師をやっているの。彼を見たら分かるように森の民は尖った耳と華奢な体つきをしているからすぐに分かるわ。それじゃぁ、空の民とは？」
「はいはーい！　私のことだもん。すぐ分かるわ。森の民と同じく、関わりはほとんど無い。それどころか住むところ追いやったのよね。森の民には手出ししないくせに。スィンみたいに卑怯な奴が多いのよ」
「おい、誰が卑怯だ。誰が。俺はクルラに卑怯なことはしてないぜ。草の民だ、空の民だ何て区別無く。俺達は仲が良いよな」
「それで、先生闇の民とは？」
「おい、無視するなよ」
「闇の民は文字通り闇に隠れて生きているの。光に当たることなく、ひっそりと人目に触れることなく……そう、今もこの雪山のどこかにもいるのかもしれないわ……」
「もう滅んだんじゃねーの？」
「森の民の中で闇に染まれば闇の民となる。だとしたら、森の民がいる限り、闇の民は滅びることはない」
「そんな影に隠れて何をしているんだろうな？」

第三十五話　別行動

「悪いが俺はシュバインバルトの中には入れない。こんな鉛玉と火薬なんざ持って入ったら森の民に殺されてしまう。なに心配する必要もない。俺は傭兵だ。クレイスとウィードの小競り合いを避けてグラーリー峡谷にたどり着くことくらいお茶の子さいさいだ」
「悪いけど、私もスネイプについていくから」
シュバインバルトの森の手前にある交差路で2人は脇に逸れる道を歩み出す。
「2人に抜けられるのは手痛いんだが……」
しかめっ面をしているアレックスの肩をスィンが叩く。
「森の民と争い事をしている訳じゃない。ただ通過させて貰うだけなら戦いにはならない。それとも俺やヘルマンが信頼できないのか？」
「そ、そういう意味じゃないが……」
「シュバインバルトの道を提案しておきながら申し訳ないけど……。私もスネイプさん達と共にして良いかしら」
マーナーの言葉に注目が集まる。
「ほう……それは何故？」
「なんとなく……では納得しませんよね。まぁ、私にもスネイプさんと同じく森の民に嫌われる理由がある……今はここまでしか言えませんわ」
「嫌われると分かっていてシュバインバルトの道のりを提案したのか？」
「正直……採用されるとは思っても見ませんでしたわ。よほど、あなた方は戦場を避けたいのでしょうね」
「たった6人だからな……。まぁ、ちょうど良い3人ずつの班分けだ。グラーリー峡谷との境目にブラン村というところがある。そこで合流しよう」

それぞれの道を歩き始める６人を見まもる目が木陰にあった。その目はアレックス率いるシュバインバルトへの道へと歩み始めた。

第三十六話　再登場

シュバインバルトの南端を沿うようにして東西に延びる南街道。比較的なだらかな平野部を通るため、今回の戦いでは真っ先にウィード軍が進軍し角突砦が陥落した。
「ウィード軍は角突砦に籠もって出てこない。メムルーク将軍が睨みを効かしているからだ。戦況が動く前にさっさと突破してブラン村に行くのが吉だ。そう、させてくれるならな……」
「あら？　妨害がありますの？」
「ない、と思えるほど楽観的じゃぁ傭兵はやっていけないぜ」
戦争で往来がすっかりと言って良いほど無くなった道を歩みながらもスネイプは警戒を怠らない。途中に散在する村々は巻き添えを恐れてもぬけの殻となっていた。
「こういう所こそ危ないのよね～野伏がいたり、伏兵がいたり」
クルラの言葉を待っていたかのようにスネイプはぴたりと歩みを止めた。それに合わせるようにクルラがスネイプの前で翼を広げる。
「正直な話、ここまでついてくるとは思わなかったぜ」
先を歩いていたマーナーが振り返るとクルラが短刀を抜き放って構えていた。
「何の……話ですか？」
「もちろん、こちらの話さ。出てこいよ。隠れているんだろ？」
スネイプの言葉と同時、白刃が空を裂く。マーナーが背後から振り下ろされる一閃を横に躱すと同時にクルラが前に出て、受け止めた。
「言わんこっちゃ無い。こんな風に巻き込まれるぜ？」
スネイプはマーナーに一言残して廃屋の扉に逃げ込んだ。
「あらあら、お仲間さんを一人殺すつもりだったけど。意外とすばしっこかったわね」
「どうせ奇襲するなら、私かスネイプを狙えば良かったんじゃない

の？　リラ＝ビセートさん？」

クルラの短刀とリラのレイピアは未だ交差したままお互い次の一手を狙っていた。

第三十七話　激突

剣戟の響きが廃村に満ちわたる。
照りつける太陽が、お互いの刃を照らす。
「将を射んとせばまず馬を射よ……スネイプを殺したかったら、あなたをはじめとする周りを削っていく方が良いと思ってね」
「それは正解かもしれないけど、一般人に手を出すのは傭兵としてどうかしら？」
次の一撃のあとリラが素早く後ろの下がって、間合いを開けた。
「一般人？　あなた方が一般人と行動するなんて考えられないね。それに必要とあらば味方も殺していた死に神スネイプも同じ考えなのか？」
「はて？　私はスネイプじゃないからね。ただ言われたままに殺しはしてきたけど」
「その中に一般人もいたんだろう？」
「気にしたこともないわ」
「お互い、手が汚れているな」
「心も、ね！」
おしゃべりを断ち切るようにクルラが前に出て短刀を振り下ろす。その一撃もリラには届かずレイピアの前に遮られる。
「スィンと戦った時と同じだな。クルラと戦わせておいて、私に隙が出た瞬間を狙撃する。代わり映えのない戦い方なら私には通用しないぞ」
「心配ご無用、あの人はそんな戦い方しないわ」
再び剣戟の音が幾度も辺りに響き渡る。
「何故そういいきれる？」
「スィンの時と違って、今度は私が勝つもの」
リラの眉がぴくりと吊り上がり、再び大きく間合いを開けた。
「なん……だと？」

「だってそうでしょう？　私の方があなたより強いもの」
「ふん、スネイプが狙撃する隙を見せないように本気を出していないのだが、それを実力だと思っているのだとしたら見込み違いだぞ。それとも私に本気を出させて隙を作ろうというのなら、安い挑発だな」
「どう思おうとあなたの勝手。でもあなたが本気を出しても勝てない相手が目の前にいると言うことだけが確実なのよ」
「ほざけ、空の民。いざとなれば空に逃げようという肚のくせして」
「それがお望み？」
言うやいなや、クルラは翼を広げて地面から離れる。
「む？　本当に逃げる気か？」
「逃げ、ではないわね。でも私の土俵に先ずは上がっておいで」
リラがレイピアで突きにかかるが間に合わずクルラは上空高く舞い上がる。
「これを受け止めると良いわ」
そのまま上空で放物線を描く。赤い軌跡。
「それも挑発だな！　重力まで重ねた一撃などレイピアで受け止められようか！」
上空より落下、否、滑空してくるクルラの接近を、横によけて躱す。これでクルラは地面に激突する。そう、思っていた。
「鋭角反転！」
ところがクルラは地面に激突するすれすれで、方向転換し再び空へと舞い上がる。
「バケモノか？　奴は……上空の敵を討つ術はない。受け止められるような一撃ではない……とするならば」
クルラの先ほどの言葉が脳裏によぎる。
「なるほど、確かにあんたは強い。スネイプの腰巾着ではなかったようだ」
クルラの動きを見ながら、村の外へと向かう道へと駆け出す。
「逃げますの？」

ふいにマーナーに声をかけられて、仰天したが今はそれどころではなかった。

「ああ、クルラ対策を施してから再選を挑むよ。命拾いしたな一般人さん」

第三十八話　森

アレックスはバックボーン山脈の森を歩いている時とはどことなく足取りを軽く感じていた。あの時はうっそうとして日が届かなかったが、ここではあちらこちらに木漏れ日が射し込み、健気に咲く花を照らす。

道、という物が整備されているわけではない。ただ獣や森の民が通ることがあって踏み固められた草だけがこの先が、何か、に繋がっていることを告げている。

「森の民の女は美人が多いんだよな、こう、すらっとした面長に透き通るような白い肌、流れるように濡れる金色の髪からひょっこり出ている尖った耳がセクシーでよ」

スィンの言葉で台無しである。

「だからといって某達を歓迎してくれるとは思えない」

ヘルマンの言葉に戦闘を歩いていたアレックスが急に振り返る。

「え、そうなの？」

「そーだよ、スネイプの野郎が何で逃げたか。あいつは鉄と火薬のニオイをぷんぷんさせているからな。森の民には真っ先に嫌われる。ああ、そうそうあと血のニオイもな」

スィンが両手を頭の後ろで組み、吐き捨てるようにして言った。

「鉄と血のニオイなら某達も同じ」

「え？　彼等は鉄が嫌いなの？」

「もともと好戦的な連中じゃないからな。戦争中の俺達なんか通してくれるどころか、むしろ追い出したいくらいだろ」

「危険じゃないか！　何でそんなところを通るんだよ」

「最終的に決めたのは……」

スィンが人差し指でアレックスの鼻を押さえつけた。

「何かあった時は責任取ってもらおうか」

「何か、って何があるんだよ」

「そう、例えば……こうだよ！」
スィンは鼻先を押さえていた指を離して襟首をつかみ、そのまま地面に引きずり倒した。
「いて！　何するんだ！」
と、叫ぶアレックスの髪に何かが当たって通り過ぎていく感触があった。
直後、乾いた甲高い音がした方を見やると、一本の樹に矢が刺さっているのが見えた。
「ち、警告無しったぁ、どっちが好戦的なんだかわかんねぇぜ」
スィンが睨み付けた先には少女とも思えるほどの小柄な影が弓をつがえていた。

第三十九話　森の娘

森の娘は樹の枝に仁王立ちとなり、吹き抜ける風に長い金色の髪をたなびかせながら、幼さが残りながらも意志を込めた切れ長の瞳が三人を見下ろしていた。
「警告無しとは酷いな。今のが警告だ。出て行け、草の民よ。愚かで野蛮なる一族よ」
「へん、よく言うよ。俺が引き倒さなかったら心臓までグサリの狙いだったぜ」
「一人が死ねば、他の二人は去る。そうだろう？」
娘はこともなげに告げると、つがえていた矢を引き絞っていく。
「警告に従わないならば、三人とも死ぬ、ただそれだけだ！」
風切り音一つ。
狙いはスィンの胸元。
「は！」
さっと右足を後ろに下げると同時、とっさに出した左手で飛んできた矢を捕らえた。
「森の民は平和主義で争いを好まないってシスターから習ったのは嘘だったのかね」
「そのシスターとやらは正しい。我々は平和主義で争いを好まない。故に戦争を好んで行っている草の民はこの森を侵すことを望まぬ」
「なんだ、それは！　言っていることとやっていることが一致して無いじゃないか！」
思わず握り拳に力が入ってしまうほどにアレックスは叫ばずにはいられなかった。
「横から口を挟むな下郎。これは争いではない、狩りだ。そうだろう？　下等な猿共」
「な！　下郎？　狩り？　猿？」
「アレックスは黙ってな。たいそうご立派な言葉を吐くようなガキ

ンチョにはお灸を据えるのが一番って昔から相場は決まっているのさ」
「見た目が草の民の子供に見えるからと、そう思わぬ方が良い。私は、お主達の４倍は生きている」
「へ、だからなんだって言うんだ。何年生きようが、ガキはガキのままってことを教えてやるぜ！」
スィンはかぎ爪を両手に装着して、横にあった樹を伝って娘と同じ高さまで駆け上った。
「ふん、動きまで猿とは驚きだ」
「その猿にお仕置きされるのはどこのどなたかな？」
離れた木の枝の上で二人のにらみ合いが始まった。

第四十話　森の空中戦

スィンは不利を承知していた。
樹の枝から枝へと飛び渡りながら戦うことは地の利は森の娘にあり。
また一度飛んでしまえば動きを変えることができない。これは弓を持つ側からすれば格好の的である。
それでも……
「同じ土俵で勝たなければ、勝ったとは言えないんだよ！」
スィンはまっすぐに娘の元へと飛びかかる。
「愚かな。何か策があるのかと思えば……」
当然のように何も迷い無く娘は矢を放つ。
「策なんざねえよ！　クレイス歩兵には前進あるのみ！」
目の前に飛んでくる矢を左のかぎ爪ではじき飛ばし、右のかぎ爪で娘に斬りかかった。
「先ほどのことといい、目だけは良いようだな」
振り下ろされた刃をこともなげに横に躱すと、そのままスィンは地面に向かって落下していった。
「草の民の言う土俵とやらは外に出たら負けであったよな？」
娘の口の端が吊り上がる、と同時足下が揺らいだ。
「な？！」
「そうさ、俺が狙ったのはテメエじゃねえ！　枝だ！」
落下していったはずのスィンは下の枝に捕まり、その反動で落ちてくる娘に向かって飛び上がっていた。
「お仕置きだ！」
スィンは娘とのすれ違いざまにかぎ爪を数度にわたって斬りつけた。
「……！　あれ？　痛くない……はずした、のか？」
「へ、俺は狙った獲物ははずさねえよ」

「え？　きゃあぁぁぁ！」
娘が下の枝にたどり着いた時、その服がはらりと外れて、肌が露わになり、その場にしゃがみ込んでしまった。
「へん、乳も尻も足りてねぇ女をいたぶる趣味はねえから、これくらいで勘弁してやるよ」
「嘘だ……いたぶる趣味はなくても辱める趣味はあるんだ。だからスィンにとってはこれくらい、じゃないんだ。これが狙いなんだ。そうなんだろ！　ヘルマン！」
ヘルマンは頬をかきながら明後日の方向を見た。

第四十一話　通行権

「うぐぅ～～～～。この辱めは必ず返してやるからな！」
すっかり裸になってしまった娘は顔を真っ赤にして、３人から離れていった。
「森の民と争う気は無い。彼女を傷つけずに去っていって貰うためにはこうするしかなかった。そう、これは仕方が無いことだったのだ」
スィンは爽やかな笑みで、去っていく彼女の細い肩や小ぶりの尻を目に焼け付けながら呟いた。
「いや、絶対に他の手段があったはずだ。話し合うとか、違う道を通るとか」
「森の民は長生きだから、ああ見えて頑固なのさ。話し合いで解決できるような連中じゃねえよ。違う道も時間かかるからな。さぁ行こうぜ」
「嘘だ、言い訳だ、おためごかしだ」
「だいたいあのようなことをして、これから無事で通れるのか」
「さてな？　あんなことしてようがしてなかろうが、森の民は俺達を通さないようにするために色々と仕掛けてくるだろうよ」
スィンは森の茂みをかき分けながら先導する。
「あ、やべ」
「どうした？　スィン」
「すっかり囲まれちゃった、てへ♪」
「てへ、じゃないだろ！　どうするんだよ。あ～横からも後ろからも……さっきの娘さんも……」

第四十二話　包囲

「まぁ、落ちつけよ。少し雰囲気がおかしいぜ」
スィンが慌てふためくアレックスをなだめながら、包囲する森の民をにらみつけた。
「わりぃが、おれたちはあんたらに危害を加えるつもりはねえ。ただ、通してくれればそれでいいのさ」
「そんな説得で、どうにかなるのか？」
「こういうのは馬鹿正直な方が吉なんだよ」
「何が危害は加えないだよ！　ボクの服をびりびりにしたくせに！」
木の上から先ほどの娘が叫んだ。
「だけど怪我はさせてないだろ？　お嬢さん。そのあと暴行を加える気もなかった。とても紳士的な対応をさせていただいたと自負しているがね」
「何言ってんだよ！　お兄ちゃんやっつけてよ！　……いて！」
隣にいた長身の青年が、娘の頭に拳骨をひとつ加えると、木の下に飛び降りて三人の前に立ちふさがった。
「妹は頑固でね。君たちから辱めを受けたと言い張るのだが、おそらく『通してほしい』『通さない』の言い合いの結果だと推察するがいかがかね？」
「ま、まぁ、そんなところです」
「言い合いというより一方的……何するんだよ、ヘルマン」
「話をややこしくするな、スィン」
「妹の性格からすると、何が起こったかは想像がつく。気にしなくていい」
「それじゃぁ、僕たちを通してくれますか？」
「それとこれとは話が別だ」
「え？」
「他人の家の庭を通るのに家主にあいさつもないとは無礼千万だと

は思わないかね。連れて行け！」
「なーんで、おれたち、背中に槍を突き付けられているのかなぁ？」

あいさつ（前書き）

一日遅れました

申し訳ありません

あいさつ

「後ろ手に縄で縛らて、ひざまずかされるあいさつってのは初めてだよ」
「うるさい、お前たちが何を考えているのかを長老様が確認するまではおとなしくしてもらう」
森の民たちがつきつけるやりに押されるがままに歩み進むと、ひときわ巨大な樹の前にたどりついた。
周りにある木々を従えるがごとく広がる枝葉は古木という印象を与えないみずみずしさに輝き、三人のみならず、その場にいる森の民すべてを包み込んでいた。
見上げる三人は気圧されるどころか、その中に飲み込まれてしまうことを望んだ。
「よく来たな、草の民よ」
「頭が高いぞ」
槍でつつかれ、声の主を確認する間もなく頭を下げざるを得なかった。
「畜生、スネイプはこうなることが分かって逃げたに違いねえ。今度会ったら覚えていろよ」
「静かにしろよ」
「その方らは、クレイスの民か？」
「そ、その通りです」
「目的地はウィードか」
「その通りです」
「印璽だな？」
「……っ！」
「なぜ、分かった？　と言いたげだな。あの印璽はもとより、我々のもの。我々がその方らの初代王に与えたにすぎぬ」
「伝承では獅子に与えられたと」

「そういうことになっておるのか。草の民が争いを繰り返すから、一つにまとめるために我々が知恵と力を与えた証だというものを……。その方らの初代王はよほど森の民から力を与えてもらったと言いたくはなかったのであろう」
「も、申し訳ございませぬ」
「その方らを責めても詮無きこと。なぜ分かったかであったな。われらのものであるがゆえに、今どこにあるかは手に取るように分かるものよ」
「そ、それで、今どこに！」
「頭が高いと言っておろう！」
「くっ……！」
頭を上げようとしたアレックスは押さえつけられて、興奮を体で表現できない。
「ブラン村だ」
「森の出口、グラーリー峡谷の手前」
「意外と離されてなかったんだな」
「す、すぐに行かないと！」
「焦るな、草の民よ。動きは止まっておる。急ぐ気持ちは分かるが、伝統でな。我々の歓待を受けぬものを通すことはできぬよ」
「は？」
「あいさつの次は、歓待……何されることやら」

第四十四話　歓待

「歓待、ねぇ。まぁ、話は簡単でいいな。だが納得いかないのは、何で俺じゃなくて、ヘルマンなんだよ」
「スィン、お前は熱くなって話をややこしくしそうだからだ。ヘルマン、頼んだぞ」
「御意」
　ヘルマンは腰に差していたサーベルを抜き放ち、血や脂で汚れていないか再度確認していた。
「相手はあの娘さんの兄君か……。あの包囲の中で指導者的立場だった」
「セーバー様は長老のお孫であり、いずれは森の主を継ぐお方。その方らが勝つことは万に一つもあるまい」
　一本の樹の根もとに三人を連れてきた男が、口を挟んできた。
「セーバーと言うのか。しかも後継者。油断するなよ。ヘルマン」
「へ、おれだったら瞬殺だぜ」
「アレックス殿の期待に応えて見せましょう」
「時間だ。代表者は来い」
「頼むぞ」
　ヘルマンはアレックスの前で敬礼をすると、案内役の男のあとについて行った。
「お前たちはこちらに来るのだ。仲間が切り刻まれるところを特等席で見せてやる」

　喚声が森を震わせた。
　円形状の広場の周囲に生えている木々の上は森の民で埋め尽くされていた。
「どこが平和の民だ。血の気に飢えている好戦的な奴らじゃないか」
「娯楽が少ないのかな。ヘルマン頼むよ」

「諸君！　お待たせした！　無謀にも、我々の歓待を受ける挑戦者が現れた！　その名はヘルマン＝シュタイナー！」
喚声がひときわ大きくなる。大地は震え、木々は枝どころか幹さえも揺れ動工としていた。
「この挑戦者を叩き伏せるはわれらが英雄！」
司会者の言葉と同時、一瞬にして静けさが訪れた。
「歴戦の勇者にして導く者！　セーバー＝アーデルンカッツ！」
ヘルマンが登場した時以上の喚声で思わずアレックスもスィンも耳をふさいだ。
「本当に勝てるのか？」
「王子サマよ、あんたが信じなきゃ、誰が信じるんだ？　何見てなよ。クレイス王立兵学校を設立したことをあんたが誇りに思う日は今日さ」

第四十五話孤独な戦い（前書き）

四十六話と前後しました

ご迷惑をおかけしました

第四十五話孤独な戦い

「敵地に一人ってのはどんな気分だ？」
「そなたには一生分かるまい」
「ああ、分かりたくもない。森の民は常に森にあり。その方ら草の民のように同族で争ったりせぬでな」
「同族で争わぬなら、他民族とは争うか……」
「その方らが、わが領域を侵したのだ。覚悟せよ」
ヘルマンが鞘におさめたサーベルに手をかける。セーバーは槍を両手で持ち、身構えた。
「初め！」
司会者の言葉とともに二人は……動きださなかった。
「なぜ、動かぬ」
セーバーがヘルマンに問う。その額には脂汗が浮かんでいた。
「何知れたこと。そなたが動くのを待っているだけだ」
「……くっ！」

あたりにはセーバーの名前が繰り返し叫ばれるが、戦場の二人は一切動こうとしなかった。
「あのセーバーという男、動けばヘルマンに斬られる。潜り抜けた修羅場が違うわな」
「確かにクレイスはウィードと戦争をしたが、それ以前は平和だったはずだが」
「くは！　王子サマがこの程度の知識とはな。本気でクレイスが平和だと思っていたのか？　山賊、盗賊、海賊に、国境付近では異民族の侵入、俺達は常に戦場を東西南北行き来していたのさ。だからこそ国民は平和を謳歌できていた。王族にはそれを知っておいてもらいたかったねぇ」
「そ、そうだったのか……」

「あのセーバーとやらは、歴戦の勇者とか言われていたが、せいぜい、この森の中の動物相手に狩りをしていた程度だろ？　すでににらみ合いで押されているじゃねえか。敵に囲まれていようが、本当に倒すべき相手は見えているさ」
「そういえばホーン峡谷でも多数を相手にしていたな」
「そういうこと。こんな勝負、やる前から結果は見えているんだよ。そういう意味で、森の民は平和主義だったな。くっくっ」

「どうして動かぬ？！」
「相手に問うくらいなら、自分から動いてはいかがか？　そなたが動くまで、このまま何日でも耐えて見せよう」
「何日も、だと？」
「さて、そなたが相手してきた生き物たちは何日も巣から出ずにいられたかな？」
「く、うぉおおお！」
セーバーがヘルマンの言葉を打ち消すように叫びながら槍を繰り出した。

鈍い音が広場に広がるが、それは観客の歓声に打ち消されていた。セーバーの首から吹き出るものはあたりの地を赤色に染めていた。

第四十六話　想念殺

「は！　今のは？」
セーバーは自分の首がつながっていることを確認した。槍も動かしていない。何もかもがヘルマンと対戦を始めたときと変わらなかった。
「見えたか……某が秘剣想念殺」
「秘剣想念殺……だと？」

はらはらしているアレックスとは裏腹にスィンはにやにやしていた。
「ほう、あのセーバーって奴もそれなりの熟練者ではあるわけか」
「どういうことだ？」
「その道の熟練者って奴は、次どのようなことが起きるか先を見越しながら行動する。ヘルマンはそれを逆手にとって、何をやっても最後は死ぬ、という結果を想像させるだけの剣気を出し続ける。これを想念殺という。相手が熟練者であればある程、効果が高い。見ろよ、あの男の額に浮かぶ汗を」
「まるで蛇に睨まれた蛙のようだ」
「そう、蛙も動けば蛇に食われることを想像できるから動けずにいる。セーバーがまさにその状態よ。槍で突こうが、横薙ぎに払おうが結果は同じ。最終的には相手が降参するって寸法さ」
「そうか、じゃぁ、ヘルマンが勝つんだな」
「あったりまえよ」

二人の会話が聞こえてか聞こえずか観客席は歓声からどよめきへと変わり始めていた。ヘルマンの腕がいいならセーバーと激しい打ち合いになり、興奮は最高潮に達する。そして最終的にはセーバーが打ち破り勝利に沸く。そう期待していたのにそれは裏切られた。

一向に動きがない。最初は観客をじらしているのかと思ったが、セーバーの表情を見る限りそれは違う、ということが理解でき始めていた。

「どうした、動くといい。動くたびにそなたの首は胴から離れるが……」

「は！」

既に三度目の生還だった。これ以上は想像の出来事とはいえ、本当に精神の方が死ぬ、そうとしか思えなくなっていた。

第四十七話　罠

「セーバーの兄貴が負けるわけにはいかねえ」
「そうだ、我々森の民が、下等な猿どもに負けたとあっては歴史に傷がつく」
「いいな、ぬかりなくやれよ」
「よし」
ヘルマンとセーバーがにらみ合う闘技場の端で、森の民二人が陰でうごめいていた。
「あまり強い毒だと疑いがかかる。いいな、腕をしびらせる程度でいいぞ」
「もとよりそのつもり」
一人が口に筒を当てると一息吹いた。

「う！」
ヘルマンは小さく呻いた。それは誰にも気づかれぬ程度の反応。吹き矢を放った森の民もはずしたかと思ったほどである。
だが、それは確実にヘルマンの右手の機能を奪っていく。
「く……今度こそは！」
セーバーの想像は7度目になっていた。そこで初めて、激しい打ち合いが始まった。死なない。何が原因かは分からない、勝利すると決まったわけではない。だが、その通りに動けば少なくともすぐさま死ぬわけではない。その自信がセーバーを行動へと掻き立てた。

「何？！」
「どうしたスィン」
「どうしてセーバーは動ける？　そしてどうしてヘルマンの太刀筋にキレがない？　想念殺で十分に精神力を奪い取っているはずなのに」

「想念殺が打ち破られたのか？」
「あんな奴に打ち破られるはずがねえ。だが、現に目の前では……」
互角、としか思えぬ剣と槍の舞が繰り広げられていた。
腕がしびれたとはいえ左手は健在。思うように動かぬ右手を補佐するように鞘を手に槍の一撃をさばいていた。
「鞘で防ぐとは、余裕か？　それとも愚弄か？」
一層激しい打ち合い。剣と槍を交差させたまま二人の動きが止まった。
「そなたは……何も知らぬのだな？」
「何の話だ？」
「知らぬのか……。ならば殺すのは勘弁しよう」
「ふ、そんな口を叩く余裕があるとは。今現に互角に打ち合っているというものを」
ヘルマンの右手は力が入らないのだから、競り合いの結果は見えていた。
二人の想像は、このままヘルマンが後ろに押され、槍がその喉を貫く、という結果を見せていた。

第四十八話　決着

「想念はそれを上回る想念によって上書きされる。それを証明してしんぜよう」
交差した剣と槍の競り合いでヘルマンは徐々に後ろへ押されながらもセーバーの目をじっと見据えた。
「う……！」
睨み合いの気迫はそのまま勝負の結果に結び付く。

「何が原因でヘルマンの動きが鈍ったかは分からないが、結果に変わりはなかったな」
スィンは野次の飛び交う闘技場の観客席を後にして、ヘルマンのもとに向かった。
「お、おい、スィン。勝手に一人で行くなよ。こんなところで一人にしないでよ」
あわてて後を追おうとしたアレックスはわきから出てきた影にぶつかった。
「あ！　ご、ごめ……わわ！　大丈夫かい！？」
ぶつかった相手は非常に軽くアレックスの体格でも吹き飛ばしそうになって、あわててその体を抱きとめて支えた。
「あ、い、いや、あの、その」
「あれ？　先ほどの娘さん？」
顔を真っ赤にしている衝突相手をのぞき見ると、はたして森で襲ってきた娘だった。もう、倒れることはないと見るや、あわてて手を離して身構えた。
「あ、いや、その……あ、ありがとう」
「へ？　いや、ど、どうも」
お互い視線を合わそうとせずにうつむいたまま言葉を紡いだ。
「君の仲間、強いんだな。セーバー兄ぃに勝てるなんて思わなかっ

た」
「そ、そうなんだ。彼は僕よりずっと強いんだ」
「そうなのか？　でも君の方が彼よりずっと偉いんだろ？」
「それはそうなんだけど」
「おい、アレックス何やって……うぉ！」
スィンがヘルマンを連れて戻ってくるや娘の姿に驚愕した。
「あ！　変態男！」
「いや、あの時は、ああするしか」
「うるさいうるさい！」
「ヘルマン！　アレックス！　逃げようぜ」
くるりと身をひるがえすと、そこ立っていた森の民の中でもひときわ大きな男にぶつかった。
「勝利した皆さま方をもてなすようにとの長老からのお言葉です。ご案内いたします」
「あいててて、どうせぶつかるなら、可愛い女の子だとよかった」
鼻を抑えながらスィンはつぶやいた。

第四十九話　逢瀬

『もてなし』は言葉通りだった。
森の中で採れるあらゆる木の実や果実を中心に饗応された。
「いや～新鮮なものを食べたのは久しぶりだったな」
スィンはつまようじで歯の間を掃除しながら腹を叩いた。
「旅が長いと、保存食ばかりとなるからな」
「僕はあの果実酒が忘れられないよ。どうにも気分がよくて」
「アレックスは飲みすぎだ。少し夜風に当たってきな」
「二人はどうするんだい」
「何、部屋に戻って続きさ」
そう言ってスィンは頂戴してきた酒瓶の数々をアレックスに見せた。
「スィン達こそ飲みすぎるなよ」

森の木々の間から月の光がわずかにさしていた。吹き抜ける風が火照る頬をなでて心地よい。
「木が高すぎて星が見えないのが残念だなぁ」
踏みしめる落ち葉のサクサクという音が小気味良く流れる。
「あれ？」
耳を澄ますと、足音が二つある。一つは当然自分。もう一つは誰？
「誰かいるの？」
闇に向かって問いかける。
「いや、後をつけたつもりはないんだ」
「娘さん……」
「ミーニャって名前があるんだ。そっちで呼んでよ」
「じゃぁ、ミーニャ。何でこんなところに？」
「この先に見晴らしがいいところがあるんだ。行ってみないか？」
アレックスの返事を聞くこともなくさっさと先へと歩み始めた。

「え、ちょっと待ってよ」

「まま、ヘルマン一杯」
「うむ」
「二人でゆっくり話すのも久しぶりだな」
「ああ、兵学校以来か？」
「だな……奥さんは元気か」
「ああ、もうそろそろ生まれる頃だ」
「おう、そうだったな。名前は決めているのか？」
「まだだ、男か女かもわからないからな」
「そういう時は両方用意しておくものだぜ」
「まるで経験者みたいな言い方するな」
「へへ、こちとら戦場で死ぬのが本望だから一生独り身よ」
「戦場な……剣は持たないのか？」
「もつぜ、戦場で必要ならな」
「惜しいな。兵学校卒業記念剣術大会では……」
「おっと、おれは後悔していないからな。優勝記念のサーベルはれっきとお前のものだぜ。今日も持ち主にふさわしい戦いだった」
「ふん。お前ならもっといい戦いをしただろうよ」
「それは買いかぶりすぎだ」
二人の夜は更けていく。

第五十話　路傍の花

ミーニャはアレックスより一段高い枝に腰かけていた。
木々の枝から漏れる月明かりを背にして金色の髪が光に濡れる。
すらりと伸びた白く細い腕と足がゆらゆらと揺れているように見えた。

「こんなに細い腕で弓を引き、僕たちを狙っていたのか……」

ミーニャに聞こえないようにアレックスはつぶやいた。昼の出来事を思い出してもぞっとするが、今はその気配はない。あのときはあのとき、今は今。ミーニャの横顔はそう告げていた。

先ほどまで鳴いていた鳥たちの声がふと消えた。代わりにミーニャの鼻歌がアレックスの耳に届いてくる。まるで、鳥たちがミーニャに舞台を譲り渡したかのように。

アレックスは色々と聞きたいことがあった。初めて出会った森の民たちに対する好奇心が次々と湧きあがってくる。

なぜ昼間襲いかかってきたのか。
なぜ見世物のような戦いをしなければなかったのか？
なぜ何事もなかったかのようにもてなしを始めたのか？

なにより、ミーニャが今自分たちを、いや、自分をどう思っているのか……。

気になって仕方がなく、歌が終わるのをもどかしく感じた。

「気持ちよく歌っている横で、そんなにざわついた気持ちにならないでよ。そんなに私の歌は楽しくないか？」
「い、いや、そうじゃないんだ……。君と、話したいんだ」
「私はここに来ると、必ず今の歌を歌うんだ。この場を、この森を鎮める清めの歌を」
　言葉を聞いてアレックスはうつむいた。こんなところに連れてきておきながら話もせずにいる勝手に歌い始めたミーニャを恨めしく思っていた。しかし、彼女にとって歌うことが大事な儀式であることを感じ取ったからだ。
　もう一度見上げるとミーニャはアレックスを見下ろしていた。だが、逆光で表情まで見えない。

「あんた、聞きたいことがいろいろあるんだろ？　答えられることなら答えるよ」
「待って。僕も横に行く」

第五十一話　恋

二人の会話を妨げるものはなかった。
その間にあるものは空気のみ、それは言葉を届けるためにだけ存在していた。

「左、二枚だな」
「ふ……。剣でも賭博でもスィンには勝てそうにはないな」
「へへ、今日は絶好調！　ぼろ勝ちさせてもらったぜ。修行が足りないぜ。ヘルマン」

失礼。この二人はこの二人で昔から間に妨げるものはなかった。

「半分嫉妬だよ」
「嫉妬？」

予想外の単語にアレックスは首を傾げるしかなかった。
「森の民は掟が厳しくてね。この森から出られないのさ。その点草の民は交易などであちこちを行き来している。私はそれがうらやましかったんだ。そりゃぁね、この森は好きだよ。だけど、それだけ。草の民が住む街も、草原も、川……は、森の中を流れているからわかるけど、海、だなんて本の中だけでしか知らない。昼間も行ったけど、あんたたちの四倍は生きているっていうにもかかわらず、だよ」
ミーニャの流れるような言葉にアレックスはすぐさま反応できなかった。
「出ていくことはできないのかい？」
「勝手に飛び出して行った連中はいるけど、それっきり音信不通さ。もうこの森には戻ってこられないからね。戻ってこられないってい

うのは言葉通り。長であるじっちゃんがそいつを追放処分にする。じっちゃんの力で森に入れなくするからね。だから相当な覚悟がなければ、出られないのさ。あーあ、やっぱり私にもこの森に対する未練があるのかな。外界に憧れを抱いていても憧れで終わるのさ。外界で一人で生きていく術なんて知らないし」

膝を抱えて顔をうずめるミーニャが非常に小さく見えた。

「誰かと一緒なら、覚悟も決められるのかい？」

「さぁね。実際にその状況になってみないとわからないけど、今私と一緒に外へ出てくれるやつなんていないからね」

アレックスは強い衝動に駆られた。あまりにも華奢なミーニャは両腕で抱え上げられそうに感じる。いや実際に出来るだろう。そのまま、森の外まで走り抜ける自信はどうだろうか。さすがにそれほど体力はないだろうか。その不安を払しょくしてでも、やらなきゃいけない気がした。

「それじゃぁ……。僕……と一緒に行かないか？」

「はぁ？」

顔をあげて、アレックスの顔をまっすぐ見詰めた。

「ぷっ！　冗談かと思ったら真剣な顔しているから余計におかしいや」

「わ、笑うなよ！　僕がまじめに言っているのに」

「わはは！　何、もしかしてお姉さんに惚れちゃったとかかなぁ？　ぼうや♪」

「そ、そんなんじゃないよ！　た、ただ僕たちと一緒だったら……いや、弓の腕がいいから僕たちの目的に協力してくれたらとか」

「さっきは『僕』だったのに『僕たち』に変えて無理しちゃって、顔が赤くなっているぞ」

「そ、そんなことないよ、月が赤いから僕の顔も赤く見えているだけで」

「それにね」

急にミーニャがどこか冷たく鋭い瞳でアレックスを射抜いた。そ

の表情の変化にアレックスは動きが止まった。
「あんたから闇の匂いがする。私の気のせいかもしれないけど」
言うだけ言うと、ぴょんと地面まで飛び降りた。
「明日には出るんだろ？　遅くまで付きあわせて悪いね。もう少しあんたが大人になったら、今の話考えてもいいよ」
「闇の……匂い？　バカな。僕からそんな匂いがするわけない。僕は王子だぞ。名誉正しき、獅子と槍の国クレイスの」
ミーニャはすでに視界から消え、鳴き始めた鳥たちは答えてくれなかった。

第五十二話　別離

アレックスにとって来て欲しくない朝が来てしまった。
「ミーニャ……」
森を離れるにあたって、森の民たちが見送ってくれたがそこにミーニャの姿は見当たらなかった。
「森を出ていくものたちを見るのが、つらいのだろうか？」
頭では納得はする。だけど気持ちがどこかざわついていた。あんな別れ方をしたから、もう一度会いたい気持ちが募っていた。
「こいつはやばいな。俺には分かる。王子サマは今恋の真っ最中。初めて色街に連れて行った後の新人兵士と同じ顔してらあ」
「まだ、そんな事をしていたのか。新人兵士は給料が少ないから色街に連れていくのはさせないように注意したはずだが」
「む、昔の話だぜ。あいつら、はじめて女を知って、はまり込むんだ。てこたぁ、王子サマも森の民の誰かとねんごろにでもなったか？　大方、最初に出会った娘か。俺が裸にひんむいてやったからその体が目に焼き付いて忘れられずに、ついつい襲いかかり……。いや、王子サマにそんな根性はねえか。てこたあ、相手に誘われて……」
あごを撫でながら、にやにやとアレックスに聞こえるように色々というが、耳に入っていないのか、反応はなかった。
「ふむ、我々の目的は印璽を取り戻すこと。主たるアレックス殿が腑抜けては少々困るな」
「少々どころじゃねえな。判断を誤らなければいいがね」
「っと、合流予定のブラン村はまだ先なはずだが、どうしてあんたらがここにいるのかね」
森を出てすぐのところに、見知った影が三つあった。
「何、大方森の民の歓待を受けて遅くなっているのだろうと思って

ね。迎えに来たところさ。別件がもう一つあるがね」
「スネイプ、久しぶりだな。そっちも無事だったか」
「無事だからこうして合流できたわけだ。先に急ぐ前に一つ。ウィード軍がこっちに迫ってきている。シュバインバルトを襲う気らしい。おそらく街道の小競り合いが膠着しているから、抜け道として利用する気なんだろう。急いで避けたほうがいい」
スネイプの言葉を聞き、アレックスは目をかっと見開いた。
「シュバインバルトを、襲う？　森の民はどうなる？」
「まぁ、森の民の連中も弓の名手がそろっているからな、只やられるということもないだろうが、なんせウィード軍も数が多い。おそらくは……」
「おそらくは……、どうなるというのだ？」
「壊滅だろ。王子サマ。やっぱり、森の娘に惚れたな？　そのあわてよう」
答えないスネイプに代わってスィンが答えた。
「ほ、惚れてなんかいない！　だけど、どうしてウィード軍は無関係の森の民を！」
「無関係じゃないってのがウィード軍の理屈だろうな」
「森の民が……」
先ほどの叫びとは一転、気力が抜け落ちたようにふらふらと歩み始めた。
「スィン。何があった」
スネイプがスィンに耳打ちして尋ねる。
「ミーニャという森の娘と夜、話していた。それ以上のことはわからねえが」
「美人か？」
「美人だ」
「ちっ……。どう出ると思う？」
「やばい、と思っている」
「スィンの勘は鋭すぎて困る」

「早めにわかれば対処できるだろ」
「さて、どうかね。勝利の死神は今困っているってことだけは確実だね」

第五十三話　決断

「アレックスよ。情ってのがあるのが人間だ。それはわかる。だが、あんたは人の上に立っている人間だ。時として情を捨てなければならない。今がその時だ。あんたの目的はなんだ？　印璽を取り戻すことじゃないのか？　だとしたら、この場はどうすべきか分かるだろ？」

スネイプの言葉はあまりにも単純すぎて明快すぎて頭に素直に入ってきてしまう。だからこそ困る。

心が納得しないのだ。

己の心に問いかけた。

なぜ、納得しないのか。

答えは明確だった。

皆の指摘通り、自分がミーニャに惚れているということだった。

種族が違うとか、たった一日しか話していないとか、そんなことをすべて抜きにして、彼女の力になりたいという思いが別の感情を生み出したのだった。

ウィードに滅ぼされたクレイスの村を思い出す。王子として最終的な勝利のために、一部を犠牲にすることは理解できても、殺された村の娘がミーニャと重なる。

アレックスは強く首を横に振った。

「スィン！　ヘルマン！　スネイプ！　クルラ！」
「あ、なんかますますやばいなこの感じ……」
「無駄口をたたくな、スィン！　僕たちは！　これより……」
四人はあきらめ顔でうつむいた。ただ一人マーナーだけが無表情で横にたたずみながら。
「シュバインバルトを守るため、ウィード軍と戦う！」
「そいつは無理だ。ウィード軍は騎兵１００騎程度で向ってきてる。勝ち目はない」
「勝利の死神の力を持ってしてもか？」
「くくく、勝利の死神？　そんなもの幻想さ。なぜ勝利の死神と呼ばれているか。負けるとわかっている戦には参加しないからさ」
「それでも、今回は参加してもらう。そして勝利に導け！」
「無茶言うぜ。ヘルマンは従うのか？」
スィンがヘルマンに耳打ちで尋ねた。
「軍人は上官の命令は絶対だ」
「給料をもらっている身はつれえなぁ」
「ねぇ、スネイプ。さすがにこれは従う必要はないんじゃない？」
「まぁね。だが、こちらも金をもらっているんでね。ところでクルラ。一つ頼みがある」
「えぇ～、内容が想像できるだけにいやだなぁ」

第五十四話　嵐の前

「言っている間に敵兵が迫っている！　くそっ！　少しは準備する時間があれば良いものを！　アレックスは茂みから槍で騎兵を転倒させろ！　スィンはアレックスの護衛を！　ヘルマンは転倒した騎兵のとどめを！　クルラは遊撃！　俺は樹の上から狙撃する」

スネイプはクルラに抱えられて樹の上へと消えていくと今度はスィンがアレックスの手を引いた。

「王子サマよ、やると決めたからにはスネイプの指示で戦ってもらうぜ！　ほらこっちだ！」

「あ、ああ……みんな、頼むぞ」

スィンとアレックスが森の中へ消えていき、ただ一人ヘルマンを街道に残った。

「む……？　マーナーが……消えた？　戦闘に巻き込まれないよう逃げたか？」

準備ができたかどうかのころに波が襲いかかってきた。

「道は狭い！　先頭よりも中間の騎兵を叩け！」

スィンの小さくも力のこもった言葉に、アレックスはうなずくが槍を持つ手が震えていた。

「こ、これが初めての……戦いなんだ……」

「ここにきてビビってんじゃねえ！　惚れた女を守るんじゃないのか？」

「そ、それはそうなんだけど……」

いくら力を込めて槍を握りしめても震えが収まる気配はなかった。

「これだからお坊ちゃんは……」

スィンは顔に手を当ててうなだれるしかなかった。

「やることは分かっているな」

「分かりすぎてたまに自分が嫌になるわ」
樹の上でクルラはナイフをくるくるとまわしながらつぶやいた。
「でも、あの子壊れるわよ」
「恋が一時的なら、壊れるのも一時的さ」
スネイプの細い眼がクルラをキッと睨みつけた。
「お～怖い。私、いつかあなたに殺されてしまうのね」
「戦に勝つためなら、な。だが、お前は生きている方が勝てる確率が高い」
「おかげで、どれだけ腕を磨かされたと思っているのよ。あなたにそう思われるようになるまで大変だったんだからね」
「知ってるさ」
「感謝しなさいよ。こんな良い女は他にいないんだからね」
「分かったから早く行けよ」
「はいはい」
他の誰にも気づかれないように、クルラはひそかに戦場を離脱した。

第五十五話　嵐

森の民が住まう神聖であるべきシュバインバルトは一瞬にして汚された。

「うあああああ！」

己の震えを打ち消さんばかりに叫び声をあげて、アレックスは槍を横に薙ぎ払った。彼の役割はそれで終わり、あとは殺されないように逃げ回るだけである。

この一撃で転倒した騎兵たちにとどめをさすのはヘルマンの仕事だからだ。

もちろん、逃げるアレックスを追いかける騎兵がいる。

その前に立ちはだかるは、臨時とはいえ、親衛隊の一員たるスィン。

「ひゃっは！　鉤爪のスィン様のおでましだ！　死にたいやつから前に出な！」

「何が鉤爪のスィン様だ！　たかだか一人！　踏みつぶしてくれるわ！」

仲間を転倒されて頭に血が上っている騎兵の集団がスィンに襲いかかる。その先頭がいきなり頭を破裂させて倒れ、後ろの数騎が巻き込まれた。

「おぅい！　スネイプ！　邪魔すんじゃねえ！」

スィンは出鼻をくじかれて、叫ぶが返事はなかった。

「くっそ、狙撃手は沈黙が仕事とはいえ、癪に障るぜ。この恨み、てめえらで晴らさせてもらうぜ！」

スィンの鉤爪が森の中を縦横無尽に駆け抜けるだけで、スネイプの戦果を超えた。

「はぁはぁ！　一撃加えたら逃げろと言われたけど、本当にスィンは一人で大丈夫なのか？」

「心配すべきは貴様自身ではないのか？」
「誰だ？」
心臓が飛び出すかと思うほどにアレックスは驚き、声の主を見た。
胸に五本で剣でWの印がある鎧に身を包み騎乗したまま茂みに乗り込んできた男の姿があった。
「う、う、うぃ……！」
「なんだ、まだ子供ではないか。こんなガキに我が騎兵がやられるとは。まぁ、戦場をうろついていた貴様が不運だったということだ」
男は馬上槍を振り上げると、アレックスの心臓に狙いを定めた。
「あ、あう、あう」
アレックスにできることは己の手にある槍を左右に力なく振り回すだけだが、そんな単調な動きは正規兵である男にとって何ら障害にならなかった。
障害になるとすれば……。
いつの間にか男の背後に現れた濃紺色の覆面の男だった。
「デンカニ……テヲダスナ」
背後から男の口を塞ぎ、喉を一瞬にして？き切った。
「あ、ああ……」
新たな存在に恐怖心が抜けないアレックスの前に、覆面の男は跪いて頭を下げた。
「デンカヲ……オマモリモウス」

一方スネイプよりアレックスを守るように言いつけられていたスィンはと言うと
「ひゃっはー！　見たかヘルマン！　スネイプ！　これで３４人だぜ！」
戦いに夢中になってアレックスを忘れていた。
「どうやら、某の存在は気付かれなかったらしいな」
己の役割を手早く終えたヘルマンはあたりに無傷の騎兵がいない

ことを確認した。すべてスィンの方へ向かっていったのだ。
「む……？　あやしい影。あれは逃げたアレックス殿を先回りする方角。まずい！」
サーベルを改めて力強く握りしめると、影を追うように茂みに分け入った。

第五十六話　嵐の間に

「おかしい……アレックス殿を先回りしているのかと思ったが……。だんだん戦場から離れているような……。そう、まるで某を誘い込んでいるような」

影は素早い動きにもかかわらず、時折立ち止まってヘルマンの姿を見ているようだった。

「これだけ離れたら十分だろう。何が目的なのだ？　何故戦場に姿を現す」

「あはは！　あの子が面白いからからかってみたかったのさ」

ヘルマンの前に立っているのは赤い覆面の女。右手にはシャムシールを握りしめていた。

「その姿、その得物。アレックス殿から聞いていた特徴にそっくりだが、まさか？　そしてあの子とは……」

「その通り、あの子とは王子様、そしてあたいが印璽を盗み出した張本人さ」

「ちょうどいい。ここで印璽を返してもらおう。それでこの旅は終りだ」

ヘルマンがサーベルを構えて忍びに相対する。

「そう、終わり。あなたの旅はね」

言うが早いかシャムシールの剣戟がヘルマンに襲いかかった。

「何か森のはずれが騒がしいけど何かあったのか？」

「草の民どもが争っているのではないか？」

森の民たちは聞こえてくる金属音や野蛮な叫び声に眉をひそめていた。

「草の民？　昨日の連中か？」

「私が様子を見てくるよ。大丈夫、この森を汚させはしないよ」

「危なそうだったらすぐに戻ってくるんだぞミーニャ」

「任せてよ。草の民に後れをとるようなことはないよ」
ミーニャは弓を手に取ると駆け出した。
「そっちから来てくれるなんて嬉しいわ。あなたがミーニャさん？」
集落を出てすぐのところでは空の民が出迎えた。
「そう、だけど、なぜ私の名前を？　いや、なぜ空の民がこんなところに」
「まぁ、私も来たくて来たわけじゃないんだけどね。悪いけど私たちが目的を達成するために……」
クルラは翼を広げて跳躍、ミーニャの背後に回り込んだ。
「え？　あ、胸……が」
妙に熱かった。昨日アレックスと話していた時とは異なる熱さだった。胸に手を抑えると赤い。何が起きたのか分からない。だけど何が待ち受けているかはわかる。
「こん、な、ことなら……アレッ……一緒に……ゴボ！」
ミーニャは赤い血を口から吐き出すと地面に倒れこんだ。
「やれやれ、何度やっても戦争と無関係のものを殺すのは後味悪いわ。ま、これで王子様も判断を誤ることはないでしょ」
蹄の音が聞こえてくる。音からして一騎。
「こんなところまで？　いや、スネイプやスィンが撃ちもらすとは思えないから、私への土産かしら？」
「な、何をしている？　こんなところで？」
現れたウィードの騎兵は既に森の民が一人死んでいることに驚きを隠せなかった。そしてそのわきに立つのは空の民。何が起きたのかを理解する方が難しい。
「なるほど、私は間に合わなかった。そういう筋書きで良いかしら？」
「何を言って……消えた？」
クルラは先ほどと同じように跳躍して、騎兵の背後についた。
「あなたがミーニャ殺しの犯人、ね？」

第五十七話　嵐のあと

結論から言うとシュバインバルトのはずれでの戦いはクレイスの勝利と言える。
百騎の騎兵は壊滅し、残りは撤退。こう着状態の南街道を避けてクレイス領内に一気に侵入する作戦も失敗に終わったことからすると、戦術的にも戦略的にもすべての人がそう判断するだろう。

「ヘルマン……。ウソだろ？　国じゃおっかさんが子供産んで待っているんだぜ？」
ウィード軍が撤退していった道には騎兵たちの死体が残っているのは当然にしても、その中には到底信じられないものが転がっていた。
「俺達の勝負もまだ決着がついてないんだぜ？　勝手に一人で先に行くなよ」
スィンは転がっていたヘルマンの首を抱きかかえると、胴体に無理やり重ねた。
「気合と根性でくっつけろよ！　お前ならそれくらいできるだろ！」
どれほどスィンが叫んでもヘルマンから返事はなかった。

「王子サマよ。あんたの判断がこのような結果を招いた。その現実から目をそらしたらいけないぜ」
スネイプがアレックスの肩に手を載せて耳元で囁いた。
「僕の判断が、ヘルマンを……？」
「そうだ！　お前がヘルマンを殺したんだ！　どうするんだ！　戦わなくてもいい戦をしかけて！」
スィンの叫び声が森の中にこだました。
「それから、クルラが報告したいことがあるそうだ」
「え？　クルラが？」

「一騎、森の中に侵入して、追いかけたんだけど……間に合わなくて……」
アレックスに大きな胸騒ぎした。ヘルマンの死以上に強い不安。
「間に合わなくて……どうなったんだ！」

第五十八話　月下で

月明かりの下、スィンはヘルマンの遺体を埋めた墓の前で酒を傾けていた。
「なぁ、スネイプ。俺達、どうなるんだ？」
胡坐をかいているスィンの後ろでスネイプは樹にもたれかかって答えた。
「どうなるもこうなるもない。目的のために前に進むだけだ」
「冷てえなぁ。今までの仲間も、目的のためなら捨てていくのか」
「お前は軍人だろ。仲間が死ぬたびに、どうこうして戦に勝てるのか？」
「そうだけどよ。お前は知らないだろうが、ヘルマンは兵学校の時からずっと一緒だったんだ。ウィードとの戦では配属が別だったけどよ。手紙などやり取りして、戦果を自慢しあってたんだ」
スネイプは答えずにスィンの言葉に耳を傾けていた。
「兵学校じゃ卒業時に剣術大会が行われるんだ。俺は剣だけで競う大会が嫌で棄権したんだが、ヘルマンはあっさり優勝したよ。競技だけじゃない。戦場でもウィード軍には負けやしなかった。それはお前も知っているだろ？　そんなヘルマンがあっさりと殺されるなんて考えられねえ」
「ヘルマンは剣術大会優勝者、お前は棄権者。お前がヘルマンを殺した奴を倒せば……」
「本当はヘルマンの方が強かったという証明になるってか。そうだよな。きっと奴は卑怯な手を使ったに違いねえ！　よし、ヘルマン。力を貸してくれや。これは敵討ちとかちっぽけなもんじゃねえ。俺たちクレイス王立兵学校歩兵科第五十七期主席と次席の実力を証明合戦だ！　クレイス軍の風習で戦場に死体を埋めた時はそいつの得物を墓代わりにするもんだが、ヘルマンの得物は俺が連れていく。一緒に奴を倒すんだ！」

「落ちこんでもいられない状況だってことは理解してたか……。強がりやがって……」
「何か言ったか？　スネイプ」
「いや。それより気づいていたか？　ヘルマンが遺したと思われる剣戟の痕を」
スィンは耳をひくつかせると、突然立ち上がりスネイプに詰め寄った。
「何か……ヘルマンを殺した野郎の手掛かりでもあるのか？」
「はっきりと断定はできないが、地面に残っていた傷痕は”W”の形をなしていた」
「W……だぁ？　そんなもんウィードに決まっているじゃねえか。ウィードの頭文字でもあり国旗でもあるからな」
「ウィード。そんな単純な……。ウィードと戦争中だから、殺したのはウィードだなんて当たり前のことを今わの際に遺すか？」
「わからねぇけど、そうとしか考えられないぜ？」
「まぁ、少し考えるとするか。ところで王子様の方はどうなっているかね……」
「ああ、ありゃぁ重傷だろうな」

第五十九話　激励

アレックスはブラン村の外れから闇に沈む森を眺めていた。
森の民の魂送りの儀式に、よそ者が入る術はなかった。

一目だけでも――

その願いは木葉よりも簡単に吹き飛ばされた。
むしろ災いをもたらしたもの、として危害さえ加えられかねないところを禁足で済まされた。
草むらにしゃがみ込みボーっとしている彼に背後から迫る影があった。
「苦しんでるね、少年」
アレックスは背後を見なくても声で正体がわかった。だけど、誰とも話す気がない彼は振り向きも返事もしなかった。むしろの能天気な口調に怒りさえこみあげてくる。
「初恋が実らなかったら誰でも苦しむものよ」
かすかな空気の流れとともにアレックスの身は何か温かいものに包みこまれた。
「何を分かった風に！　クルラはスネイプと孤児院で一緒だったんだろ！？　初恋が実っている奴に！　そんなこと言われたくないよ！」
「あらあら、すっかりやさぐれちゃって……」
クルラは背後から翼と腕でアレックスを抱きかかえたままシュバインバルトの森を眺めた。
ひと時の沈黙。
アレックスが求めていたものがあるような気がした。
「あなたは、だぁれ？」
突然聞こえた甘くよどみのない声。

「え？」
「あなたは、何者？」
「僕は……」
アレックスが答える前にクルラは続ける。
「あなたは、なぜここにいるの？　どうやってここまで来たの？
そして今……何をすべきなの？」
クルラは言うだけ言うと、すっと離れた。
秋の夜風が二人の間に吹き込み、触れていたぬくもりを奪い去っていく。
「僕は……」
「答えは私にではなく、自分に返しなさい」
アレックスの言葉を遮ると踵を返して飛び去って行った。
「僕はクレイスの王子……。ここまで来たのは……」
か細い声はクルラのところまで届くことはなかった。

第六十話　闇のいざない

「あんな感じでいいのかしら？」
クルラはスネイプ達のところに戻ると開口一番疑問をぶつけた。
「まぁ、あんなもんだろ」
「女のことで悩んでいる男は、女が慰めりゃ一発よ」
スィンの言葉にクルラが肩をすくめる。
「そんな単純な男、スィンだけじゃないの？」
「そんなことはない。なぁ、スネイプ」
肩に手を載せてくるスィンに顔をしかめた。
「ともかくだ。壊れたままなら壊れたままでいい。むしろ変な命令を出すことなく、俺達には行動する大義名分がついてくれたら万歳だ」
「やれやれ、スネイプにかかればアレックスは大義か」
「当然だろ？」

「僕が……。今……。すべき……。こと……」
草むらに手をついたままぶつぶつとアレックスは呟いていた。夜露が手を濡らし始めるが、気に留める余裕はなかった。
「何を悩んでいるのかしら？」
同じ女声でも、クルラと違ってやや低く、それでいて頭に直接語りかける様な声が耳に入ってきた。
「ま、マーナー……さん」
アレックスが顔を上げると月明かりで銀色の髪を濡らしたまま見下ろす女性。
だが、いつも身にまとっているフードだけでなく、身体を隠すものをひとつも持たず小麦色の肌を露わにしたまま腰をかがめた。
「あ、あう……」
しどろもどろのアレックスの手をとり、その甲にゆっくりと口付

けをする。
「あんな小娘の綺麗ごとに惑わされては駄目……」
「え……」
「結局、あなたはただ女の体を求めていただけ……。ミーニャでそれをかなえようとした。そうでしょ？」
首を横に振るが、それを無視してマーナーの体が近づいていくる。
（あ、マーナーの耳も……。長い……。マーナーも森の民……？）
「あなたは牡の本能として牝の体に欲望しているだけ。それをミーニャに求めてかなわなかったから……」
二人の口と口が触れ合う。胸の、肌の柔らかさと温かさが伝わってくる。
「だから……。代わりが欲しい。それだけ」
アレックスは必死になって首を横に振る。それを認めれば、ミーニャへの恋心を否定することになるから。
だけど、アレックスの下半身はマーナーの言葉が正しいことを認めていた。
「良いのよ」
アレックスの耳元で囁く。
「私が……代わりになっても……あなたがミーニャにしたかったことを思う存分に……」
アレックスは言葉も出せずに首を横に振る。
「気にしなくていいのよ。だって私たちは既に……」
マーナーの言葉と同時、アレックスが彼女の瞳に吸いこまれそうになった瞬間、別の空間で聞こえた風切り音。続いた金属同士がぶつかる音。
「デンカカラ……ハナレロ……」
シュバインバルトの森で合流した忍びが刃を片手にマーナーに襲いかかり、彼女はそれを同じように刀ではじき、アレックスから離れていた。

第六十一話　闇と影（前書き）

１１日の更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした

第六十一話　闇と影

逃げる女を追う忍び。月明かりが黒い雲に隠れた。人では見えぬ道を駆け抜ける。
村から離れた田園地帯で、二人は立ち止った。
「ここら辺にするかね」
マーナーが振り向き、忍びと相対する。
「オンナ、ナニガ……モクテキダ？」
これは質問ではない。答えを得ようが得まいが、結果は一つだと右手に持つ白刃が伝えていた。
「いやだね、私が彼に何かをしようと企んでいるとでも思っているのかい？　私は落ちこんでいる彼を慰めようとしただけさ」
「ヤミ……フゼイガ……ザレゴトヲ」
突然強まった風が実る麦の穂を波打たせながら二人の体を吹き抜けて行った。
マーナーの銀色の髪が風にもてあそばれ、その下に隠れた褐色のとがった耳が露わになった。
「気づいていたのかい。まぁ、だからどうしたって感じだけどね。勘違いしてもらっては困るけど、私はゴレアスステップで彼らの道案内を買って出て以来の協力者なんだよ」
細く切れ長の瞳が忍びを見下すようにして吐き捨てた。
風は一瞬だけだったのか、雲を払うと月は輝きを取り戻し、風は穏やかなに麦穂を揺らしていた。
「だいたいあんたも私と似たようなもんじゃないかい」
「サニアラズ。ワレハカゲ、ナンジハヤミ」
言葉を遮るように忍びは強く言い放つが、却ってマーナーはため息をつくように苦笑いをした。
「やはり、似たようなものじゃないか」
「カゲハ、ヒカリノソバデ、ハベルモノ……。ヤミハ、ヒカリニ、

アイタイスルモノ」
再び風が強まる。
「オンナ、ツギニ、ヒカリヲオオワントスルナラ……」
左腕が弧を描いた。
と、同時、マーナーは首をひょいっと横にかしげると、その横を刃が通り過ぎていき、忍びの姿は消えうせていた。
「今のは警告かい？　やれやれ、チョイっとつまみ食いしようと思っただけなんだけどねえ」
マーナーもまた闇に溶けて行った。

第六十二話　苦悩

荒い息遣いが風に乗って行くがそれもすぐさま掻き消えていく。
愛する者の死と別れ。その悲しみに打ちひしがれていたはずなのに、第三者からの横やりが引っ張り上げてきたどす黒い感情。
それはとても甘く危険な香りをしすぎていて、体の内に溜めこめていてはいつか暴発すると本能が訴えていた。
それに気づいたアレックスは、どす黒い感情を外へ吐き出す術を今まで培ってきた知識から引っ張り出すことを試みた。
めくられていく知識という名の本で開かれた頁は、とても下卑たもので王族として許されえぬ行為であったが、暴発の結果と比較すればまだ易しく軽いものであったため、選ばざるを得なかった。
アレックスの肩が激しく動く。
のど元に感じる熱は、口から洩れる息か、あるいは瞳が流れる雫か……。
「ぐ……」
急に動きが止まり、目の前の地面が濡れていく。
腰から下がまるで自分のものではないように感じる浮遊感。そしてそのあと訪れる罪悪と背徳の念。
右手に触れた熱いものが急速に冷えていく。
「どんな顔して……スィン達のもとに戻ればいいんだろう？」
己のした行為を悟られる証拠となるものを隠滅する犯罪者のようにおどおどしながら、横に流れていた川で手を洗い流していた。

第六十三話　ブラン村

夜が明けて、一行は入村許可を得て集落へと足を運んだ。
郊外に広がる農村地帯で働く人々と、彼らのために商売をする人々。彼らが交わる中心部にて、スィンが突然別行動をとる旨を言いだした。
「悪いがちょっと小用があるから、スネイプ、後は任せた」
「あ、ちょっと待ちなさいよ！」
クルラが引き留めるより一瞬早く、スィンは酒屋へと駆け込んだ。
「もう！　朝っぱらから！」
「情報収集じゃないのか？　酒場は基本だろ？」
アレックスが首をかしげるが、クルラは言下に否定した。
「それは夜になってからでしょ？　この時間はみんな農作業よ。普通に聞き込みするしかないわ。でもアレックス、本当に印璽はブラン村にあるの？」
「確かに、森の長はそう言っていた。どこまで信じられるかはわからないけど」
「その件から時間が経っている。既に移動してしまったことも念頭に聞き込みだ。いいな？」
スネイプの言葉に皆がうなずき、三々五々別れて行った。

それはあまりにありふれた一農村の一酒場だった。
農夫さえ飲むことができればいい。観光客なんていやしない。たまに行商の連中も来るが、そいつらも同類だ。
木造のきしんだ扉がスィンにそれを伝えていた。
扉の音が呼び出し音になっていると言わんばかりに禿げてひげの生えたやせ親父が眠たそうにあくびをしながら奥から出てきた。
「なんだい？　こんな朝早くから。またデリーズかい？　あんたのおかみさんから朝と昼は酒を売るなと言われているんだか……」

「残念だが、デリーズって名前じゃない。今朝この村に着いたばかりの旅人さ」
スィンは椅子に腰かけて店の親父に相対した。
「要件はさっさと済ませたい口でね。単刀直入に言う。この村の１２２８年物のワイン、一樽いただこうか」
言うと同時カウンターの上に金貨を３枚転がした。
普通のワインの相場からすれば３０倍であるが、１２２８年物であるなら別である。
「お前さん通だね。ブラン村の１２２８年物を知っているなんざ……」

１２２８年……ブライタン島のブドウというブドウは悲劇にまみれた。
ボトリティス・シネレアと呼ばれる菌が猛威をふるいあちらこちらの地方で大被害を受けた。だがブラン村のブドウだけは違っていた。
偶然なのか、それをブラン村の住人が知っていたのか、外部の者には知る由はないが、ブラン村のブドウは確かにこの菌に感染したが、それは却ってブドウの糖度を高める作用をもたらした。貴腐ブドウと呼ばれる状態である。
このブドウから生み出されたワインは大変甘口でかつ美味であると評判になったが、いかんせん他の地方のブドウが全滅なのである。
価格はいやがおうにも高まり、とうとう王自らが訪問し一瓶求めた、との逸話が残るほど有名である。
だが次の年からは同じようなブドウが生み出されることはなく他の地方と変わらない、いやそれどころか低品質のものしかできなかった。
そうして１４年の歳月が経ち、１２２８年物は既に残っていないと囁かれている。ゆえに現在そのワインが飲めるとしたら３０倍の価格は相応しい。

「そしてその相場も知っている。良いお客さんだが……残念だったな。もう売り切れてしまった。この世にブラン村１２２８年物はない」
スィンは黙って、金貨１枚を追加した。
「そうだなぁ１２２８年物ほどじゃないが１２３５年物もなかなかいい出来だ。そっちでならどうだい？」
さらに黙って金貨１枚を追加した。
「お客さん。いくら積まれてもないものは……」
突然奥の扉が大きな音を立ててでっぷりと太ったおばさんがやってきた。
「何言ってんだい、あんた。地下倉庫に後一樽だけ残っているだろう？」
「ば……あれは……？」
「いやぁすみませんね。お客さん。うちの主人がバカで勘違いしてて」
おばさんは手をモミモミしながらにこにこと近づき、親父にひじ打ちをした。
「おい、お前。あれは、今度の村祭りに使う予定で……」
おばさんは素早く腕を親父の首にまわすとカウンターの陰に隠れてスィンに聞こえないように囁いた。
「ばっか。自分たちで飲むのと、金貨５枚で売れるの、どっちがいいんだい？」
「だったらもう少し値がつりあがるのを待っても……」
「だからあんたは商売が下手なんだよ。あまりしつこくないない言ってたら本当にないと思われるか値段を釣り上げていると思われたらおしまいだよ。ある程度で手打ちにしないと」
「わ、分かったから首が締まる……」
再びスィンの方を向いてにこやかな顔で手もみした。
「お客さん、それじゃぁ持ってくるからお待ちくださいね」

「ああ、それから……」
もう1枚金貨を積み上げると、おかみさんも親父も目を見張った。
「荷車も一台くれ。山道もものともしないような頑丈な奴をな」

第六十四話　情報収集

「アレックスは騙されたんじゃないか？　ここ数カ月、いやさ戦争が始まって以来、出入りは俺達だけだぜ」
　スネイプはみんなが聞いてきた情報を総合して、そう判断した。
「ブラン村にある、と言っただけだから隠れているとかは？」
「アレックスは村社会を甘く見ている。ウィードとは国境、土の民の住むグラーリー峡谷のふもと、常に外敵から危険にさらされているような村においてよそ者が入ってきているのに気付かない、というのは村の存続にかかわるんだ。
　だからこそ俺達は夜間入村できなかったし、自警団という組織もしっかりしているんだ」
「しかし、ウィードはここを攻めてない」
「ここは土の民のすみかに近すぎる。彼らを刺激したくないんだろう。彼らは森の民と違って鉱石などを生み出すから仲よくしておいた方が利点が大きい」
「なるほど……じゃぁ、印璽はどこに？」
「森の民が間違えたか……さっさと首都ガーゼル城に入っていると見るのが常道だろう」
「それじゃぁ、早速行こう。グラーリー峡谷を越えて行くんだよね」
「簡単に言ってくれるねぇ。土の民の縄張りを行くっていうのはそう簡単にはいかないんだぜ？」
　スィンが荷車に樽を載せてみんなのところへ戻ってきた。
「これから山越えしようって言うのに、そんな重たいもの持ち運ぶわけ？」
　クルラがあきれたように溜息をついた。
「当り前よ。さぁこんな村に長居は無用だ。日が暮れる前にさっさと行くぜ？」
「あ、ああ……」

スィンの勢いに引っ張られるように他の者たちも歩を進めた。
「待ってろよ、ヘルマン。今すぐお前を殺した奴をそっちに連れていくからな……」
スィンの荷車を押す腕に脈が浮かんできた。

第六十五話　峡谷

塀に囲まれたブラン村を一歩出れば、そこは収穫を終えたブドウの林が続く。
よそ者への警戒心は強く、林を通り抜けようとすると顔にしわの刻まれた農夫が手で制した。

「少し遠回りになるが、街道沿いに行かざるを得ないようだな」
スネイプは少しに奴いた顔で、集団から遅れているスィンを振り返った。
「遠回りだろうがなんだろうが、行けばいいんだろ、行けば。この程度の手荷物、大したことないぜ」
「いつから樽は手荷物になったのかしら」
クルラは手伝いもせずにスィンの周りをふわふわ浮いてつぶやく。
それでも平らかに整備された街道は荷車で快適に前へと転がっていく。
「問題はそろそろだぜ」
スネイプがつぶやいて、顔を見上げると、そこにはバックボーン山脈の終点であり、かつ最高峰のグラーリー山がそびえたっていた。
「良くバックボーン山脈は双頭の蛇にたとえられる。俺達が以前戦ったホーン岬は頭部の一つ、そして反対側のこちらはもう一つの頭部だ」
スネイプが解説を交えながら歩みを進めると、いつの間に街道に砂利が混じり、草が生え、時にけもの道とまがうほどまでに人の行き来を感じなくなってきた。
「これでも荷車で、そいつを運ぶってわけ？」
「ああ、こんな上物棄て置くわけにはいかねえ。分かっているのか？　ブラン村の１２２８年物だぞ、１２２８年物！」
「知らない。ワインなんて飲まないもの」

「かー！　空の民ってのはつまらないものなのか、それともクルラだけがそうなのか？」
「スィンの酔っ払っている姿見ていたら、酒なんて飲まない方がいいって、思うもの。反面教師さん」
「うぐ、そ、そりゃぁ、人生の失敗のすべては酒の上での出来事だが……」
「はいはい、無駄口叩いてないで、大事なものならしゃきしゃき運びなさい」
「くそう、少しくらい手伝ってくれたっていいじゃねえか」
　スィンはそう言って顔を見上げると、むき出しの岩肌が今にも落ちてきそうな山道を見てため息をひとつついた。

第六十六話　土の民

「まぁ、グラーリー山を登っているが、何も山頂まで行く必要はないからな」
「え、そうなの？」
スネイプの言葉にアレックスは驚きを隠せなかった。
「この山の中腹にある峡谷に土の民が住んでいる。彼らは山肌に洞を掘って生活しているからな。その洞は向こう、つまりウィード側につながっている。通してくれればいいが……」
「確かに険しいかもしれないが、通してくれなければ山頂を越えていけばいいんじゃないか？」
アレックスが疑問を素直に口にする。
「駄目ですわ。グラーリー山の頂上には嵐の神が住む。決して足を踏み入れてはならぬ聖域ですわ」
「へぇ、よく知っているじゃないかマーナー。その通りだ、未だかつてブランタン島の有史以来誰一人としてグラーリー山の頂上にたどり着いたものはいない。嵐の神……そいつが何者かは分からないが……おそらく俺達のようなものがおいそれと登り始めてたどり着けるような環境じゃないんだろ」
「そ、そんなところに近づいていいのかい」
「まぁ、具体的に、嵐の神より土の民の方が粗暴だっていう意味では近づいてはいけないんだろうな」
「す、すねいぷ。いますぐひきかえそう」
「声がひっくり返っているぜ。まぁ、心配するな。話して分からぬ連中じゃないだろう」

「駄目じゃ」
「あらら、取り付く島もありませんわね」

日が落ちる前にたどり着いた中腹部、両脇に岩肌が迫る峡谷＝土の民の集落＝巨大な洞穴の前で出会った土の民はこちらから口を開く前に即答した。
身長は高いものでようやく１ｍを超えるか、というくらい。それでいて横には幅があるが、それは太っているというよりも筋肉質ゆえに。若い者もいるのかもしれないが、皆一様に白いひげを長く蓄えた男たち。土の民に女はいないのかと聞けば、そんなことはなくただ表に出てこないだけである。
「まぁ、そんなこと言わずに話だけでも聞いてくれないか？」
「草の民どもの言うことなぞ、分かっておる。我々が作った装飾品か武器が欲しいと言ったところじゃろ？」
「いや、違うね。ウィード領まで通してほしい」
スネイプの言葉でさざ波が流れるように集まり始めた土の民たちががやがやと喚き始めた。
「なんと傲岸不遜な！」
「われらのすみかに土足で！」
「何が目的だ！」
「おそらくは我々のものを盗み出そうとしているに違いない！」
「おそろしやおそろしや～」
土の民たち地震で作り出した壁がスネイプ達に差し迫る。
「やばいな、これほどまで話を聞かない連中だったとは！」
「ええい！　静まれ静まれ！」
スネイプのつぶやきが、土の民の怒号に掻き消えそうなことに比してスィンの一喝はグラーリー峡谷にこだました。
「ここにおわすお方をどなたと心得る！」
「す、スィン！　まさか僕の身分を……？」
スィンは仰々しく樽をぽんぽんと叩くいて続けた。
「天下の逸品、ブラン村１２２８年物なるぞ！」
「は、はは～」
土の民は行儀よく整列して土下座するともろ手を挙げてひれ伏し

た。
「ま、まさかこのワインはこのために？」
「俺達の掛け金は、このワイン。そっちは俺達を通すこと。勝負はナンゴで良いか？」
「な、此処に来て賭博する気か？　スィン！」

第六十七話　ナンゴ

「ほほう、お前さんナンゴやるか？　勝てばワシらはそのワインをもらえると」
「そうだ、ただし俺達が勝ったら通してもらうぜ」
「良いだろう。ワシらがナンゴは得意と知っていて勝負を挑む心意気と、ブラン村１２２８年物を一樽賭ける度胸が気に入った。通してやってもよいぞ。勝てばな！」
「長、ナンゴをやるなら、アレを持っこようぞ」
一人の土の民の提案に長と呼ばれた男はうなずいた。

「ちょっと待て、スィン。わざわざワインを持ってきたのは彼らに譲って通してもらうためじゃないのか？」
「ブラン村１２２８年物をそう簡単にポンと渡せるかよ。勝負に引きずり込むための餌だよ餌」
「負けたらどうするんだ？」
「その時は回り道したらいいじゃないか。それとも俺が負けると思っているのか？」
「い、いや……」
ゴレアスステップでヘルマンと勝負していた時のことを思い出す。確かにスィンは強い。
「分かった。信じたからな。ここはスィンに任せる」
「おう、任せろ」
「ばかばかしい。私はその辺で休んでいるわよ」
クルラは肩をすくめるとバサッと飛んで離れて行った。
「やれやれ……勝負はスィン。お前に任せた。付き合ってられないからな」
「あら、スネイプ様も勝負を見られませんの？　面白そうなのに」
「こんな勝負、面白いと思う連中だけで見てくれや」

そうつぶやくと、スネイプもクルラのあとを追うように去って行った。

「長、持ってきました」

奥へ引っ込んでいた男が意匠が施されてはいるが古ぼけた箱を持ってきた。

「ふっふっふ。草の民よ。これは我々が年に一度、祭りの際に神の前で行うナンゴ勝負に使われる宝石じゃ。これほどの大勝負。神もまた照覧あろうからのう」

「へへ、面白いじゃないか。あんたたちにも神を拝んでいたことにびっくりだが、その神の前で行う勝負に草の民である俺が参加させてもらえるなんて光栄だぜ！」

長が箱を開けると、そこにはサファイア、ルビー、オパール、果てはダイヤまで、この世にあるあらゆる宝石が並んでいた。

「これは確かに神の前で行うときでなければ開けられねえな」

「それでは尋常に……」

「勝負だ」

第六十八話　勝負（前書き）

一日遅れとなり申し訳ありませんでした。

第六十八話　勝負

土の民の洞穴の中、勝負を行う祭壇では熱気がこもっていた。
「へへ、やるじゃねえか」
「お前さんもな」
勝負の行方は一進一退。片方が当てれば、もう片方が当て返して、勝負はいまだに互角の互いに5個ずつ。
「このままじゃ、決着がつかないんじゃないか？」
「スィン様が実力を発揮するのは残り1個になってからではありませんでしたか？」
「そ、そうはいっても……、やはり不安だ」

「右4つじゃ！」
「しまった。裏をかこうと思ったが……」
スィンが右手を開くとそこには4つの宝石が輝いていた。
「ほっほう。こりゃ一気に有利になったのう」
「残り1つになった。ここからスィンは実力を発揮するのか？」
「畜生、9つもあったんじゃ当てるのも難しいな……」
スィンはそうつぶやきながら長の顔を見る。目元はニヤニヤしているが白ひげで表情が読みにくい。
「定石から行けば、4・5だな……だが、ここでそんな単純なことをして、せっかく有利な状態を放棄するだろうか？　もう一度裏をかいて、1・8？　そんな冒険するか？」
スィンはわざと相手に聞こえるようにつぶやくが、それでも表情が変わる気配はない。
「ふ、そうかい？　意外と土の民ってのは憶病なのかね？」
長にやや怒りのこもって眉がつりあがる。
「そうかいそうかい、3・6辺りで被害がすくなるようにしたか。では右6！」

「ワシらをバカにしおってからに、覚悟せい！」
開かれた長の右手には４つの宝石が輝いていた。
「ち、やはり９通りもあると難しいな」
「ほほほ、次で決まりじゃな」
スィンは台の上に置かれた一個の宝石を、両手で交差するようにしてどちらの手で取ったかわからないようにした。
「ふむ、そんな取り方をしたか、じゃが、ワシの目はごまかせん！右手が下にあるから取りやすかったのは右手。だからと言って素直に右と答えるようなまねはせんぞ」
じっと長はスィンの目を見つめる。目に輝きは失われていない。ワシの経験からすると、右手で取って素早く左の掌に移した、といったところかのう？」
スィンの目がかすかに開く。
「ふ、じゃが、此処までの勝負でワシも相当の実力者であることはばれておるじゃろう。そんなありきたりのことをすると見せかけてしなかった。ゆえに右じゃ！」
「そこまで裏をかくとは思わなかったぜ」
スィンがゆっくりと右手を開いた。

第六十八話　勝負（後書き）

来年もよろしくお願いします。

良いお年を

第六十九話　乙女心

もうすっかり日が落ちて、辺りは夜の闇に包まれていた。町から離れた山奥のここは星の明かりがまるで落ちてきそうなくらい瞬く。
しかし、秋という季節。ここまで標高が高いとかなり肌寒い。
クルラはそんな夜風に身をゆだねて、一本の木の枝に腰かけていた。
「よう、クルラ。隣行ってもいいか？」
根元ではスネイプが見上げているだろうことは夜空を見上げても想像つくはずだが返事はしない。スネイプはそれを諾と理解して樹を登り始める。
「やれやれ、俺にも空の民のような翼がありゃぁ、毎回こんな苦労しなくてもいいんだけどよっと」
クルラのいる枝までたどり着いたスネイプは、服に付いた汚れを払い落しながら腰掛けた。「急に去っていくなんざ、珍しいな。やはりあれか？　わざととはいえ負けるところは見たくないのか？初恋の男の」
クルラは目を大きく開いてスネイプに振り向いた。
「ば！　何言っているのよ！　初恋の男って誰のことよ！」
「分からないとでも思っているのか？　スィンのことだ」
「し、知らないわよ。あんな男。あんな変な勝負持ちかけちゃってさ。土の民にぼこぼこにされればいいのよ」
「まぁされるんだろうな。ぼこぼこではないにしても、ギリギリのところでスィンは負ける。わざと……な」
「わざと、何で？」
「分からないふりをするなよ。俺達3人は幼いころから一緒に過ごした。あいつが考えていることくらいすぐにわかるはずだぜ。ましてやクルラにとっては……」
「待って。勘違いしないで。私が愛しているのはスネイプ。あなた

なのよ」
　そう言って、クルラはスネイプの腕に絡み始めた。
「演技はいらない。本当に愛しているなら、俺が隣に来た時点で腕を取るはずだ。だが、そうしなかった」
「……」
　沈黙。だが、クルラはスネイプの腕を離したりはしない。
「初恋云々は置いて、今、私が愛しているのはあなた。そうでなければ一緒に死線を潜り抜けることはできないの」
「スィンと再会するまではな。だが、この追跡行を始めてからは昔の思いがよみがえったみたんだろ。
　ああ、勘違いするなよ。俺は責めているんじゃないんだぜ。別にスィンへの思いが遂げられなかったから俺を選んだことは悪いことじゃない。それに、俺もクルラのその思いを知っていて、傭兵稼業に利用していた悪い男だからな。
　ただ、クルラ……。自分の思いには素直になった方がいい」
「そんな風に割り切られるのは、私のことをどうでもいいと思っているからなのかしら」
「そうかもしれない。正直言えば、俺はクルラのことを手ゴマの一つ、としか見てないだろう。これまでも、これからも」
「はっきり言うわね。落ちこむわよ。まぁ、手ゴマの一つでもあなたの役に立つなら、それでもいい、って決心して付きまとっているんだから、別にいいけどね。必要ない、と思われたら殺される。それさえもわかっていてね。あなたは分かるかしら、ミーニャみたいな子に手をかけるときの心」
「その心を振り返ってしまうなら、傭兵なぞやめてしまえ。いつか死ぬぞ」
「はぁい。じゃぁ、せめて明日まで一緒にこうしててよ。手ゴマにも餌を与えないと裏切るわよ」
「そうだな、好きにするといい」
　スネイプが返事を言い終わる頃には、クルラの口からはスースー

という息が漏れていた。

第七十話　宴

「アレックス、すまん」
スィンは悪びれる様子もなく、開いた右手から宝石を転がした。
「すまんじゃないだろ、どうするんだよ！　ここまで来たのにウィードに行けませんでした、って引き返すことはできないよ！」
「まぁ、勝負は水ものだから仕方がない。戻って別の道を行こうぜ」
スィンは笑いながらアレックスの背中をたたきながら、洞窟の外へ出ようとした。
「お前さんら、待ちなされ」
しわがれた声が洞窟に響き渡る。
「なんだ？　勝負は終わった。俺の負け。これ以上何か用があるのか？」
スィンは振り返って土の民達へと尋ねる。
「むむ。『用があるのか？』などと……。ワシらの風習を知らぬのか？」
「さて、何かあったかな」
「飲め！　さもなくば帰さぬ！」
いうや否や洞窟の中で銅鑼の音が響き渡った。
どこからか笛の音が流れ始め、鈴や鐘の音がリズムをとりだす。
「ブラン村１２２８年物をもらって、客人をもてなさず帰ったとあらば、土の民の名折れ！　今夜は返さぬと思え！」
「え？　えええ？　僕達急いでいるからここを通してもらえないなら別の道へ、ごぼ！」
困惑するアレックスは後ろから羽交い絞めにされた揚句、口の中に無理やりワインを流し込まれた。
「げほげほ！　なんだこれ？　すっとする甘さに鼻の中を抜けていく芳香が深みを増している！　こんなワインに出会ったのは初めてだ！」

「スィン様。お注ぎいたしますわ」
「おおう、マーナーの酌で飲む１２２８年物は格別うまいねぇ」
「ワシらのつまみもこういう日のために取っておいたものをはき出すぞ！」
奥から、さまざまな料理を持った女性の土の民たちがたくさん現れ、みんなの前へと置いていく。
「さてはナンゴ勝負の前から準備してたな？　勝つ気満々だったとは」
「勝とうが負けようが、この洞窟に足を踏み入れた時点からお主らは客人じゃったわい」
スィンは眉を吊り上げる。
「負けた時はあの樽を眺めながら、こんな歓待する気になれるのか？」
「はて、何の話かのう？」
「とぼけやがって、どっちにしろあの樽はあけることになったんじゃねえか」
「スィン！　これうまいよ！　どうしよう？」
アレックスが真っ赤な顔をしてスィンの肩を抱き、甘い口臭をはきかけた。
「どうしようも何も、飲めよ。まぁ、その前に食えよ」
鶏肉を焼いて蜂蜜をかけたものを手に取ると、アレックスの口に突っ込んだ。
「やれやれ、スィン様は結局自分で飲むために、１２２８年物を購入したのですわね？」
「いいや？　通行料さ」

第七十一話　交渉

「それでだなぁ、俺は迫りくる敵兵をばったばったとなぎ倒し……」
「ほほう、草の民の割には腕っ節がいいのう。どうじゃ、一つ腕相撲でも」
「お、負けはしないぜ、負けた方がどんぶり一杯飲み干す、そういう賭けでいいな？」
「もちろんだとも！」
「やれやれ、アレックス様がすっかり酔い潰れているというのに、スィン様はお構いなしですわね」
　マーナーは洞窟の外で酔いざましをしつつ、アレックスに膝枕をさせて、漏れてくる明かりを眺めていた。
「はてさて、あの子たちは蚊帳の外でしたけどよかったのですかね？」

「いやぁ、お前さんら良い飲みっぷりに良い腕っ節！　先ほどのナンゴもいい勝負じゃったわい！　気に入ったぞ！」
「いやぁ、そう言ってもらえるとうれしいねぇ」
「困ったことがあったら何でもこのじいに言うと良い！　相談に乗るぞ！」
「そりゃぁありがたい。それじゃぁ、早速だけど。ちょっとだけあんたらのところ通らせてくれないかね。ウィード領に行きたいんだ」
「ん～？　草の民を通すのはのう……」
「まま、もう一杯」
「あ、これはすまんのう。しかし、昔からの掟で……」
「１２２８年物だぜ」
「いやぁこれはうまい！　まぁ、数人通したところでご先祖様も怒りはしないじゃろ」
「それは、ありがたい！　ほれほれもう一杯！」

「なんでこんな掟なんかあるのかのう、いやぁうまい！」

「ったく、ナンゴに勝たせて気分を良くさせ、うまい酒で通行許可を勝ち取るなんてもんに付き合う気にはなれないぜ」

一人、樹の上で干し肉をかみしめながらスネイプはクルラの寝顔を眺めていた。

第七十二話　地底湖

何故土の民は、よそ者にこの道を通過させないのか？

縄張り？

否

聖域？

否

「そんなもの決まってるじゃねーか」

「凹凸の激しい道とは呼べぬ岩肌を上り下りすることは想像出来たから我慢できる。

所々現れる土柱に頭をぶつけたのもご愛敬。痛いけど。

だけど、なんだよこれ！」

頭上を覆う天井から落ちる雫が波紋となって広がる。

その音は反響し、空間の広さと静けさを強調する。

「聞いてない。僕は聞いてないぞ！　こんな所どうやって通るんだよ！」

「泳いで渡るか？　けらけら」

アレックスは試しに水面に触れ、すぐさま引っ込めた。

「こんな冷たい水には入れないよ！」

「ふとヤサクが水底を見下ろしてみると、死んだと思っていたカヘエが青黒く染まった鬼のような顔で睨みつけていた。『ひぃぃ！成仏したまへ！　成仏したまへ！』カヘエは拝むヤサクの両足をガッと握り締めると皮がズルッと剥け白骨があらわとなった。しかし握る力はあまりに強くヤサクは振りほどくことも出来ぬまま、ズルズルと湖の中へと引きずり込まれていく。ズルズルと……。ズルズルと……」

「こんなところで怪談は求めていないよ。クルラ」

「怪談じゃないわ。実際に土の民がすむ洞窟の地底湖、サメヒカ湖で起こった事件よ。ここがそうなんだわ」

「冗談でもそういうことは言うべきじゃないと思うんだな」

「膝が震えているぜアレックス。それはそうと手本を見せてくれよ」

言いながらスィンはアレックスの肩を押した。

第七十三話　尋問

「うわ、落ちる、あわあわあわ〜〜〜！」
体勢を崩したアレックスが水面と口づけしようとした瞬間、襟首を掴まれてすんでのところで引っ張り上げられた。
浮遊感。水面がぐんぐん離れていく。
「う、浮いてる？」
「お手本ってこんな感じでいいのかしら？」
クルラが翼をはためかせて、アレックスをまるで猫をつかむようにして抱えていた。
「ああ、そのままだとアレックスは窒息死だな」
スネイプの言葉にクルラは見下ろすと、アレックスの首や手足がだらんと力なく垂れ下がっていた。
「あらごめんなさい。首が閉まっていたかしら。私としたことがおほほ」
照れを隠すように口元に手を当てて笑うと、体勢を変えてそのまま向こう岸の方へと飛び去って行った。
「さて、邪魔者が消えたところで……」
スネイプがマーナーの後ろに立つ。
「へい彼女。茶でもしばかへん？」
にやにやと笑みを浮かべたスィンがマーナーの前に立つ。
「あら、こんな人気のいないところで急にどうしたのかしら？　私は一向に構わないけども、お二人同時に相手するのは少し骨が折れそうね」
「ああ、本来なら一対一でお付き合い願いたいところだがどうもそういうわけにはいきそうもねえ」
スィンが肩をすくめてつぶやき、鉤爪を抜き放つ。
同時、マーナーは背中にも何かが当たるものを感じる。
「あなたの一物はとても冷たく硬いのね？」

「ああ、絶頂に達した瞬間は天にも昇る気持ちになれるぜ？」
「そんなに殺気立たなくても、お相手してほしければいつでも私は受け入れるわよ」
「そうかい？　それじゃぁ、聞こうか。何が目的だ？」
「あら、あの犬と同じことを聞くのね。そうね。アレックス様……かしら？」
　前後の男が同時に眉を吊り上げる。
「一目ぼれしてしまいましたわ。涼しげな瞳。すらっとした顔立ち。それでいてどこか抜けているところがあって……母性本能をくすぐられますわ」
「その言葉を聞いて、はい、そうですか。と言えるほど俺達は修羅場を知らないわけじゃない。男を罠にはめるのには色香が一番だからな」
「あら、乙女の純情を疑うなんて心外ね」
　湖が凍りつくのではないかと思うほどに冷たい空気が辺りを漂う。
「ところであなた方はどうやって渡るのかしら？」
「話を変えるつもりか？」
「クルラちゃんが何往復かするつもりなら、アレックス様が向こう岸でおひとりになる時間がありますわねぇ」
　二人がはっと息をのむ。
「お忘れですの？　この湖から先はウィード領ですのよ」

第七十四話　誘拐

「マーナー……貴様！　まさか？！」
「私は何も？　ただあまりにも不用心ではないかと、忠告しただけですわ」
２人が向こう岸を見ると、闇の中から赤い影、だけ、が見える。
「クルラ！　向こうに誰かいなかったか？」
「いなかったわ。だから置いてきたけどまずかったかしら？」
「スィン！」
「ああ、俺が行く！　クルラ頼む！」
スィンが大きく跳躍する。
「え、ちょっと！　いきなり何よ！」
あわててクルラがその身体を抱きかかえて尋ねた。
「いいから、超特急だ！」
クルラが訝しがりながらも翼を強くはためかせて向こう岸へと消えていった。
「二人きりになれましたわね」
「罠に……はめたのか？」
「いいえ？　私は何も。ただあなた方についてきただけですわ。アレックス様に惚れたがゆえに一途な思いで……」
「残念だったな。それもここまでだ。あんたはここで置いていく。否。消えてもらおう」
スネイプが引き金に指をかけた瞬間。
まるで影の中に溶け込むように姿が消えた。
「それは残念ですわ。正直にお教えしましょう。私は闇の民。影があればどこでも移動ができるの。また向こうでお会いしましょう。愛するアレックス様のそばで」
「くっそ。ウィードの間者め」
「スネイプ！　大変！　アレックスがいないわ！　スィンが捜して

いるけれども……」
「やはり……連れ去られたか……」

第七十五話　侵入

土の民の洞窟を抜けると、想像した以上の明かりが目に飛び込んできた。
「白い……この光は……」
冷たい風が身をこおばらせる。
「雪……ウィードはもう冬なのか？」
出口がバックボーン山脈の頂上付近とはいえ、辺りはすでに白銀に覆われていた。
太陽光がいつもより眩しく輝き、溶けかけた雪が雫となって木々の枝葉から滴り落ちていた。
「ち、こんな事態じゃなければ、この光景も美しいと感じることができたかもしれないのによ」
スィンが毒づきながら辺りを見回す。
「この雪は、俺達にいろいろ教えてくれる。アレックスを誘拐したのは5人て、ところか……アレックスがどのように連れ去られたのか……暴れた感じがしねえから、抱え上げられたか」
「クルラがいなくなった時を見計らっていることからして、アレックスを確実に狙って実行しているな」
「そう考えるとマーナーがウィードに何らかの手段を使って伝えたと見ることが正しいだろう」
「この道程を提案したのもあの女だからな」
「足跡を先行して追っているクルラは何か見つけただろうか？」
雪の積もった下り坂は下りるにも慎重にならざるを得ず、クルラが追いつくことを期待した。
が、空に赤い点が見えた。
「だめ、そこにある砦で足跡は消えているわ」
「3人で砦に侵入は無理だな……」
「まぁ、こんな辺境の砦で何らかの裁定が下りるとは思えない。お

そらく首都まで運ばれるだろう」
「その時に奪還だな」

第七十六話　護送

「結論から言おう……。あれでは奪還は不可能だ」
「アレックスの身分がばれているとしか思えないほどの護送っぷりだねぇ」
砦から首都へ続く道を樹の上から見下ろしながらスネイプとスィンは肩の力を落とさざるを得なかった。
「お～お～まるで王様の行幸だ。ひぃふぅ……やめた。ざっと３００名か。ここまで兵士が護送しているなら。あんな辺境の砦は空っぽだろ。いっそ占領してしまうぜ、って言いたくなるな」
前後は当然の行列にしても、おそらくアレックスを載せているであろう馬車の左右は、他の兵士よりも上等な鎧に身を包んだ騎兵が固められていた。
「占領しても、そのあとの守りが不可能だしな。戦略的には意味がない。それよりもアレックスを救出することが優先だ。クレイスの王子様がウィードで虜囚の辱めを受けているとなると、戦局はかなり不利になる」
「ヘタすると処刑だろ。あの王将軍様の性格から考えるとな」
「ごめんなさい。私がアレックスを一人にしたばかりに……」
クルラが珍しくさえない表情でうつむいたままだった。
「気にするな。お前は俺の指示に従っただけだ。今回の落ち度は俺にある」
「そうだ、スネイプがアレックスを抜きにしてマーナーを尋問しようと言いだしたからだ。やーいやーい。スネイプのせいだ」
「スィン……」
クルラが潤んだ瞳でスィンを見上げた。
「お、なんだ？　あ、そうかい。愛する人をなじるなって。そりゃぁすまんかったな」
「そうじゃなくて……。ありがとう」

「な、なんだよ。調子狂うな。礼を言われることはしてないぞ」
「そうなの？　じゃぁ、愛する人をなじるな！」
「それでこそクルラだな」
「夫婦漫才はそのあたりにしてアレックス奪還作戦を考え直すぞ」
「「夫婦じゃない！！」」

幕間

「ワシはこういう戦は好かん」
メルムーク将軍は覗いていた望遠鏡を下ろすと一言で言い捨てた。
ウィード軍に動きは無い。陣営を築き、守りをしっかりと固めている。ただ剣でかたどられたWの文字の旗が左から右に流れていた。
「将軍、戦は好き嫌いでするものではないと考えますが」
「分かっておる。だがこのまま睨み合っているだけでは冬が訪れる」
「それはウィード軍にとって不利でございましょう。彼等の補給は山河を越えて行わなければなりません。対して、我等は整備された街道を通ってきます。冬になり雪となれば彼等に残されたのは退却しかありません。そのとき我等は追撃すればよいのです」
「そのときを座して待つ……」
「はい」
「ような連中か？　ウィード軍は」
「それは……」
「これは奴らの作戦よ。雪が降れば勝つ。クレイス軍がそう思って士気が落ちるときを待っておるのよ」
将軍の言葉に側近達は空を仰いだ。北から流れて来る灰色の雲が今にも罰を与えんばかりに怒り狂いそうに思えた。

「やれやれ、こういうとき、あやつがおれば動きをつくれようものを……無いものねだりは……」
あかんか、と周りに聞こえないように小さくつぶやいた。
「ワシらしくないのう。あの雲がワシを陰欝にさせたか。どれ、暴れる部下がおらぬなら……馬をひけー！」
「どこへ行かれるのです！？」
「知れたことよ！　あいつがここにおればこう言うわ！　『天下のメルムーク将軍サマも老いたねえ。昔のあんたなら先陣切って暴れ

るだろうよ。やはり俺がいなきゃダメかい？』とな！」
将軍は用意された馬にひらりと飛び乗ると、叫びながら自陣を駆け抜けた。
「続け続けー！　続けー！　けぇー！」
そしてクレイス軍は将軍を先頭とした一本の錐となりウィード軍に突き刺さった。

第七十七話　裁判

青空を映しだす湖面から突き出すように白亜の尖塔が４本伸びていた。
優雅に見えるこのガーゼル城の光景も、兵を指揮したことあるものならば難攻不落の要塞であることが見て取れる。
湖の中に浮かぶ島に城塞を築き、外界との行き来を一本の橋『ダイグロス橋』のみで行う。
もしも耐軍がこれを包囲するならば、橋を落として籠城するだけで攻略は困難となるであろう。
そのことによって城内で生活をし、あるいは勤める者達が不便を強いられようと……。
なお、ダイグロスとはウィードに伝わる蛇神の名で、ある時は人々に災厄を与え、ある時は人々から外敵から守る善悪を兼ね備えた存在である。
今、一台の檻を備えた馬車がこの橋を駆け抜けるように渡って行った。

「今日は良き日じゃ良き日じゃ！　１日に２つも朗報が入ってくることなぞなかなかないぞ！　皆の者も笑え笑え！」
王将軍ことアウグスティーン王の赤いひげを蓄えた口が大きく開いて、その声が謁見の間に響き渡った。
集まった将軍たちもまた王と同じ思いを抱いて大いに笑い、視線は中央に座すクレイス王国のアレックス＝ルイ＝クレイス王子へと注がれていた。
当然に彼は外交文書を携えてきたわけでも、アウグスティーン王のご機嫌伺いのためにいるわけでもない。
その両腕は枷をはめられ、口はくつわで塞がれて、上半身は裸という、ウィード法に則った罪人の姿である。

アレックスが甘んじてこの状況を受け入れられるはずもなく、身をよじって枷をはずそうとしたり、何かを訴えようとくつわからくぐもった声が漏れるが、それらは彼以外に何ら意味を与えることはなかった。

「やれやれ、間者の情報によりアレックス王子がウィード領に接近しつつあると聞いた時にはわが耳を疑ったが、まさか首尾よくとらえることができるとはのう……」

悦に浸っている王の前に一歩進み出た将軍が一人いた。

「さればでございます。このものの処遇につきましてはいかがなさいますか？」

「そのことにつきましては拙者に良き案が」

別の将軍が進み出て王の前にかしずいた。

「許す。述べよ」

「このものの命と引き換えにクレイスの領土を出来る限り多く交換することです。あるいはクレイス城さえも差し出すかもしれませぬ」

王は納得しかねる表情を見せたため、今度は別の将軍が進み出た。

「それでは拙者の意見を」

「許す」

「バラポラス平原においてメルムーク将軍を討ち取ったわれらに今や人質により領土をいただくなどと言う手ぬるいことは必要ございませぬ。彼の将軍亡き今、クレイスを守ることのできるものはおらず、力でクレイス城を奪い取ることも可能。

それよりも長きにわたる戦乱で庶民には厭戦の感が漂っております。これを打ち払うためには祝勝の儀式が必要でしょう。その儀式に必要な餌がまさに今ここに転がってきているわけでございます」

アレックスはこの将軍が話している言葉一つ一つに耳を疑い、そのたびに暴れるように身をよじった。

「ふむ。で、儀式とは具体的には？」

王は興味にかられ、身を乗り出して次の言葉を待った。

「もちろん、公開処刑でございます。それも銃殺などと言う瞬間的な死ではなく、多くの人々が長く楽しめるよう苦しみが続く絞首刑でございます」
アレックスは首を横に強く降ってその場から逃れようとしたが屈強な衛兵2人に抑えられては何も効果がない。
「ふむ。それは良い案である」
判決が言い渡された。

第七十八話　宣伝

「おい、聞いたか？　クレイスの王子がよ……」
「もう聞いてない奴なんていねえよ！」
「7日後だろ？　執行日まで！　その日が待ち遠しいぜ！」
「地方都市からも見物者を集めるように伝令も走ったらしいからな。俺は出店を出して儲けるぞ！」
　裏通りに面した木造の酒場は戦時中の節約で、ランプ代わりのろうそくが数本しか灯っておらず薄暗いが中にいる荒くれどもの怒号は決して小さくなりはしない。
「王子サマもこんな場末の酒場の肴になるまで落ちぶれたか……」
　酒場の一番隅の席で縮こまるようにして盃をあおる男がつぶやいた。
　対面に座る男は、答えず飲まず、腕組みをしてまるで眠るように動かずにいた。
「ところであいつは？」
「翼を持つものが受け入れられる店か？　今頃樹の上さ」
　三日月が映る湖面に浮かぶ城を見渡せる森に、赤い影が一つ。
　いまにも飛び出しそうに広げていた翼をゆっくりと畳んだ。

第七十九話　繁盛

街が活発になった。ウィード領内の地方都市から次々と人、物、そして金が首都ガーゼルに集まって来る。

戦争で忘れ去られていた“にぎわい”という言葉をここぞとばかりに人々は求めていた。

それが捕虜の処刑、それも敵国の後継者たる王子とあらば千年に一度見られるかどうかの大好機によって与えられていたため、人々の興奮は氷水をぶっかけても醒める気配はない。

これは見逃してなるものかと、富めるものは馬車にお供にの大名行列、貧しいものも家財道具全て果ては子供さえ丁稚奉公に出させてでも旅費を捻出して街道を急いでいた。

外壁に囲まれたガーゼルの城下街の南大門が開き、木材を大量に載せた荷馬車が目抜き通りを駆け抜けて行った。目的地は街の中心に位置する大広場。

ここに王子専用の処刑台を築こうとしていた。

集まる人々はかなりの数にのぼるとみられ、広場に収容できないとアウグスティーン王は考えている。あぶれた人々をどうするか。

簡単である。外壁の上を開放してそこから見物させるのである。

これによって発生する障害は街の家々が邪魔で処刑台が見えないことであるが、それならば高くしてしまえ、と専用のものを築くのである。

だがここにきて王将軍の性癖が出た。　広間に集まった人々に王子を晒すための舞台を低い位置に設け、そこから高い位置にある絞首台へと上る螺旋状の階段を作るのである。

死地へと自分の足で歩ませる。

「彼は一体どのような姿を晒してくれるであろうか？　獅子王と呼ばれた初代クレイス王の血筋がどれほどのものかたっぷりと見せてもらおう」

城の空中庭園から広場に出来つつある処刑台を見下ろしながらアウグスティーン王はワインの杯を傾けた。

第八十話　影再び

月明かりに照らされたガーゼル城を見つめるものがもう一人。
光に寄りそう影でありながら、他者の目に触れることをおそれ、別の道を歩む間に光を見失っていた。
彼にとって、光を取り戻すことが全てであった。
だがガーゼル城侵入は容易ではない。
3方向は湖に囲まれ、唯一の橋は警備兵が護りを固めている。
いな、城壁にも見張りの兵が巡回している故、湖を泳いで渡ったところではい上がったところを串刺しにされるであろう。
影は意を決して、ほとりの木の上に跳躍する。
もう一度城壁までの距離を目測する。
首を軽く縦に動かしたあと、枝のしなりも利用して大きく跳躍した。

ウィードの見張りは優秀である。
湖の対岸から聞こえた木々の音を耳にとらえ、すぐさまそちらを向いた。
優秀故の致命傷。影は彼の背後に降り立ち、刀で一閃、悲鳴もあげさせず首筋を掻き切った。
「さすが王子様の影は優秀ね。ここまで来ると思ってたわ」
曲がり角の向こうから聞こえてくる女の声。間違いもなく、王子様誘拐の張本人たる女のものであり、影の前に姿を表した。
「メギツネ……」
「ひどい言葉ね。王子様に恋い焦がれての行動と言ってほしいわ」
影は黙したまま、刀をマーナーにむけて振り払う。
「あらあら、血気盛んなこと。聞きたいこともありそうな顔をしておきながら、刀を女に向けるなんて」
先程までそこにいた女の姿が消え、次の瞬間には別の場所に現れ

た。
「コロシハセヌ。トラエテ、シャベラセル」
「あらやだ、捕らえてだなんて拷問にでもかける気かしら？　それはそれでゾクゾクしちゃうけれども」
　赤い唇の口角を吊り上げて己の指でなぞった。
「この場で話してあげても良いわよ。だってあなたは生きて帰れないもの」
「ヌカセ」
　影が何度も刀を振り払うが、その度にマーナーの姿は消えたり現れたりを繰り返し、捉えることができない。
「王将軍さまと約束したの。王子様を捕らえて来ると。そうすれば彼をくれると」
　刀の動きが止まる。
「マサカ、キサマ」
「あら、犬のクセに賢いのね。そう私は王子様の死体がいただければそれで良いの。闇の民の秘術で“生き返らせられる”から」
「アレハ、ヨミガエリノジュツニアラズ」
「そうね。死体が動けるようになる秘術。いわゆるゾンビを作り出すものだからね。でもそれでも良いの。二人仲良く永遠に暮らしていくことが出来れば」
「……」
「おしゃべりはおしまい。話しを聞いたからには死んでもらうわ」
　マーナーが腰に差したシャムシールを抜き放った。

第八十一話　火花

月下のガーゼル城のあちらこちらで火花が飛び散った。
あるいは南東の見張りに使用される尖塔の屋根で、あるいは剪定された植え込みのある中庭で、果ては王将軍が休む寝室のと壁一枚隔てただけの回廊でさえも。
マーナーのシャムシールは影に届かず、忍びの刀は闇を切り裂くことは出来なかった。

「あんたも不思議だね。こんなに騒いだら誰かが起きてくると思わないのかい？」
忍びの目が、何かを確信し批判を込めてマーナーを見つめた。
「やれやれ。そこまでお見通しかい。あんたとは思い切り戦いたかったからね。ちょいっとみなさんには眠ってもらったよ」
忍びは眉をひそめて口元を覆う布を手で整えた。
「そうそう、あまり回りの空気を吸うんじゃないよ。あんたまで眠られたらつまらないからね」
忍びは批判の目を怒りに変えて、刀を逆手に持ち替えた。
「何をそんなに怒ってるんだい？　あんたにとっては敵あたる連中を眠らせただけじゃないか」
「シノビトハ　アルジノタメニウゴクモノ　オノガヨクボウガタメアルマジキ」
「なんだい。私のことも忍びとして見てくれてるのかい？　そんなまね事をしていた時期もあったねぇ」
言いながら、マーナーは懐から光るものを取り出し何度も宙に放り上げて弄んだ。
「インジ……」
忍びが姿を消すと同時マーナーも闇に溶け込んだ。二人の中間点で火花が飛び散り、二人の位置関係が入れ代わった。

「そう簡単には取り返させないよ。苦労してここまで持ってきたんだからね」
「ゲセヌ。ナゼ、アルジニワタサヌ？」
「簡単さぁ。私は裏から全てを手に入れるのさ。印璽も王子様も。そしてこの島もね」
忍びは怒りを通り越して呆れたように首を横に振った。
「ブソウオウナモノハ、テニイレタラ　ミヲホロボス」
「へぇ。あんたが滅ぼしてくれるのかい？　やってみな！」
マーナーが再びシャムシールを振り上げた。

第八十二話　影を呑む闇

火花は城の外周から徐々に室内へと飲み込まれて行った。
「ドコマデ　イクキダ？」
マーナーの一撃加えて後ろに下がるという動きは明らかに誘いであった。だからといって誘いに乗らず仕留めることは出来ない。
そもそも城の中に外敵を入れては構造や勢力などを教えてしまう。あえてそれを実行する理由はただ一つ。敵を生きて帰さないことに対する自信があるからだ。
火花の動きは内部でもさらに下部、それも深部へと向かっていく。
石造りの壁に装飾がほどこされたきらびやかな広間を抜けてついにはかび臭さに包まれた階段を下っていく。
マーナーの姿が消えた。油断は出来ないが、ここがどこであるか把握に努める。
「ロウ？」
石の天井と床を貫く幾本もの鉄棒。
そしてその向こうにある存在に忍びは本来の目的を思い出す。
「デンカ……！」
それが忍びの最後の言葉となった。
崩れ落ちる影の後ろで闇が紅い三日月を作るように笑みを浮かべていた。

第八十三話　執行前夜

夜の帳は等しく人々の頭上に降りてくる。
だが、この地下にある牢屋には太陽は姿を見せることなく、夜の訪れを知るすべはない。
ただ、3回運ばれる食事だけが、時間を推し量る手段だった。
「きちんと食えよ。処刑される前に飢え死にしたり、衰弱しきってあっさり逝っちまったんじゃつまらないからな。死刑囚は生きがよくなくちゃいけない。長く長く、縄がゆっくりと首に食い込んでいき顔が苦痛にゆがんで、次第に涎が垂れ、目がむき出しになり、糞尿を垂れ流すようになるんだ。ああん？　この程度で食欲を失うのか？　それともウィードのご馳走が食えないっていうのか？　それならおれが喰わしてやるよ！」
看守はアレックスの顎をつかみ口を無理やりこじ開けると、椀に入った汁を流し込んだ。
「げほっげほっ！」
「おおっと、吐き出すなよ。最後の一滴までこぼさず飲めよ！　あはは！」
「まぁまぁその程度にしておけよ。なにせ死刑執行は明日。これが最後の晩餐ってやつだからな。ゆっくり味あわせてやんな」
「明日？」
力なく光を失った眼を看守に向けた。
「ああん？　日付も分からなくなっちまったのか？　まぁ、こんなところに居ればそうかもしれないな。お前が王将軍様と謁見してから6日。明日が執行日さ！」
「明日……」
震えが止まらない。6日間、助けを求めた。スィンが暴れながら降りてこないか？　あるいはスネイプが看守の頭を吹き飛ばしてくれないか。あるいはクルラがさっそうと目の前に降り立ってこない

か……。

何度も妄想し、現実ではないことを悟りため息をつく。

だがそれももうおしまい。寝て覚めれば死刑が待っている。

その現実がアレックスの肩に重くのしかかっていた。

第八十四話　執行日

日に日に冷えていく季節にしては珍しく、その日は抜けるような青空に太陽が浮かび、春が訪れたようであった。
まして、国中の人々が集まり、喧騒が絶えないガーゼルの街では夏が戻った感さえあった。
広場の中心に据え付けられた木製の絞首台と、そこへと登っていくための螺旋状の階段がよく見える場所を人々は取り合い、時としてケンカに発展して兵士達に拘束される騒ぎは1件や2件では済まなかった。
突然、大きな銅鑼の音が秋空に響き渡る。
それまであちらこちらから聞こえていた人々のざわめきが掻き消されたように沈んで行き、視線が一同に集まる。
集まった先は城の一角。王将軍こと、アウグスティーンが姿を表し、さっと右手をあげると群集から割れんばかりの喚声が上がった。
アウグスティーンは喚声を心地よさ気に一身に浴びると、程なくして満足したように手を下ろした。
それが合図となって、再び静まり返っていく。
「諸君！」
簡潔かつ力強い言葉が人々に投げ掛けられる。
「長きにわたる雌伏の時はやがて終わりを告げるであろう！
ブライタン島を支配したクレイス王国と干戈を交えること幾度あったであろうか。
我等が誇り高きウィードはいかなる辛酸も飲まされては飲み尽くして今日を迎えた。
諸君も承知のとおりすでに我が軍はクレイス城を包囲している。
ここに至り我等は大戦果を上げた！
注目し給え！　虜囚の憂き目に遇いしアレックス＝レオンハルト＝クレイス王子の姿を！」

大きな拍手とともに城門がゆっくりと開きはじめた。

第八十五話　入場

開いた門から槍を斜めに構えて武装した兵士2名を先頭に、アレックスにはめられた首輪につながる綱を引く兵士、脱走を防止するために両脇に2名ずつ、そして後方にもまた1人。

歩くのを拒否するアレックスの背中を強く押し、よろけるたびに観衆は下品な笑いをあげていた。

一歩一歩処刑台へと近づくたびにアレックスは首を大きく横に振り、あるいは脱走を試みようとしては両脇の兵士に取り押さえられることを繰り返した。

衆目にさらされたまま、死へと続く道を歩み、ついには処刑台のもとへとたどり着いた。

第八十六話　街壁

街の喧騒からやや離れた外壁の見張り台の下でその男は立っていた。
「誰か来るとは思っていたが、まさかあんたとはね」
辺りには3体のウィード兵だったものが転がっている。
「スネイプの考えていることなんかすぐに分かるよ。なんせ戦場での付き合いはあんたより長いんだからね」
陽光を背に浴びて真紅の鎧が輝きを放つ。
「まぁ、このスィン様の英雄譚にこいつらじゃぁ役不足ってもんだ。あんたが来てくれて見せ場ができたってもんだ」
スィンは鈎爪を構えてリラに一歩近づく。
「どけ、脇役。貴様に用はない」
「スネイプもとんでもねえ女に追い掛けられているもんだな。だが悪いけど俺の熱い想いを受けとってもらうぜ」

第八十七話　全力

「やれやれ。先の戦いではスネイプの射撃を意識しながら戦って互角だった。だが今回はその心配もない。これがどういう意味か分かっているのかい？」
肩を竦めているリラに対してスィンは口の端を吊り上げる。
「御託は良いからやり合おうぜ。兵士と傭兵。口先じゃなくて実力でどちらが上か証明するもんだぜ」
「貴様ごとき1分で決着を付けてあげるよ」
「やってみろ」
言うや否やスィンは前に踏み込んだ。
「よ！」
鋭い一撃が剣を持つリラの右手を震わした。

第八十八話　怒り（前書き）

投稿が一日遅れて申し訳ありません。

第八十八話　怒り

舞台は再び処刑台に戻る。
「諸君！　彼こそが長きにわたる戦の元凶であり、本日その罪により処刑を行うものである。だが、一瞬の死は彼に贖罪の機会を奪い、地獄へと落ちるであろう。我々は悪魔ではなく善良なる一市民である！　彼への最後の慈悲として悔い改める時間を与えようではないか！」
アウグスティーン王将軍の言葉に歓声がわきあがると同時、事前に周知された達しにあった通りに持ってきていた、卵やトマトといった野菜などを取りだした。
（違う！　この戦争を仕掛けてきたのはウィードの方じゃないか！　みんな、いったい何をする気なんだ）
声をあげたくても口枷をされた状態ではうめき声しかでない。
王将軍がさっと手を挙げると、皆が固唾を飲んで、身構えた。
その手が下りた瞬間。
アレックスの型に何かべっとりしたものがぶつけられた。
（う……。これは……？）
正体を知る前に胸、背中、足、果ては頭にまでドロドロとしたものに包みこまれていく。
集まった人々が次々に持ってきたものをアレックスへと投げつけていく。長引く戦に厭戦気分を晴らすための王将軍からの「褒美」であった。
（や、やめろ！　息が……）
卵白が口の中に入り込んでくるが吐き出すこともできず、唾液とともに流れ落ちていく。
その次の瞬間、目の前に星が飛ぶほどの衝撃を頭に受けた。
アレックスはその正体を知るすべを持たないが、答えを言えば、かぼちゃである。

これほどの重さのあるものを、頭に当てることができた市民の腕は見事というしかない。

王将軍が再び手を挙げると、銅鑼が町中に響き渡った。同時、野菜の投げ合い合戦はピタリとやんだ。

第八十九話　願望

「おい、生きているか？」　処刑執行人が大股開きで、ヌルヌルする床を歩みアレックスの元に着いた。
髪をわしづかみにすると同時、嫌悪感を表情から隠すことなくあらわにして唾を吐きかける。
アレックスのまぶたがピクリと痙攣するが、その瞳は虚ろで焦点は処刑執行人には合っていなかった。
「結構結構。この程度で死んでもらっちゃ困るからな」
「も……」
アレックスの口から息とも言葉ともつかぬ空気が漏れる。
「なんだ？」
「もう、殺してくれ……」「おいおい。最後まで希望は捨てたらいけないぜ。もっと俺達を楽しませてくれよ。もっと喚けよ。命乞いしろよ」
アレックスから返事はない。それにムッとした表情を見せて、顔を靴で踏み付けた。
「靴の裏を舐めろよ。上手に出来たら処刑を取やめても良いぜ」
アレックスの瞳に微かな光が灯った。

第九十話　絶望

「は、はい……」
ゆっくりと舌を出したアレックスはそのまま処刑人の靴に顔を近づけた。
「よく見よ！　皆の衆！　クレイスの王子様が一平民の靴をお舐めになるぞ！」
どっと笑いが起こるが、アレックスは意にも介さない。ただ助かりたい、その一心で靴をなめ回した。
瞬間、歯が折れるかと思うほどの衝撃があった。口中に鉄の味が広がる。
「下手くそめ。かえって俺の靴が汚れたじゃないか」
処刑人はゲラゲラ笑いながら、床に転がる芋を拾った。
「口が痛そうだな。薬を塗ってやるよ！」
痛みで悶えているアレックスの顎を掴み上げて無理矢理口を広げると芋をそのまま突っ込んだ。
突然の衝撃にアレックスはむせ返り芋を噴き出す。
「あーん？　王族様は庶民の食べ物が口に合わないってか？　じゃぁ下の口だとどうかな？」

（下の口？）
疑問に答えがかえってくる間もなく、ズボンを刀で切り裂かれ下半身が露わになった。
「お、なんだくせえな？　こいつ、おもらししてやがる！　ちょーでちゅかー。おうじちゃんは、まだおねしょしゅるんよねー」
嘲りも観客の嘲笑も耳に入ることなくぼやけた視界で何も考えることは出来なかった。
「そんなお子ちゃまにはお仕置きだ！」
今度はキュウリを拾い。アレックスの肛門に無理矢理突き入れ、

蹴りを入れて奥まで押し込んだ。
「がは！」
裂けた肉から血が垂れ落ち、痛みに転がり回った。

第九十一話　階段

「おら、いつまでも寝てるんだよ」
処刑人はアレックスの髪を掴むと無理矢理引っ張りあげた。
「ちょっと物足りないが、そろそろ時間だとよ。もう覚悟は出来てるんだろ？」
アレックスの目は虚でだらりとしまりのない口元からはよだれがあふれていた。
「おら！　自分の足で登れよ！」
ドンと背中を押され、ヨタヨタしながら地面にもんどりうつ。
「おら！立てよ。王子様なんだろ？」
手枷をさせられている状況では起き上がることも出来ずにいると、処刑人は隣にいる兵士に命じて槍の穂先で背中を軽く突き刺させた。
「このまま串刺しでも良いんだぜ？」
「お、起き……る……。まっ……てく……れ……」
どうにか体をねじりながら起き上がろうとするが、動く度に肛門の中の異物が痛みを加える。
「よーし。いい子だから一歩ずつゆっくりと階段を登れよ」
言われずとも苦痛や少しでも長く生きたい心が歩みをゆっくりにさせた。
だが歩みは止められない。すかさず槍の穂先で再び突かれるからだ。

第九十二話　頂上

（いつもクルラはこんな高さで飛んでいたのか……）
アレックスは唾をごくりと飲み込み、下を覗き込んだ。人間達がまるで豆粒のように小さく見えて、足の震えが止まらない。王族としての誇りでみっともない姿を見せまいとしようとしても、本能が邪魔をした。
（怖いものは怖い）
そして己の首にかけられる縄が頭上でコイル巻きにされているのを見た。一体どれほどの長さだろうか？　きっと地面にたたきつけられることはないが、かなりの距離を落下するであろうことは容易に読み取れた。
「さぁて、お楽しみの時間が終わってしまうのは残念だが、観客達にその瞬間って奴を見せてやらないといけないからな」
処刑人はへらへらと笑いながらアレックスの顔を覗き込んだ。
「最後に言い残す言葉はないか？」
（最後？　本当に最後なのか？　そんな言葉を言ってしまえば最後を認めてしまうことになってしまう。そんなのはいやだ……）
「へへ、恐怖で言葉も出ねえか。情けねえな」
処刑人は王将軍の席を見やる。アウグスティーンは大きくゆっくりと縦に首を動かした。
「さて、諸君！　いよいよ今日の見世物の最高潮！　この瞬間を見逃せば、何のためにここまで来たのかわからない！」
歓声が沸き起こり、皆が一斉に握りこぶしを突き上げた。
彼らにとってクレイス王子の死は終戦を意味するほど重要であった。この処刑によって夫が、息子が帰ってくる。重税の枷から逃れられる。そう信じてやまなかった。
「念のため、説明してやろう。俺がこの杭を引き抜くとお前さんの立っているところの床がカパッと開く。そうするとお前さんの体は

急降下。首にかかった縄でキュウ！　っだ。」
（この高さから落とされる？）
疑問が声になって出ない。だが口から洩れる息が彼の言いたいことを処刑に告げていた。
「そうだ。きっと天にも昇る気持ちだぜ？　まぁ実際に天に昇……。おっとお前さんが行くところは地獄か。ガハハ！」
アレックスは何か言いたいが、何を言っていいのかわからない。いや、何を言っても状況が変わらないと頭で理解してしまっている。
「じゃぁな。あばよ！　オウジサマ！」
処刑人が杭を引き抜いた。

第九十三話　落下

アレックスは足元の支えがなくなると感じた瞬間、最後の抵抗として飛び上がり口で縄をくわえようとした。
が、それも徒労に終わる。
長く、そして加速度的に景色が下がっていく。
（死ぬ？　僕が？）
いっそ意識を投げ捨ててしまえば、そんなことを考えることもなく気がつけばあの世にたどり着いているだろう。
何も縄が張り詰める衝撃を味わうこともなく、首を締める苦痛もなく。
だけど最後までそれは出来なかった。楽になりたい、そう思っても人間簡単に生を諦めることは出来ない。
そうこうしているうちに、その瞬間はあっさりとやってきた。

第九十四話　死への……

沸き上がる喚声に二人の動きは止まった。
「処刑は順調なようだな。諦めろ。何をあがいても、貴様らに王子は救えん」
不適な笑みを浮かべるリラは続けて言い放つ。
「そして二人とも私に殺されろ」
同時レイピアの突きを繰り出すが、スィンは容易にこれを捌いた。
「諦める？　悪いけど孤児院育ちの俺達は意地汚いんでね。欲しいと思ったものは手に入れるまで諦めないのさ。そしてあんたの命もな！」
次の瞬間、銃声が青空に響き渡った。
「な！」
自分が撃たれた。そう錯覚したリラに隙が生じる。
「あばよ！」
スィンの爪がリラの胸に迫った。
「あっ……」

第九十五話　赤の惨禍

狙いはリラの胸当ての帯。スィンの鈎爪が切断し弾け飛ぶ。
「く！」
「へ！　殺してしまう前に綺麗なお肌でも拝ましてもらうかね？」
「下品な！」
余波で切り裂かれた服から覗かせる白い肌を左手で押さえた。
「そんなこと気にしながら俺との戦いが続けられるか？」
スィンは今までと劣らぬ速度で両の鈎爪を繰り出し、リラは明らかに精彩を欠いたまま後ずさりながら受けていた。
「もう後がねえぞ？」
リラは背中に当たるものを感じた。確認するまでもない樹の幹だ。
「終わりだ」
スィンは再びリラの胸を貫きにいく。
リラが素早く腰を落とすと鈎爪は幹に突き刺さった。
「終わったのは貴様だ」
空いたスィンの懐にレイピアを突き出したが、目の前に迫って来るのは、スィンのもう片方の鈎爪。
身をよじって顔を傷つけられるのはさけたが、代わりに右の肩を貫かれ、そのまま樹に張り付けられる恰好となった。

第九十六話　果たせぬ仇

「へへ。なかなか良い格好だぜ」
「く、何たること。殺すなら一思いにやれ！　これ以上の生かしておくことは侮辱だ」
流れていく血とともに遠のいていく意識を保ちながらリラは吐き捨てるように言った。
「そうだな。生かしておいても、あんたは復讐にやってくるだろう。どんな気分だ？殺したい男が2人もいるってのは？」
問い掛けに、リラは唾をスィンの顔に吐きかけた。　血が混じって鉄の臭いがする。
「それが答えか。まぁでも気にするな。このスィン様の英雄物語の1頁にきざまれるんだからよ。心配せずに死ね」
「そこまで言うなら世界に知らぬものはいないほどの英雄になるんだな」
リラの言葉が終わると同時。スィンの鈎爪がリラの喉を貫いた。

第九十七話　殺戮

ウィード軍の見張り台はさんさんたるものだった。
音もなく行われた殺戮によって生きているウィード兵はなく、ただ返り血にまみれ、短剣を握り締めた女が薄ら笑いを浮かべていた。
背中の折り畳まれていた赤い翼は、ゆっくりひろがりその動きとともに彼女の体を持ち上げる。
上から見下ろす死体の数々に悦に入っているところへ踏み入れる影があった。「あらかた片付けておいたわよ」
「あらかた？　全滅の間違いだろ？」
「そうとも言うわね」
「まぁいい。ご苦労。もう一仕事頼むぜ」
「はいな～♪」

第九十八話　見晴らし

「お～、絶景かな、絶景かな♪」
見張り所に上がってきたクルラは眼下に広がる扇型の平野部と、その頂点に立つ城の風景に目を奪われた。
「俺達は観光に来たわけじゃないんだぜ。真面目に行くぞ」
「どうせ、もう少し時間があるんでしょ？　それまで良いじゃない」
クルラの言葉も聞いてないかのように、スネイプは見張り台の椅子に腰掛けて目をつむった。
射撃前の精神集中。これを邪魔をする者は誰であろうと、彼は容赦しないだろう。たとえスィンといえどももろ手を挙げて逃げ出すほどに。
「ふぅ」
話し相手がいなくなったことに、クルラはため息一つつくと、今度は市街中心部の広場に目をやった。
「この距離だと、まるで虫のようね」
先ほどの殺戮の興奮がまだ冷めず、手を伸ばして一思いに潰してみたい衝動にかられる。
だが、今回の目的はそれではない。

第九十九話　射撃前

「私もそろそろ……」
クルラは深呼吸を一つした。
先ほどとは目的が異なるならば、気持ちを切り替えなければならない。
首をぐるりと回し、緊張を解きほぐす。
自分の状態を、スネイプが想定している状態と合わせなければならない。

沈黙の時間が流れる。かすかにスネイプの祈りが聞こえる。
「神よ……。我に力を与えたまえ……。我に栄誉と糧を与えたまえ……。しかる後……、彼の魂の救われんことを……」
祈りを終えた時、スネイプの目がかっと開いた。

第百話

スネイプが銃を構えて、呼吸を整える。

広場では処刑台の床が開き、王子の体を支えるものはなく、ただ首に巻きつけられた縄だけが引っ張られて伸びていく。
（落下速度、想定内）

「行け」
スネイプの言葉と同時、クルラが翼を広げて飛びだす。
（反応速度、想定内）

アレックスは最後の抵抗とばかりに、床が開くと同時に飛びあがり、縄にかみつこうとするが、失敗して落下していく。
（その行動による誤差修正、想定内）

山岳地帯から風が吹き、クルラの軌道がやや左にずれる。
（想定内）

スネイプの呼吸が止まる。暗夜に霜が降りるがごとく、静かに指が引き絞られる。
（撃発）

風が突風となって強さが変化する。
（想定内）

弾丸の軌道がクルラの羽ばたく翼をかすめて、わずかに減速する。
（想定内）

王子の体を拘束する縄が伸びきる。それはすなわち王子の死。
否、伸びきった縄はわずかな衝撃で切れる。そう、たとえば弾丸が通過する、など。

王子は覚悟した衝撃が来ないまま身体が落ち続けていることに恐怖した。
次の瞬間。

「う、撃て！　何をしている！　弓兵部隊！　前へ！」

柔らかい衝撃とともに身体の向かう方向が絶望の落下から希望の上昇へと向かうのを感じる。

「し、しかし、撃てば市民に当たります！」

ウィード兵の戸惑いをよそに、クルラは高く高く青空へと舞い上がった。その腕に満身創痍の王子を抱えて。

第百一話　告白

ウィードの北のはずれにあるとある村。

戦争とは無縁と思われたこの地にも黒い影が忍び寄ってきていた。

「おら、ついに兵隊さんになることになっただ」

「んな、あほな！　あんたみたいなどんくさい男が兵隊さんになれるわけねぇべ」

「そんなこと言ったって、実際に召集令状が来てるだ」

「あんたみたいな、どんくさいの……、兵隊さんにはむかね……。むかねったら、むかね……ぐす」

「お、おら、おら……、無事、帰ってこれたら……、結婚してくれられれろ」

「言えてへん……。こんなときくらいしっかりしてくれろ」

「すまん……」

「あんたみたいなどんくさいの、他に面倒見れるのはおらん。任せとき」

「お、おら絶対生きて帰るだ！」

「百一話だからって、変な話で間を取るんじゃねえよ！」
スィンは王子を救出後、見張り小屋から抜け出す途中に発見され、追跡してくるウィードの歩兵たちから身を隠しながら森の中を突っ切っていた。
「スネイプの奴は無事か？」
「スィンに心配されるほど、落ちぶれちゃいねえよ」
木々の間を猿のように飛び回りながら、王子を救った射手はつぶやいた。

第百二話　手当

スィンとスネイプの目的地は、土の民が住む洞窟。
あらかじめ、王子を救出したクルラには先行して向かうよう言いつけておいた。
事実、クルラは既に先着して2人の到着を待っていた。

「あちゃぁ。王子様ってばキュウリまで突っ込まれちゃって♪」
クルラはキュウリをつついてみた。
気を失っているうなされている王子はキュウリをつつかれるたびに身体をピクンピクンと反応させていた。
「このまま死刑されていたら、クレイス史上最大の汚点だったわ。まぁ、過ぎたことを言っても仕方ないから、2人が来るまで手当してようかしら」
クルラは言うや否や、キュウリを引っこ抜く。
「うぐ！」
王子が悲鳴を上げたが、別に目を覚ましたわけではなく。再びうなされ始めた。
「ちょっと面白いわね。もう一度突っ込んで抜いてみようかしら」
クルラは変な感情が目覚めようとしている自分に戸惑いを隠しきれなかった。

第百三話　まく

「スネイプ！　このままじゃ、あいつら合流地点までついてくるぜ」
「どこかで撒かないとな……」
２人は森の中を駆け抜けつつ、後ろの追っ手との距離が開かないことを確認した。
「お前の射撃でどうにかならないのか？」
「こんなところで俺の居場所をばらしたくはないな」
「ち、その間に俺は横にぴょい～っと抜けようと思ったのによ」
「幼馴染を犠牲にしてまで助かりたいか？」
「へ、お前ならいざとなったやるだろ」
「まぁ、そうだけどな。今がそうかもしれないぜ」
「冗談。お互い、相方が欠けたらこの危機は脱せられねえぜ」
「ごもっとも……。だがどうやって切り抜けるか」
「お任せを……」
「この声は……」
「こんの女狐！」
２人は聞き覚えのある声……。途中で無理やり追跡行に加わり、土壇場で裏切った女の声を忘れることはなかった。
「今は……、いいえ以前から私はあなた方のお味方ですわ」
「戯れ言を！　姿を現せ！　つばを吐きかけてやる！」
スィンが声の主に向かって罵声を浴びせた。
「私のことより、まずはウィード兵でしょう」
指をパチンならす音が聞こえると、どうしたことか兵士たちは一斉に横に向かって走り出し、あっという間に遠くへ走り去った。
「何をした？　いや、その前に姿を見せろ」
「言われずとも出ていきますわ」
立ち止った２人の前に、木の蔭からローブに身をまとったマーナーが妖艶な笑みを浮かべて出てきた。

第百四話　つけ

その頃、広場では静寂が支配していた。
一体何が起こったのか、誰も理解できぬままに、空の処刑台を眺めていた。
だが、それも長くは続かなかった。
「冗談じゃない、俺達は処刑を見に来たんだ」
誰もが思いつつ、一番に口にすることを憚っていたが、一人が言えばあとは堤防が切れたかのようにさざ波となってざわめきが広がっていく。
ざわめきはやがて罵声となり、罵声はさらに怒号へと変わる。
そして一人の男が、先ほど投げ損ねたトマトを処刑台に投げつける。
それは決して誰かに当たるという類のものではないが合図としては十分だった。
続けて皆が手にしたものを処刑台に投げつける。
その場にいた処刑人は、腕で顔をかばいつつ、王将軍に助けを求め、その姿を見た。
彼の口が動く。言葉は処刑人には届かない。
だが言いたいことは、その不適な笑みですぐにわかった。
「ウィード刑法第四十二条……、第二項……。刑の執行を損じたときは……、その執行の責は刑と同等とする！」
処刑人は条文を思い出し、辺りを見回す。
かつて部下だった者達の目つきが変わっている。死刑囚を見る目で己を見ている。
「お、お助けを！　王将軍様！　私はあなたに忠誠を……！」
王将軍は彼の言葉に耳を貸すことなく、その場を去って行った。
「王将軍さ……！」

第百五話　熱狂

広場に鬱積した不満は、新たに見つけた代わりのはけ口に向かって奔流した。
だが、流れとはいつか去っていくもの。
日が傾くころには、人影がまばらになっていく。
「う、臭いのう」
後片付けを任された老人が鼻をつまむ。
彼は普段から広場の掃除をすることで日々の糧を得ていたが、この日は途方にくれていた。
あちこちに散らばった野菜屑くずをかき集めるだけでも相当な量だ。これに加えて見物客の礼儀のなさ、食べこぼし飲み残しがあちこちに放置され放題。
老人は見上げて天を呪った。処刑台から振り子のようにぶら下がっているものが視界に入る。
「それは放置で良いぞ、7日間晒せ、との御達示だ」
警備にあたっていた兵士が指示を出す。
が、老人にとっては真っ先に片付けたのだ。
すでに糞尿が垂れ流されている。ここから腐った肉や体液が地面を汚すと思うと耐えられなかった。

第百六話　目覚め

「あら？　お目覚め？」
アレックスはゆっくりとまぶたを開くと視界に入ったクルラの姿に何度も瞬いた。
「天使？　そうか、僕は天国に……」
「何変なこと言ってるのよ？　どっちかというと小悪魔の私を天使とか」
クルラはベシッとアレックスの頭をはたいた。
「いたっ！　もっと怪我人をいたわってよ」
「ほっほう～。そこまで手当してあげた私に礼もなく口答えですか。なんなら怪我を増やしてさしあげましょうか？」
「い、いや遠慮しておくよ……。それよりもここは？」
「あなたが捕われたときから私達が拠点にしていた小屋よ。土の民の坑道の出口から程近いところよ」
「捕われた……。やはりあれは夢じゃないのか」
「ええ、あなたは捕われ、ウィードの人々の前で辱めを受け、処刑執行直前に助け出されたのよ」
「……」
アレックスは思いだしくない事実を突き付けられうなだれるしかなかった。
「それでも生きている……。あなたは、だぁれ？」

第百七話　覚醒

「え？」
突然の質問にアレックスはぽかんとした表情となった。
「もう一度聞きます。あなたはだぁれ？」
「僕は……。」
回想する。直近の出来事……。敵国にとらえられ、辱めの上、処刑されそうになった。
これではとても王子だ！　なんて言いきれない。
「あなたの全てがあそこにあるわけ？　ここまでたどり着いたあなたは何者？」
クルラのささやき声が耳から脳の奥に届く。
「でも、それはスネイプやスィン達の力があったから……」
「あったから何？　確かになかったらたどり着けなかったかもしれない。でも、あってもたどり着けない人もいるものよ」
「だから、王子として胸を張れ、とでも言いたいのか？」
「クレイスは既に敗戦濃厚になっているわ。国民は逆転の旗印を求めているのよ」
「旗印になれというのか？」
「敵国に潜入し、拷問にも耐え抜いてかつ印璽を取り返してきた英雄……。たとえ、スネイプ達の力があってのこととはいえ、あなたという指導者がいて初めてなしえたこと。国民はそう評価するものよ」
「でも、印璽は……」
「近くまで来ているの……」
「え？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7567h/

七人の追跡者

2011年10月7日03時21分発行